

幡鎌峯山遺跡
吉岡原遺跡第10次
高田遺跡第25次

発掘調査報告書

2013

掛川市教育委員会

幡鎌峯山遺跡
吉岡原遺跡第10次
高田遺跡第25次

発掘調査報告書

2013

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成22年度に現地発掘調査を実施し、平成23、24年度に整理調査を行った幡鎌峯山遺跡、吉岡原遺跡第10次、高田遺跡第25次の発掘調査報告書である。
2. 調査は、茶園の改植に伴う緊急発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にかかわる期間、担当は、以下の通りである。
幡鎌峯山遺跡
確認調査 平成21年12月24、25日 大熊茂広
本発掘調査 平成22年5月13日～10月6日 井村広巳
吉岡原遺跡第10次
確認調査 平成22年5月13日 前田庄一
本発掘調査 平成22年11月16日～12月28日 井村広巳
高田遺跡第25次
確認調査 平成21年9月9日 大熊茂広
本発掘調査 平成22年8月26日～11月19日 大熊茂広
4. 本書の執筆・編集は、井村広巳が行った。
5. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、以下の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝する。(敬称略)
木村弘之、鈴木敏則、松下善和、松本一男、向坂鋼二
6. 調査によって得られた資料および出土遺物は、掛川市教育委員会社会教育課が保管している。

凡 例

1. 本書で用いる座標値は、世界地計測に基づく。方位は座標北、L = 標高である。
2. 遺構の略番号は以下の通りである。
幡鎌峯山遺跡・吉岡原遺跡第10次
SB：住居跡 SH：掘立柱建物 SP：小穴 SK：土坑 SD：溝
高田遺跡第25次
SH：住居跡 SB：掘立柱建物 SP：小穴 SK：土坑
3. 遺物番号は、遺物の種別にかかわらずなく、連番を付している。

目 次

例言 凡例

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	遺跡をめぐる環境	1
	(1) 地理的環境	1
	(2) 歴史的環境	1
II	幡鎌峯山遺跡	5
1	調査に至る経緯	7
2	調査の方法と経過	7
3	調査の成果	8
	(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡	8
	(2) 古墳時代後期の住居跡	10
	(3) 弥生時代の小穴	11
	(4) その他の小穴	12
III	吉岡原遺跡第10次	37
1	調査に至る経緯	39
2	調査の方法と経過	39
3	調査の成果	40
	(1) 竪穴住居跡	40
	(2) 掘立柱建物跡	42
	(3) 方形周溝墓	42
	(4) 土坑	43
	(5) 小穴	43
	(6) その他	43
IV	高田遺跡第25次	61
1	調査に至る経緯	63
2	調査の方法と経過	63
3	調査の成果	64
	(1) 竪穴住居跡	64
	(2) 掘立柱建物跡	66
	(3) 小穴	66
	(4) 近世土坑墓	67
	(5) その他	67

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡位置図	3	第32図	SB07～09実測図	51
幡鎌峯山遺跡			第33図	SB09、13実測図	52
第2図	遺跡位置図・グリッド配置図	13	第34図	SB10、12実測図	53
第3図	遺構全体図	14	第35図	SK03、SP09、20、22、33、69 実測図	54
第4図	SB01実測図	15	第36図	出土遺物実測図（1）	55
第5図	SB02実測図	16	第37図	出土遺物実測図（2）	56
第6図	SB03、04実測図	17	第38図	出土遺物実測図（3）	57
第7図	SB05実測図	18	第39図	出土遺物実測図（4）	58
第8図	SB07実測図	19	第40図	出土遺物実測図（5）	59
第9図	SH01、02実測図	20	第41図	出土遺物実測図（6）	60
第10図	SH03実測図	21	高田遺跡第25次		
第11図	SH04、05実測図	22	第42図	遺跡位置図・グリッド配置図	68
第12図	E-3区柱穴列、SH06実測図	23	第43図	遺構全体図	69
第13図	SH07、09実測図	24	第44図	SH01実測図	70
第14図	SH08実測図	25	第45図	SH03、04、13実測図	71
第15図	SB06実測図	26	第46図	SH05、06実測図	72
第16図	SP216、251、257、322、428、 189実測図	27	第47図	SH07、08、09実測図	73
第17図	SP223、363、507実測図	28	第48図	SH09実測図	74
第18図	SP11、292、296、388、433、 435、520実測図	29	第49図	SH10、SB01実測図	75
第19図	出土遺物実測図（1）	30	第50図	SK01、SP42、57、94、115 実測図	76
第20図	出土遺物実測図（2）	31	第51図	出土遺物実測図（1）	77
第21図	出土遺物実測図（3）	32	第52図	出土遺物実測図（2）	78
第22図	出土遺物実測図（4）	33	第53図	出土遺物実測図（3）	79
第23図	出土遺物実測図（5）	34	第54図	出土遺物実測図（4）	80
第24図	出土遺物実測図（6）	35	第55図	出土遺物実測図（5）	81
第25図	出土遺物実測図（7）	36			
吉岡原遺跡第10次					
第26図	遺跡位置図・グリッド配置図	45			
第27図	遺構全体図	46			
第28図	SB01、SD01実測図	47			
第29図	SB03実測図	48			
第30図	SB04、05実測図	49			
第31図	SB06実測図	50			

- 30 SK03遺物出土状態（北から）
SK03（西から）
- 31 出土遺物（1）
- 32 出土遺物（2）
- 33 出土遺物（3）
- 34 出土遺物（4）
- 35 出土遺物（5）

高田遺跡第25次

- 36 全景（東から）
SH01（西から）
- 37 SH03、04、05（北から）
SH06（南から）
- 38 SH07（北から）
SH09 遺物出土状態（北から）
- 39 SH08、09（西から）
SB01（北から）
- 40 SP42 遺物出土状態（南から）
SP69 遺物出土状態（北から）
SK01 遺物出土状態（西から）
- 41 出土遺物（1）
- 42 出土遺物（2）
- 43 出土遺物（3）
- 44 出土遺物（4）

調査参加者（順不同）

現地調査

長谷川勇次郎 藤田理恵 藤田弘 向川隆 松浦弘司 深田重男 藤田房幸 溝口玉緒 多賀一美
松浦良和 太田敏子 福田貞夫 野中きみ子 池田正夫 鈴木辰江 山崎富士男 渥美憲鋭
山崎シズ 萩田ふみ 笠谷みゆき 鈴木はつ子 長尾秀雄 寺沢巧 福田一郎

整理作業

榛葉豊子 笠谷みゆき 早乙女のぞみ 徳川浩 竹田徳子 太田敏子 溝口玉緒

I はじめに

1 調査に至る経緯

掛川市は、東経138度00分、北緯34度45分が通り、日本の国土のほぼ中央に位置する。静岡県内では、大井川と天竜川の間の中東遠に位置している。お茶の生育に適した豊かな自然環境に恵まれ、全国荒茶生産量においては、全国有数の生産量を誇っている。なかでも市内の北西部を流れる二級河川原野谷川が形成した河岸段丘上には、広大な茶園が展開している。この段丘上には多くの遺跡が分布しているが、茶園を経営していくなかで、生産性の高い優良な茶葉を確保するために行う茶園の改植により、遺跡が破壊される恐れが生じている。掛川市教育委員会では、このような状況となった遺跡に対し、記録保存を目的とした発掘調査を実施しており、今回調査の対象となった3地点も茶園の改植の計画を受け、本発掘調査に至ったものである。

2 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

掛川市は、北部は森林地帯、中央には小笠山丘陵、南には遠州灘に面する起伏に富んだ地形からなっている。掛川市の最高点である八高山（標高832.1m）を源とする原野谷川は、上流では蛇行しながら北西から南西に流れ、小規模な河岸段丘を形成している。そして、中流域では南に流れを変え、西岸には和田岡原と呼ばれる東西約1.2m、南北約2.2mに広がる段丘を形成している。

幡鎌峯山遺跡は、原野谷川が南に向きを変える原谷地区の小さな段丘上に位置し、当遺跡からは、原野谷川を東に間近に見下ろすことができる。周囲は小さな開析谷が入りこみ、遺跡が位置する丘陵の東側谷に沿うように天竜浜名湖鉄道が、森町方面に向かって西へ方向を変えている。幡鎌峯山遺跡は、東西120m、南北600mに広がり、遺跡が立地する台地面は南に傾斜しているが、細かくは、標高70～80mと、標高60m前後に平坦面をもっていると見ることができる。今回の調査地点は、上段の平坦面に位置している。東側の河川敷との比高差は、約30mを測る。

吉岡原遺跡や高田遺跡が位置する和田岡原段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分される。吉岡原遺跡は、上位段丘に広がっているが、今回の調査地点は遺跡の範囲内でも、その東端に位置する。また、高田遺跡は下位段丘面に立地するが、北は標高50m、南は標高40mと緩やかに傾斜している。今回の調査地点は、標高48m付近で、段丘の東端に位置する。

(2) 歴史的環境

ここでは、3遺跡周辺の原野谷川流域における歴史的環境を概観していく。吉岡原遺跡と高田遺跡が位置する和田岡原は、茶樹の改植による発掘調査が数多く実施されてきたため、掛川市内でもその様相は比較的明らかにされている地域である。一方、幡鎌峯山遺跡が位置する原谷地区では調査例が少なく、遺跡が存在する幡鎌地区での発掘調査は、今回が初めてである。平成12年以降、第二東名の建設（現新東名）に伴う発掘調査の成果が明らかにされ、原野谷川上流の様相が知られることとなった。

旧石器・縄文時代

平成9年に調査された溝ノ口遺跡、平成19年に調査された瀬戸山Ⅰ遺跡からスクレイパーが出土し、原野谷川流域における人々の活動は、旧石器時代まで遡ることが明らかになった。

縄文時代では、高田上ノ段遺跡で表採された槍先形尖頭器が最も古い石器であり、草創期に遡る可能性が高い。瀬戸山Ⅰ、Ⅱ、高田遺跡で押型文土器が発見され早期に遡るが、遺跡の性格等においては、不明な点が多い。中期になると遺跡数も増え、中原、高田、今坂遺跡で石囲い炉を使う竪穴住居跡が発見されている。また、幡鎌峯山遺跡の北に位置する上ノ平遺跡からは、支柱穴と炉跡が検出されており、当期の住居跡と推定している。また十数基の落とし穴も発見されている。その後、後晩期になると遺跡数は減少するようで、現状において発掘調査例はない。

弥生時代

弥生時代になると、中期中葉の土器棺墓が、今坂遺跡で発見されている。また、女高Ⅰ遺跡では中期後葉の方形周溝墓が確認されるなど、墓域の存在が明らかとなった。後期になると、遺跡は爆発的に増加し、吉岡原、高田原の段丘上では、重複関係にある竪穴住居跡群や掘立柱建物跡に至る地点で確認され、多くの集落が営まれていたことが認められる。また、前述した上ノ平遺跡においては、弥生時代後期前葉から古墳時代前期の集落の変遷が、確認されている。

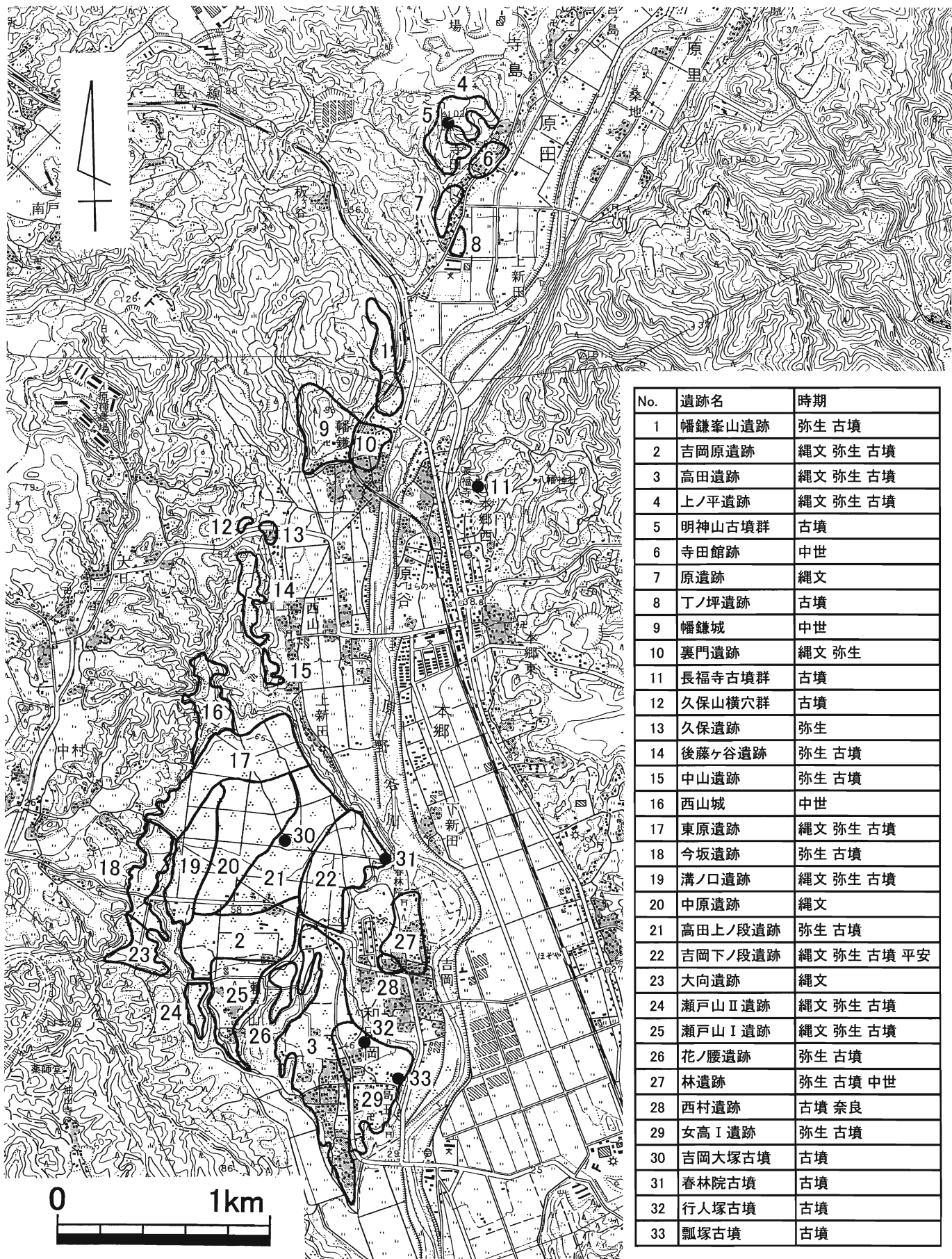
古墳時代

弥生時代後期に数多く確認された集落は、古墳時代前期に継続されるが、次第に減少していく傾向にある。しかし、1辺7mを測る大型竪穴住居跡が高田遺跡や瀬戸山Ⅰ遺跡などで確認されており、集落の様相は弥生後期と異なっているといえる。古墳時代中期になると、全長63mの前方後円墳である瓢塚古墳をはじめとする和田岡古墳群が、段丘の縁辺部に造られている。これらの首長墓の他に刀子や直刀を副葬した土坑墓や方墳、円墳など小規模古墳が認められる。今坂遺跡で確認された土坑墓は、長さ4.65m、幅2.55mのやや大型の掘り方をもつ土坑墓で、鉄剣が出土した。またこの時期の竪穴住居跡が女高Ⅰ遺跡で確認されている。和田岡古墳群を造営した集団の動向は、周辺における今後の調査例の増加によって明らかにされるであろう。

古墳時代後期では、高田上ノ段遺跡において6世紀前半に築造されたと考えられる円墳の周溝を確認しているが、これ以上の資料は現段階では認められない。また、原野谷川左岸の長福寺1号墳は、直径約17mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とした古墳である。上ノ平遺跡では、古墳時代終末から奈良時代の建物跡が確認されている。

参考文献

- | | | |
|-------------|------------------|-------------------------------|
| 掛川市教育委員会 | 1987 | 『吉岡原遺跡発掘調査報告書概報』 |
| 掛川市教育委員会 | 2000 | 『溝ノ口遺跡』 |
| 掛川市 | 2000 | 『掛川市史 資料編 古代・中世』 |
| 中日本高速道路株式会社 | (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 | |
| | 2008 | 『上ノ平遺跡』(第1分冊) |
| 中日本高速道路株式会社 | (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 | |
| | 2008 | 『上ノ平遺跡』(第2分冊) |
| 掛川市教育委員会 | 2008 | 『市内遺跡発掘調査報告書』 |
| 掛川市教育委員会 | 2009 | 『今坂遺跡第6次調査 瀬戸山Ⅱ遺跡 高田遺跡第21次調査』 |
| 掛川市教育委員会 | 2012 | 『第8回 出土文化財展』 |



No.	遺跡名	時期
1	幡鎌峯山遺跡	弥生 古墳
2	吉岡原遺跡	縄文 弥生 古墳
3	高田遺跡	縄文 弥生 古墳
4	上ノ平遺跡	縄文 弥生 古墳
5	明神山古墳群	古墳
6	寺田館跡	中世
7	原遺跡	縄文
8	丁ノ坪遺跡	古墳
9	幡鎌城	中世
10	裏門遺跡	縄文 弥生
11	長福寺古墳群	古墳
12	久保山横穴群	古墳
13	久保遺跡	弥生
14	後藤ヶ谷遺跡	弥生 古墳
15	中山遺跡	弥生 古墳
16	西山城	中世
17	東原遺跡	縄文 弥生 古墳
18	今坂遺跡	弥生 古墳
19	溝ノ口遺跡	縄文 弥生 古墳
20	中原遺跡	縄文
21	高田上ノ段遺跡	弥生 古墳
22	吉岡下ノ段遺跡	縄文 弥生 古墳 平安
23	大向遺跡	縄文
24	瀬戸山Ⅱ遺跡	縄文 弥生 古墳
25	瀬戸山Ⅰ遺跡	縄文 弥生 古墳
26	花ノ腰遺跡	弥生 古墳
27	林遺跡	弥生 古墳 中世
28	西村遺跡	古墳 奈良
29	女高Ⅰ遺跡	弥生 古墳
30	吉岡大塚古墳	古墳
31	春林院古墳	古墳
32	行人塚古墳	古墳
33	瓢塚古墳	古墳

第1図 周辺遺跡位置図

幡鎌峯山遺跡

Ⅱ 幡鎌峯山遺跡

1 調査に至る経緯

平成21年度に当地点において茶園改植の計画があることがわかり、耕作者との協議の上、同12月24、25日に確認調査を実施した。計画予定地内に幅0.7m、長さ35mのトレンチと幅0.7m、長さ25mのトレンチの2本を設定した。その結果、地表下0.4～0.6cmから弥生時代の竪穴住居跡等を検出するとともに、土器の存在を確認した。この結果を受け耕作者と再協議した結果、改植の深耕が遺構確認面より深くに及び、遺跡の消滅が免れない状況であることが明らかとなったため、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

平成22年4月22日付けで、掛川市教育委員会は静岡県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進達した。これに対し、平成22年5月6日付けで、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

2 調査の方法と経過

調査区の設定 今回の調査区は、改植が行われる範囲（1,115㎡）とした。そして、対象地の地形に合わせて5m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。東西の列を東からA、B、C…のアルファベットで、南北の列を北から1、2、3……の数字で表すことにした。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北東角の杭の名称と一致させた。

また、調査地点を国家座標で記録するために、基準点測量を業者に委託し実施した。

また、排土置き場を確保する必要から調査区を東区、中区、西区の三つに分割し、中区の調査を5月17日～7月9日まで、東・西区を7月20日～10月6日まで実施した。

重機掘削 耕作土の除去を、重機（バックホー）、クローラードンプを1台ずつ用いて行った。

遺構検出 最初は人力により遺構確認面において、粗掘を行った。鍬と鋤簾を使用し、5～10cmほど地表を掘り下げた後、鋤簾を用いて地表を丁寧に取り遺構を検出した。

遺構掘削 検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、土層帯を設定し観察を行った。

遺構実測 遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図を1/10の縮尺で、平面図と土層断面図を1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）1台と35mm判（カラーネガ、リバーサル）2台を使用した。調査区遠景、全景の垂直写真等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて行った。

現地説明会 8月28日、市民向けの現地説明会を開催した。参加者は69名であった。

整理作業 出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土位置を注記し、また接合復元した後、実測等の作業を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に編集し清書した。そして、遺物の写真撮影、報告を原稿にまとめ、印刷に付した。

3 調査の成果

弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡4軒分、周囲に溝をめぐらした平地式住居と考えられる遺構2軒分、掘立柱建物跡9棟分の他、数多くの小穴を確認した。この他に縄文時代中期前葉と弥生時代中期の小穴、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒分を確認した。

(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡

SB01 (第4、19図)

B・C-5・6区に位置する。規模は東西5.5m、南北5.2mを測り、形状は隅丸方形を呈する。ほぼ中央に皿状の炉跡とその南東に焼土が確認された。褐灰色土の貼床は、掘り方の壁から1mの中央寄りに検出された。貼床除去後にSH06の柱穴が検出されたこと、また柱穴埋土上に炉跡が形成されていることから、SH06が先行することは明らかである。支柱穴の距離は東西3m、南北2.7mを測る。そして掘り方の南東隅からは、この竪穴住居跡に伴う排水溝と考えられる幅0.25m、深さ0.15mの溝が、南東方向へ延び、調査区外へと及んでいた。

出土遺物は、第19図の1～4である。1～4は、南東隅壁際の床面から出土した。1は、単純口縁の壺、2は壺底部である。3は台付甕の台部、4は器台の脚部である。器台の存在から古墳時代前期に位置づけられる。

SB02 (第5、19図)

C～E-7～9区に位置する。楕円形に巡る溝SD08が存在することから平地式住居とした。SD08は北側で幅1.3m、深さ0.15～0.18m、東側で幅1m、深さ0.18m、南側で幅0.5m、深さ約0.1m、西側で幅0.5m、深さ0.1mを測る。溝で囲まれた内側には、長軸9.4m、短軸8mを測る。内部には、4m×3.8mの規模の不整形な掘り込みが確認された。覆土には、北側部分で土器片の他、5cm大の焼土片や、炭が多く混入していた。また、溝SD08で囲まれた内側の東側と南側で焼土が確認された。そして、東から延びる幅0.35m、深さ0.5mの排水溝と考えられる溝が、検出された。切り合い関係のあるSH01の柱穴であるSP181、SH03の柱穴であるSP253の検出状況や土層堆積状況から、SH01、03がSD08より先行する。

出土遺物は、第19図の5～10である。5、6は同一個体で、不整形な掘り込みから出土した広口の小型壺である。7～10はSD08北東隅から出土した。7は壺の肩部で櫛刺突羽状文が施されている。8は壺底部、9、10はくの字口縁の甕の体部上半部である。

SB03 (第6図)

D・E-10区に位置する。掘り方の北側一部を調査した。長軸は、5mを測る。貼床や焼土は、確認されなかった。また出土遺物も認められなかった。

SB04 (第6、19図)

B-1・2区に位置する。東西2.8m、南北3.2mを測り、形状は、ややいびつではあるが方形を呈する。中央のやや北寄りに0.6×0.5mの焼土が確認された。北東隅には、壁溝と考えられる溝が確認された。貼床は、検出されなかった。支柱穴もはっきりしない。

出土遺物は、第19図の11～14である。11は折返口縁の壺の破片、12は高坏脚部である。13は、SB04内のSP413から出土した台付甕の台部である。14は、縄文土器で深鉢の底部である。

SB05 (第7、19図)

E・F-6・7区に位置する。規模は、東西6m、南北5.1mを測り、形状は東西に長い小判形を呈する。貼床は、確認できなかった。炉跡は、2ヵ所で検出したが、高低差が約8cmあり、建て替えの可能性が考えられる。主柱穴間の距離は、東西3m、南北2mを測る。壁溝は北西隅と南側において確認された。また、南東隅からは排水溝と思われる幅0.2m、深さ0.1mの溝が、約9m南へ延びていた。住居内を東西に横切る溝とSH07との切り合い関係は、不明である。

出土遺物は、第19図の15と16である。ともに小型の壺底部で、15は粗いハケ、16はミガキが施されている。

SB07 (第8、19、25図)

C～E-3～5区に位置する。規模の大きな溝SD04がコの字形に巡ることから平地式住居と考えた。溝は、北側で幅約0.3m、深さ0.1m、東側で幅0.6m、深さ0.2mを測る。主柱穴間の距離は、東西3.5m、南北3.4mを測る。炉跡は確認されなかった。

SD04の南端部からは、土器、石器、自然石がまとめて出土した。図示した遺物は、第19図17～20、第25図81と82である。17と18は壺の頸部から肩部の破片である。17は結節縄文、18は有段羽状文が施されている。19は壺底部、20は高坏脚部である。81は砂岩製の磨製石斧、82は磨石であり、縄文時代の石器と考えられる。

検出した掘立柱建物は、9棟であった。柱間は、すべて梁間1間×桁行2間である。規模や方位から大きく3つに分類することができる。

①面積が7～8㎡で、方位はN10°E～N13°Eである。SH01、SH02、SH04

②面積が13～14㎡であるが、方位は全く異なる。SH05、SH06

③面積が18㎡で、方位はN3°E～N7°Eである。SH07、SH08

上記の分類に当てはまらないのが、面積が10㎡で、方位N64°WのSH09、面積が20㎡で方位N11°Wの棟持ち柱を持つSH03の2例である。住居跡を切っていることが明確なものもあるが、同時期に存在していた建物配置の復元は、今後の検討課題である。

SH01 (第9図)

C・D-6・7区に位置する。規模は2.5×3mである。長軸の方位はN13°30'Eである。SP181は、SD08 (SB02の溝) より先行する。SP188には版築と柱痕が、SP174には柱痕が確認された。

SP140、174、188からは土器が出土したものの、小片のため図示はしなかった。

SH02 (第9図)

B・C-2区に位置する。規模は2.6×3.3mである。長軸の方位は、N10°00'Eである。

SP21、24、359からは土器が出土したものの、小片のため図示はしなかった。

SH03 (第10図)

B・C-7～9区に位置する。棟持ち柱をもつ掘立柱建物である。規模は、3.9×5.2m、棟持ち柱間は8.1mを測る。長軸の方位は、N11°00'Wである。SP222、253、259には、柱の痕跡が認められた。

SP222、232、236、245、253、261からは土器が出土したものの、小片であり図示しなかった。なお、SP245からは、2×1.5cm大の黒曜石が出土した。

SH04 (第11図)

F・G-5・6区に位置する。規模は、2.7×3.25mである。長軸の方位は、N10° 00′ Eである。すべての柱穴から土器は出土したが、小片のため図示しなかった。

SH05 (第11図)

B・C-5・6区に位置する。規模は3.7×3.85mである。長軸の方位はN33° 00′ Eである。SP266は、版築と柱痕を土層断面の観察において確認した。SB01とは切り合い関係にあり、SH05が先行する。

SP266、285、269、485からは土器が出土したものの、小片であり図示はしなかった。

SH06 (第12、25図)

A・B-5・6区に位置する。規模は3.56×3.82mである。長軸の方位はN73° 00′ Wである。SP351は、版築と柱痕を土層断面の観察において確認した。SB01とは切り合い関係にあり、SH06が先行する。

SP317、321、351、457から土器が出土したが、いずれも小片であるため図示しなかった。なお、SP351から第25図83の打製石斧が出土している。

SH07 (第13図)

E・F-6・7区に位置する。規模は3.6×5.05mである。長軸の方位はN 3° 30′ Eである。SP515は、版築と柱痕を土層断面の観察において確認した。SB05とは切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。

SP434、475、493からは土器が出土したものの、小片であり図示しなかった。

SH08 (第14、20図)

F・G-8～10区に位置する。規模は3.5×5.35mである。長軸の方位はN 7° 30′ Eである。

SP380、393、423から土器が出土した。SP423から出土した土器は、第20図の31と32で同一個体の広口壺である。口唇部には端面を持っている。体部外面には、ハケとミガキ調整が確認できる。

SH09 (第13図)

D-2・3、E-3区に位置する。規模は3.5×3.05mである。長軸の方位はN64° 00′ Wである。SP31、34、48、64から土器が出土したが、小片のため図示しなかった。

E-3区柱穴列 (第12図)

E-3区に位置する。南北に3つ柱穴が並び、その全長は4.3mである。西側に側柱列を想定すれば掘立柱建物跡となる。3つの柱穴から土器は出土したが、小片のため図示しなかった。

(2) 古墳時代後期の住居跡

古墳時代後期に位置づけられる竪穴住居跡を1軒検出した。今回の調査地内で、この時期に該当する遺構は、これだけであった。

SB06 (第15、20、25図)

E・F-5区に位置する。検出した竪穴住居跡は南側の半分であり、調査区外の北側に続いている。掘り方は1辺5mの方形を呈すると思われる。遺存状況は悪く、掘り方の深さは約5cmであった。東

壁で検出した竈は残りが悪く、天井部は残存していなかった。竈は部分的にそれを構成していた黄褐色の粘土と焼土が確認されたにすぎない。

出土遺物は、第20図21～30、第25図79、80である。いずれも床面より高い位置で出土した。21、22は坏蓋で、器径10cm前後、23、24は坏身で、器径11cm前後である。25は、半球形坏部高坏である。26～28は甕の体部片である。29は、土師器の高坏である。30は、端刃棘篋被鑿箭式である。口巻が残る。出土した須恵器の型式からⅣ期前半に位置付けられる。79は、緑色片岩製の打製石斧、80は、砂岩製の磨石であり、ともに縄文時代の石器である。

(3) 弥生時代の小穴

調査区内から約500の小穴を確認した。図示できる遺物が出土した小穴のみ取り上げる。

SP189 (第16、21図)

E-7区に位置する。規模は長径1.05m、短径0.9mで、形状は楕円形を呈する。覆土には、多量の焼土、炭のブロックが混入し、図示した第21図37の大型の壺は、底から出土した。口縁部内側には、結節縄文を施文した上に、円形貼付文を施している。また、肩部には有段羽状文の上に円形貼付文を施している。

SP216 (第16、20図)

C-7区に位置する。規模は長径2.4m、短径1.72mで、形状はいびつな楕円形を呈する。0.2～0.3m大の自然石と土器が出土した。

出土遺物は、第20図33の高坏脚部片である。

SP223 (第17、20図)

E-6区に位置する。規模は長径0.55m、短径0.4mで、形状はいびつな楕円形を呈する。検出面から土器が出土した。

出土遺物は、第20図35と36である。35は壺の頸部、36は口唇部に刺突をもたない甕の体部上半部である。

SP251 (第16、20図)

B-6・7区に位置する。規模は長径1.68m、短径1.18mである。出土遺物は、第20図34の高坏坏部片である。

SP257 (第16、21図)

B-6区に位置する。規模は長径0.5m、短径0.4mである。出土遺物は、第21図38の小型壺である。

SP322 (第16、21図)

B-5区に位置する。規模は長径0.6m、短径0.45mで、形状はいびつな楕円形を呈する。出土遺物は、第21図39の台付甕の台部である。

SP363 (第17、21図)

A-2区に位置する。規模は長径1.05m、短径0.8mで、形状は楕円形を呈する。土器片とともに炭が出土した。出土遺物は、第21図40の口唇部に刻目をもたない甕の体部上半部である。

SP428 (第16、20図)

G-7区に位置する。規模は長径0.54m、短径0.5mで、形状は円形を呈する。出土遺物は、第21図41の甕の体部上半部である。

(4) その他の小穴

SP11 (第18、23図)

D-1・2区に位置する。SP10に切られ、規模は不明である。出土遺物は、第23図46の縄文土器の深鉢の口縁部である。

SP292 (第18、23、24図)

B-4区に位置する。長径0.75m、短径0.67mを測る。出土遺物は、第23図49～57、24図58～71である。深鉢の口縁から胴部片であるが、底部は出土しなかった。口縁部は、半截竹管状工具で平行沈線を2条施し、その下方に刻みを施す。縄文を地文として、隆帯で半円形やV字形で区画した内側に、三角印刻を施し、半截竹管状工具で文様を描いている。これらの文様には企画性が認められず、口縁部から胴部にかけて、どのように文様構成であったのか、把握することは出来ない。体部下半は、器壁が薄くなっている。これらの土器は、縄文時代中期前半に位置づけられる。

SP296 (第18、25図)

A-4区に位置する。直径0.38mを測る。出土遺物は、第25図84の砂岩製の磨石である。

SP388 (第18、23図)

A-1・2区に位置する。長径0.9m、短径0.5mを測る。出土遺物は、第23図47と48図の縄文土器の深鉢の口縁部である。

SP433 (第18、22図)

E-8区に位置する。長径0.44cm、短径0.38cmを測る。出土遺物は、第22図42の甕の体部である。粗いハケが施されている。

SP435 (第18、22図)

F-5区に位置する。規模は長径0.86m、短径0.62mで、形状は楕円形を呈する。出土遺物は、第22図43の甕である。口唇部には、12方向につまみが施されている。体部は摩滅しているが、わずかに条痕文が認められた。

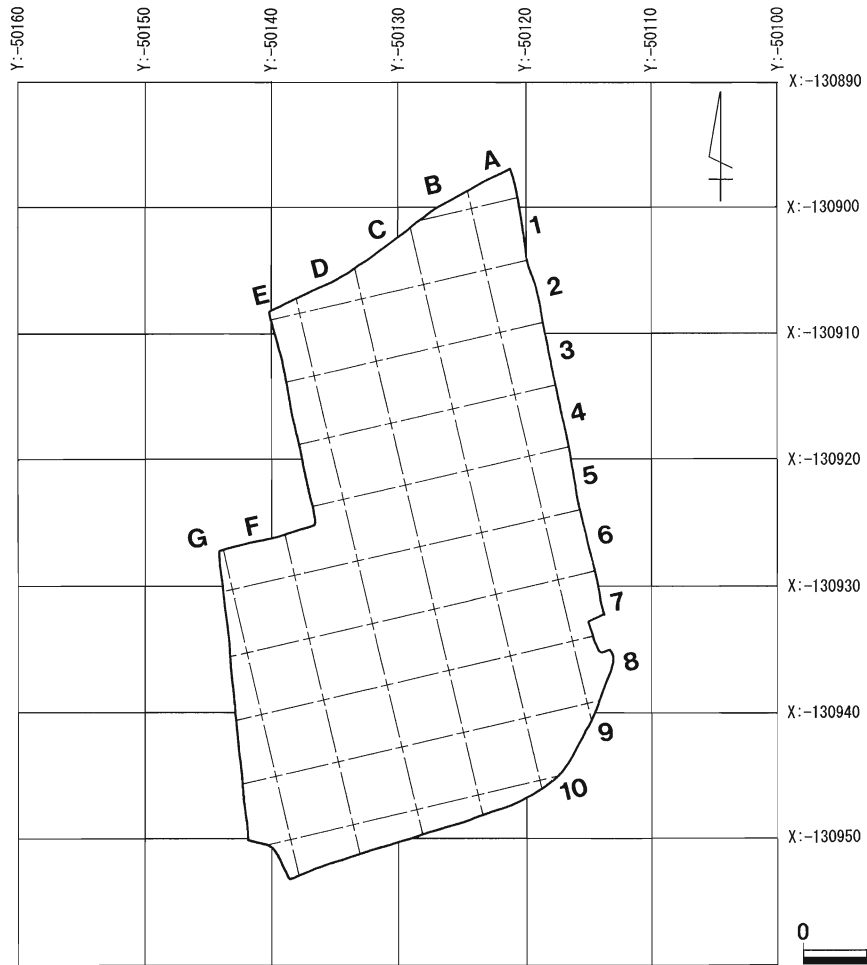
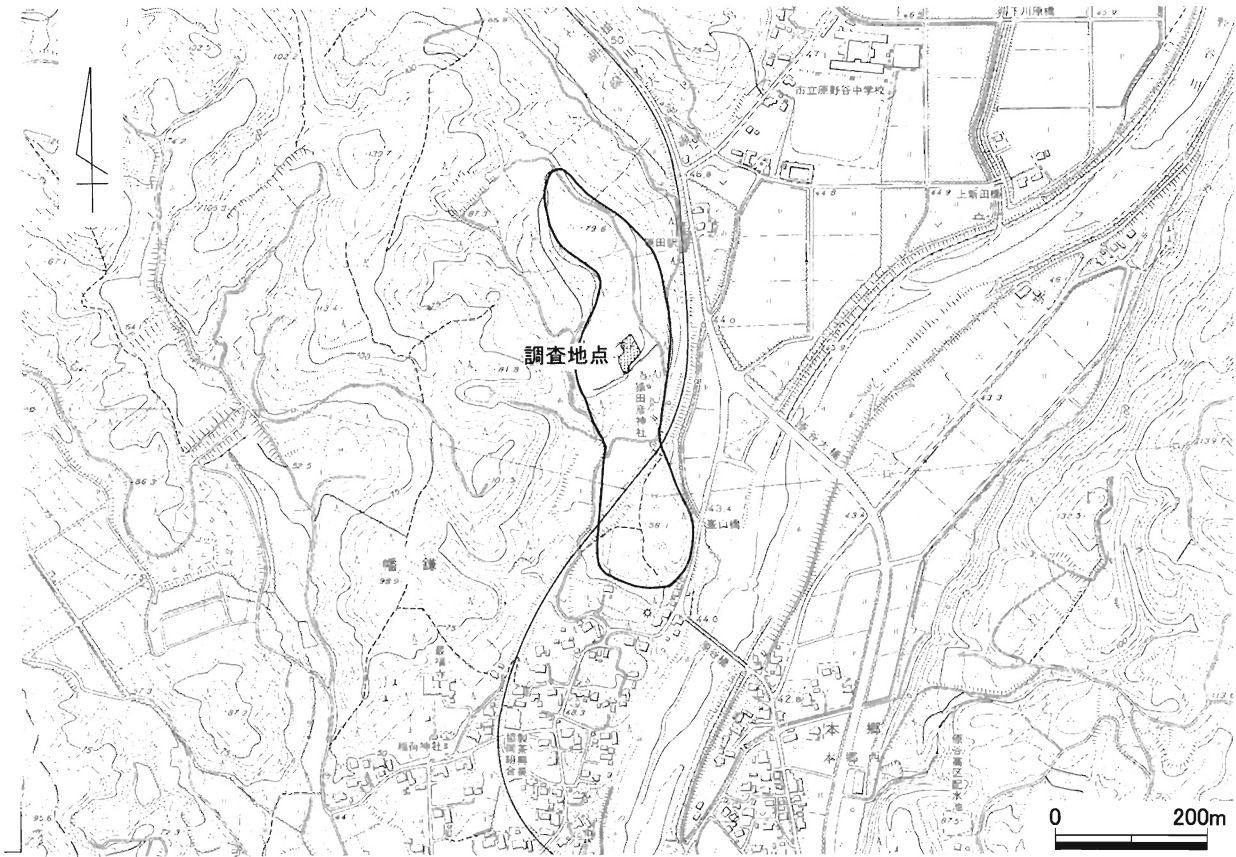
SP520 (第18、22図)

D-9区に位置する。規模は長径0.46m、短径0.34mを測る。出土遺物は、第22図44と45である。44は甕の上半部、45は壺の体部である。44は粗いハケ、45は羽状条痕が施されていた。

SP433、435、520から出土した土器は、弥生時代中期前葉の丸子式に比定される可能性がある。

SP507 (第17図)

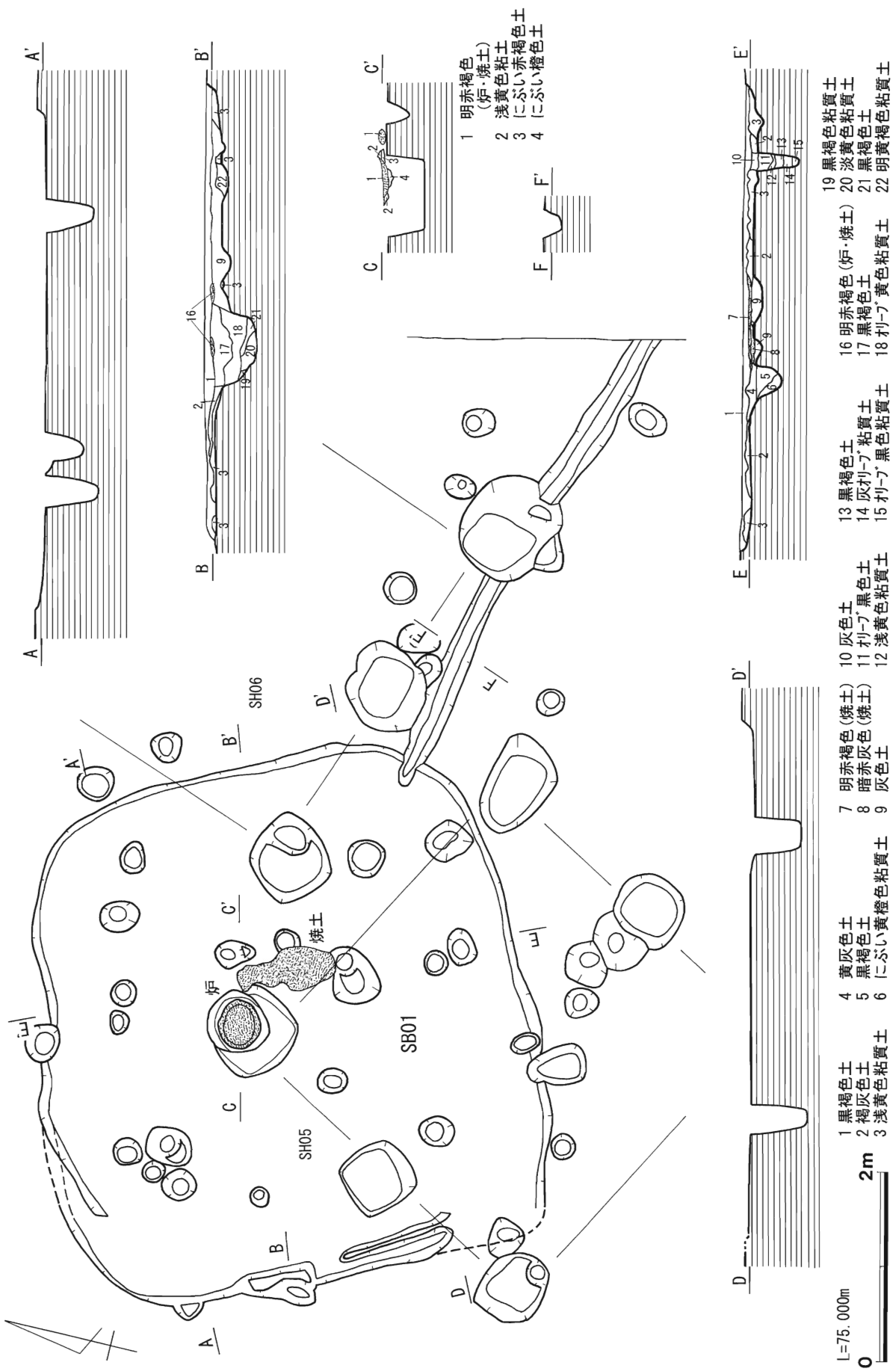
B-8区に位置する。規模は長径0.65m、短径0.58mで、形状はいびつである。深さ0.25mの掘り込みに、0.5×0.34m大の自然石が入れられていた。



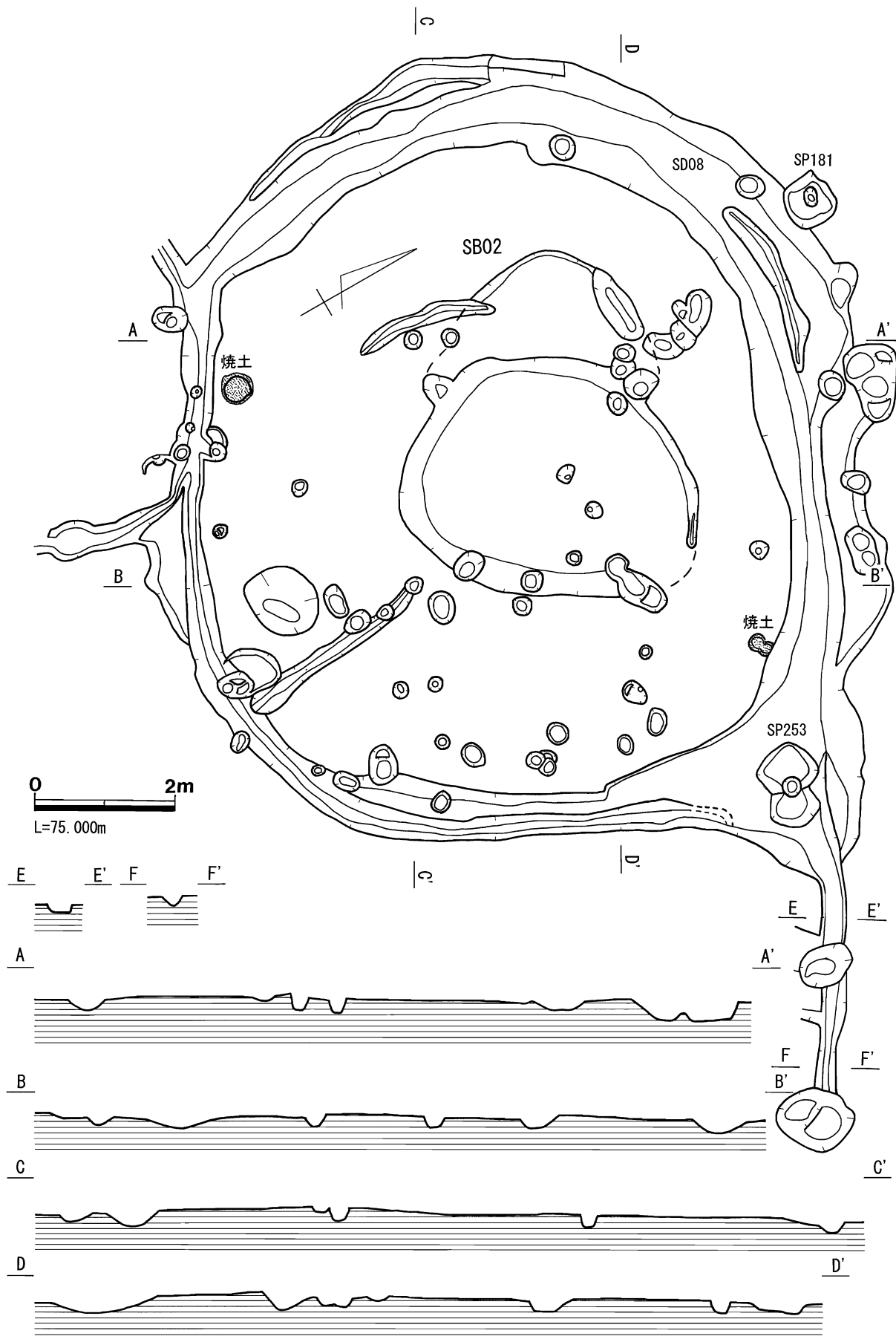
第2図 遺跡位置図・グリッド配置図



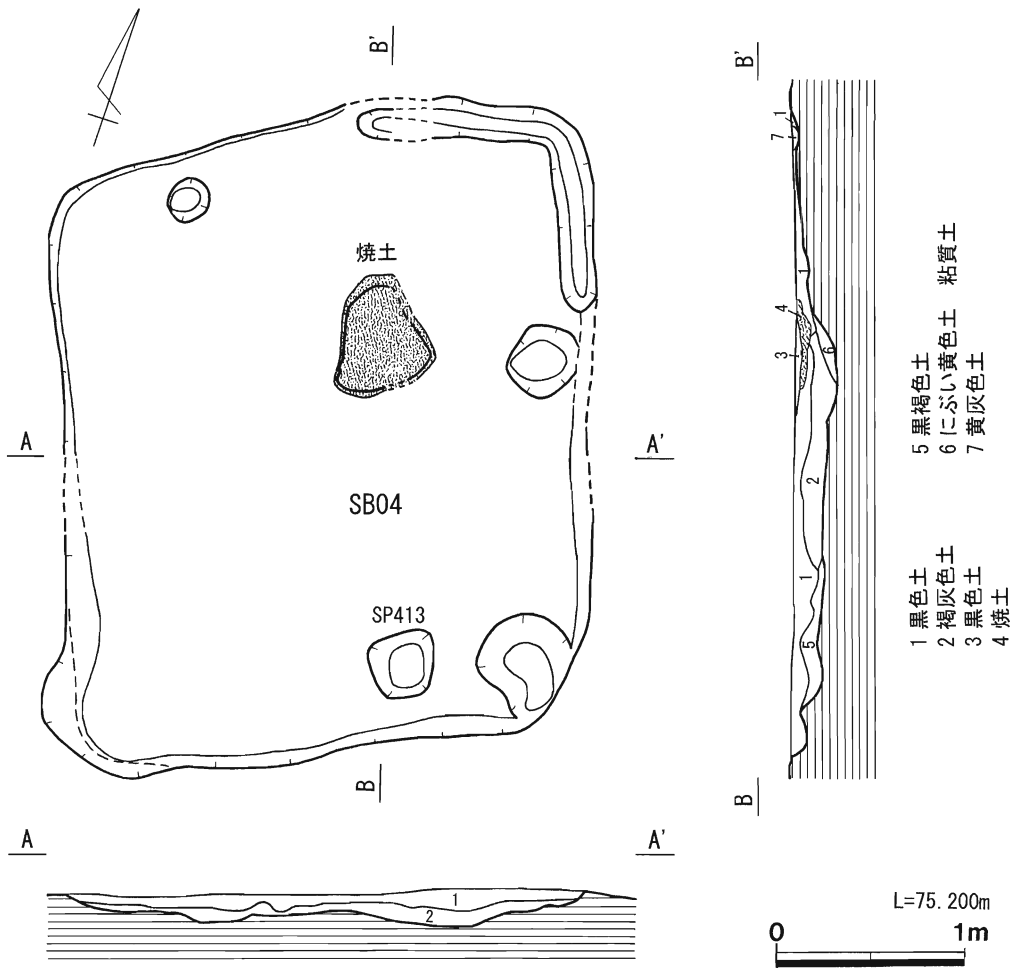
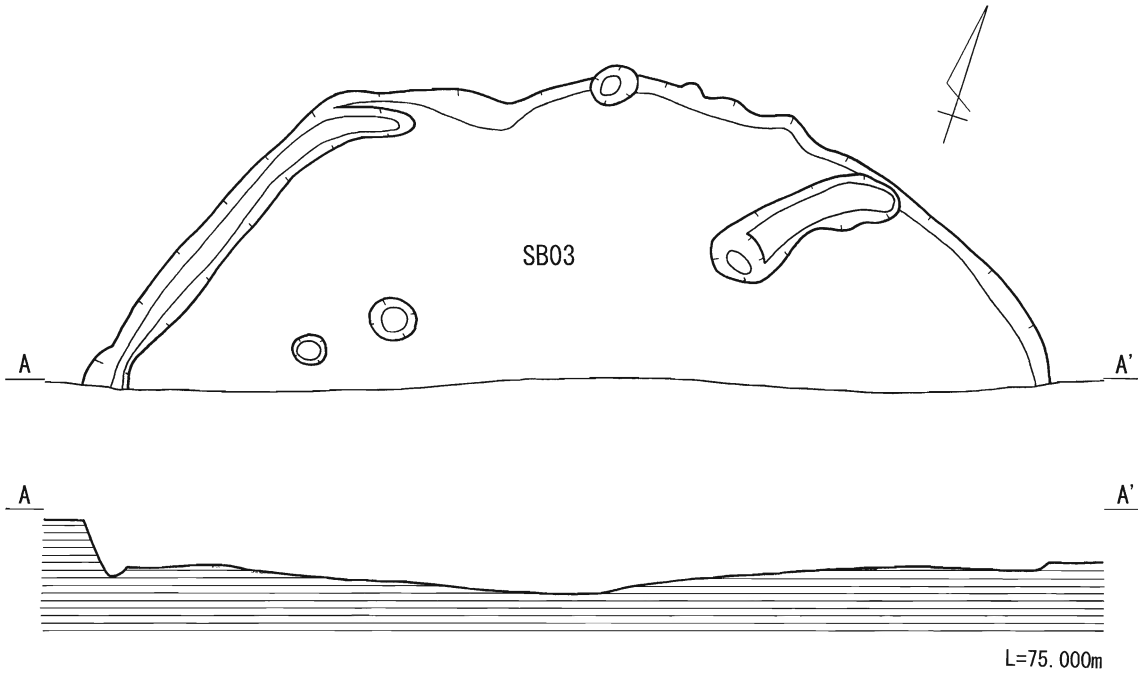
第3図 遺構全体図



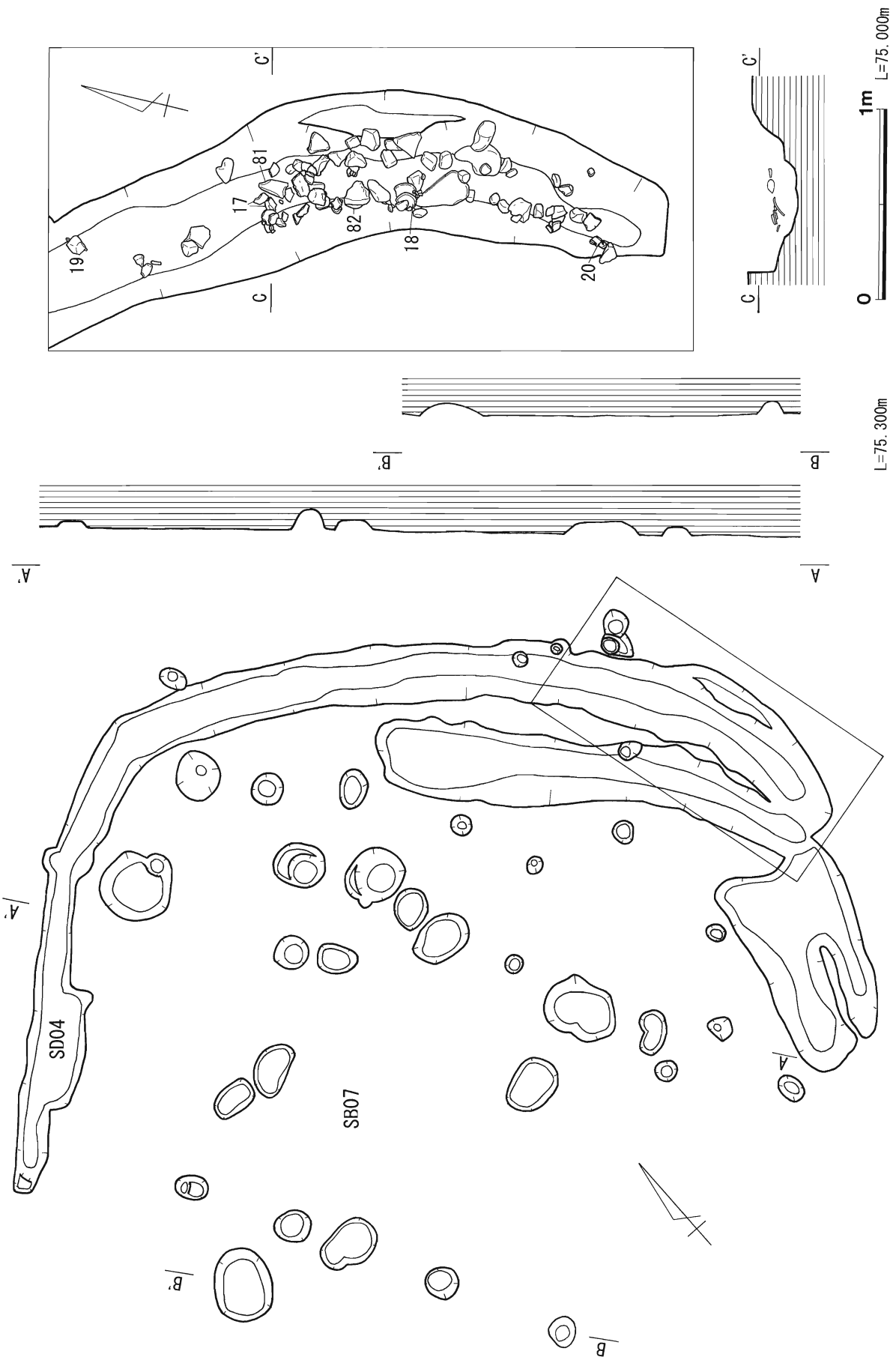
第4図 SB01実測図



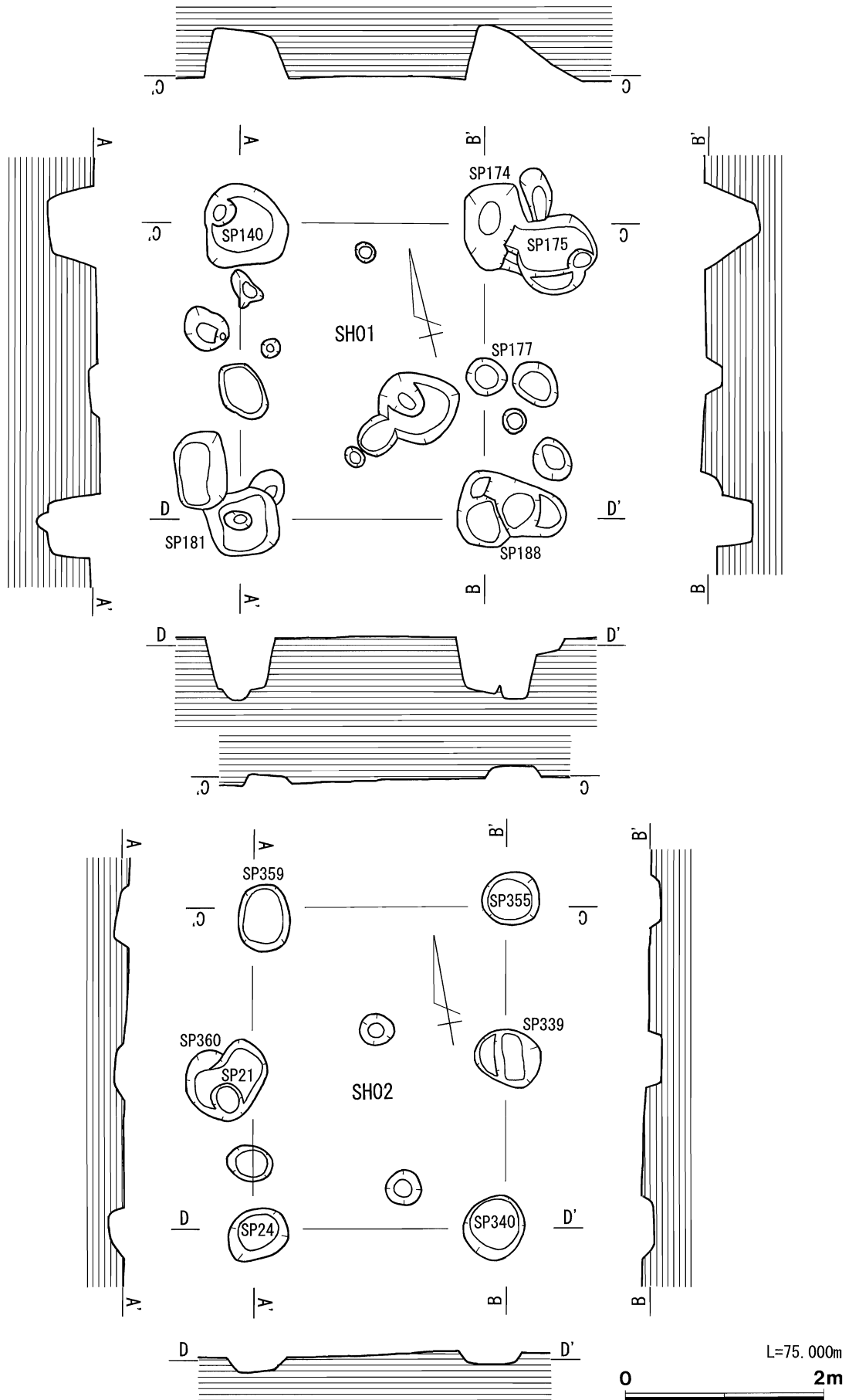
第5图 SB02实测图



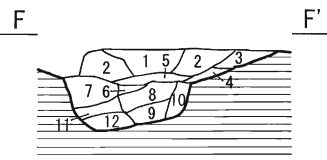
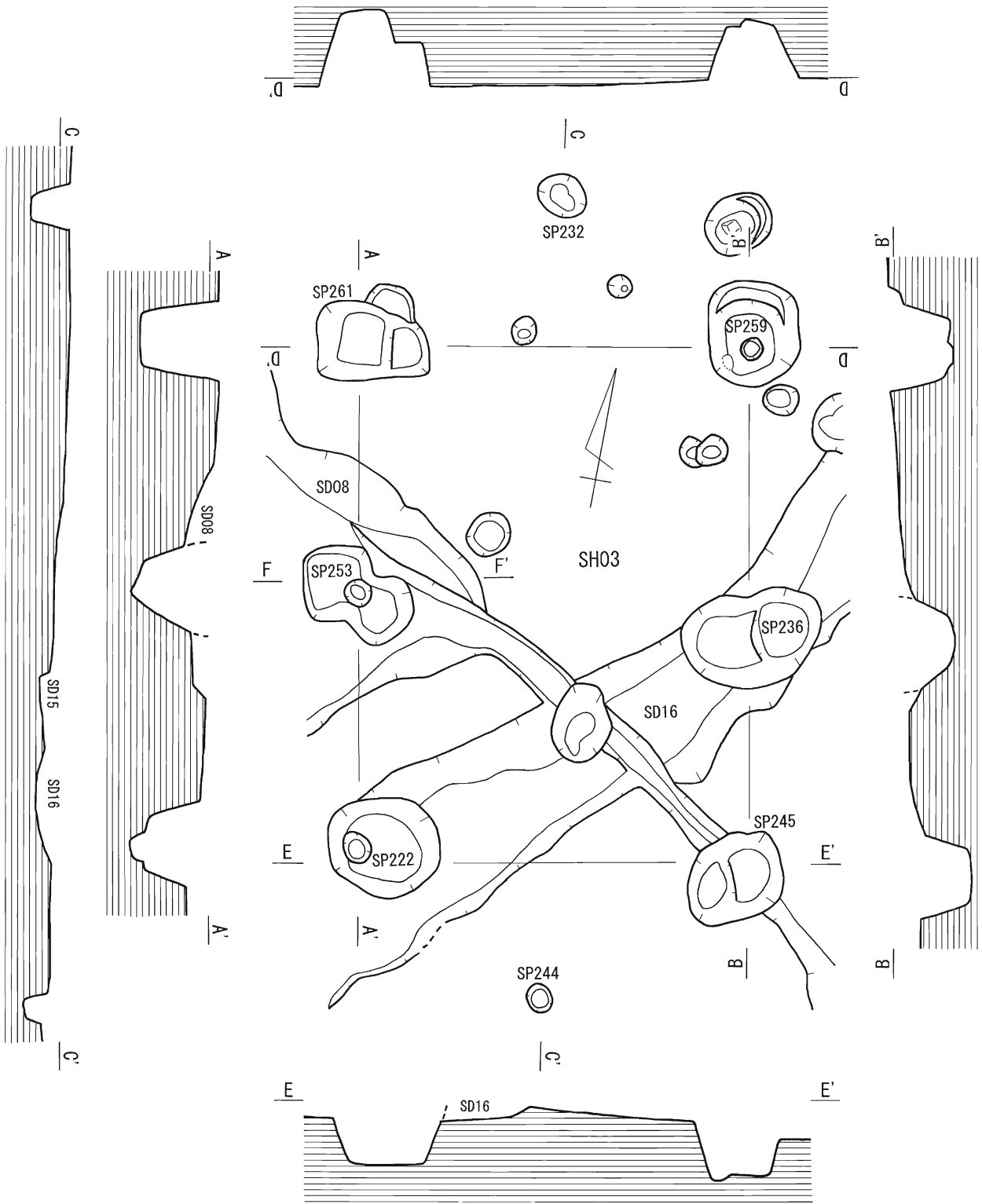
第6図 SB03、04実測図



第8図 SB07実測図



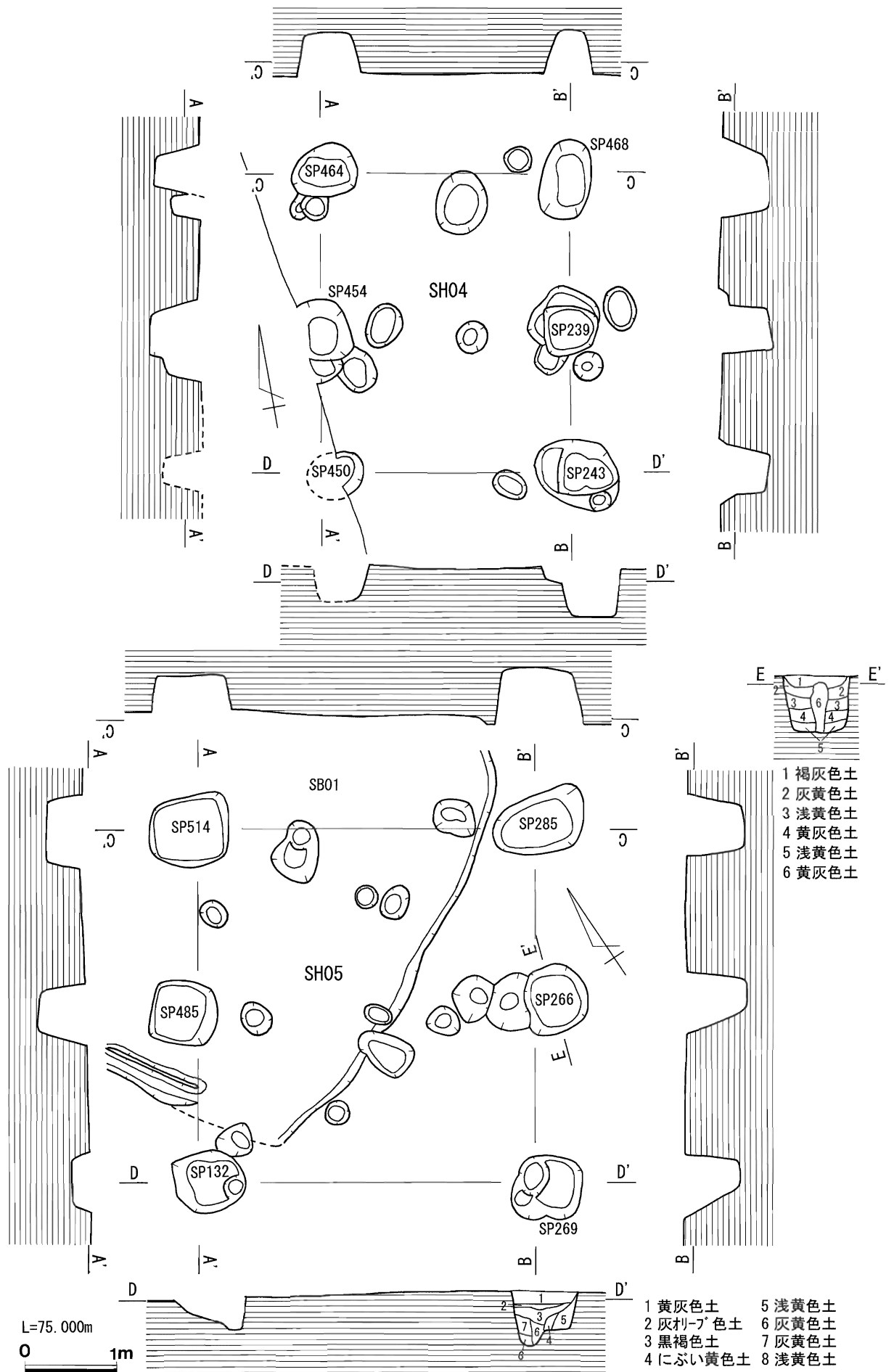
第9図 SH01、02実測図



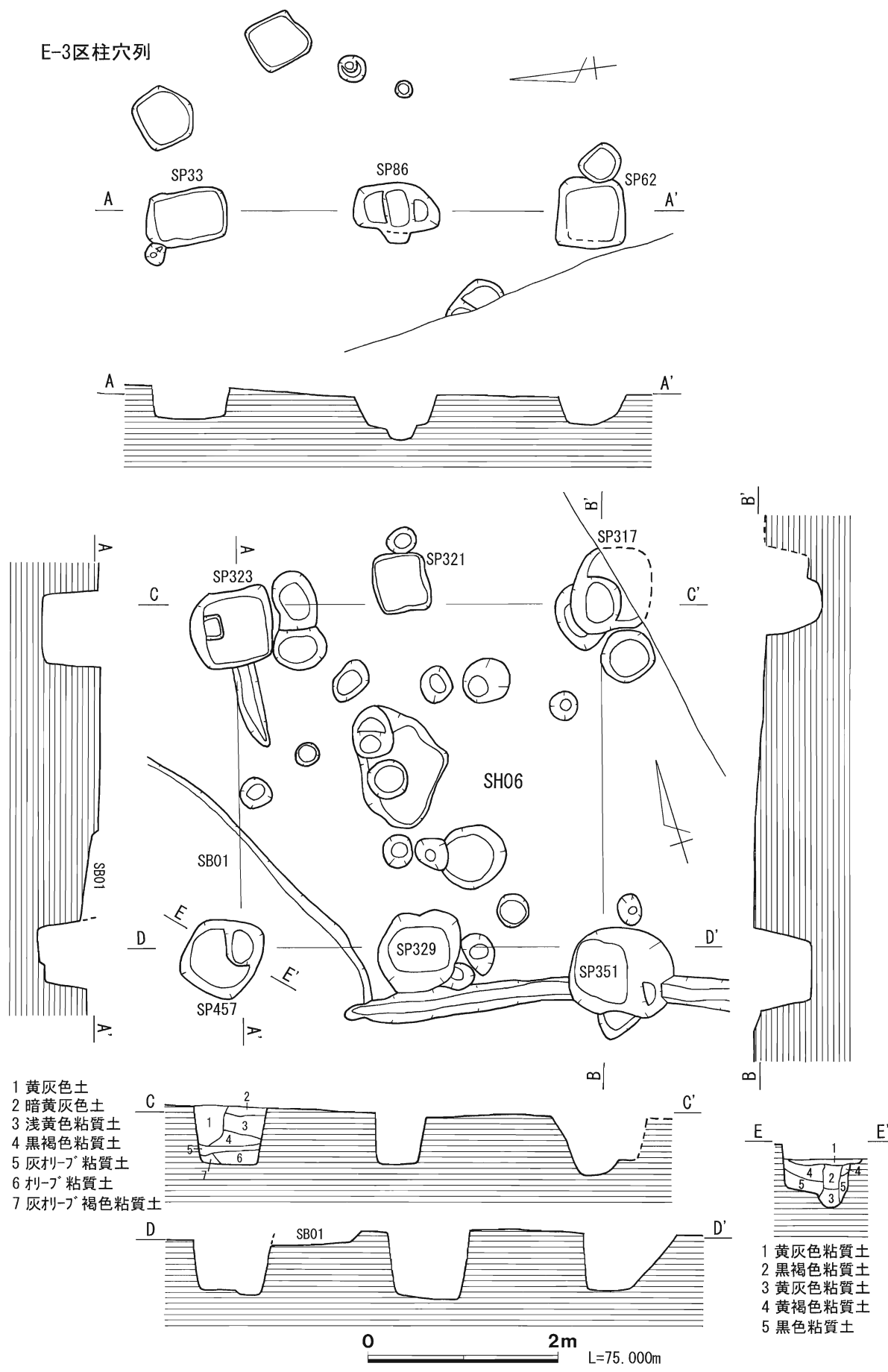
- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色土 | 7 灰判-ブ ^レ 色土 |
| 2 黒色土 | 8 灰色土 |
| 3 暗灰黄色土 | 9 灰判-ブ ^レ 色土 |
| 4 判-ブ ^レ 黄色土 | 10 灰白色土 |
| 5 黄灰色土 | 11 灰判-ブ ^レ 色土 |
| 6 灰判-ブ ^レ 色土 | 12 黒色土 |
- (灰色土にブ^レロック混り)



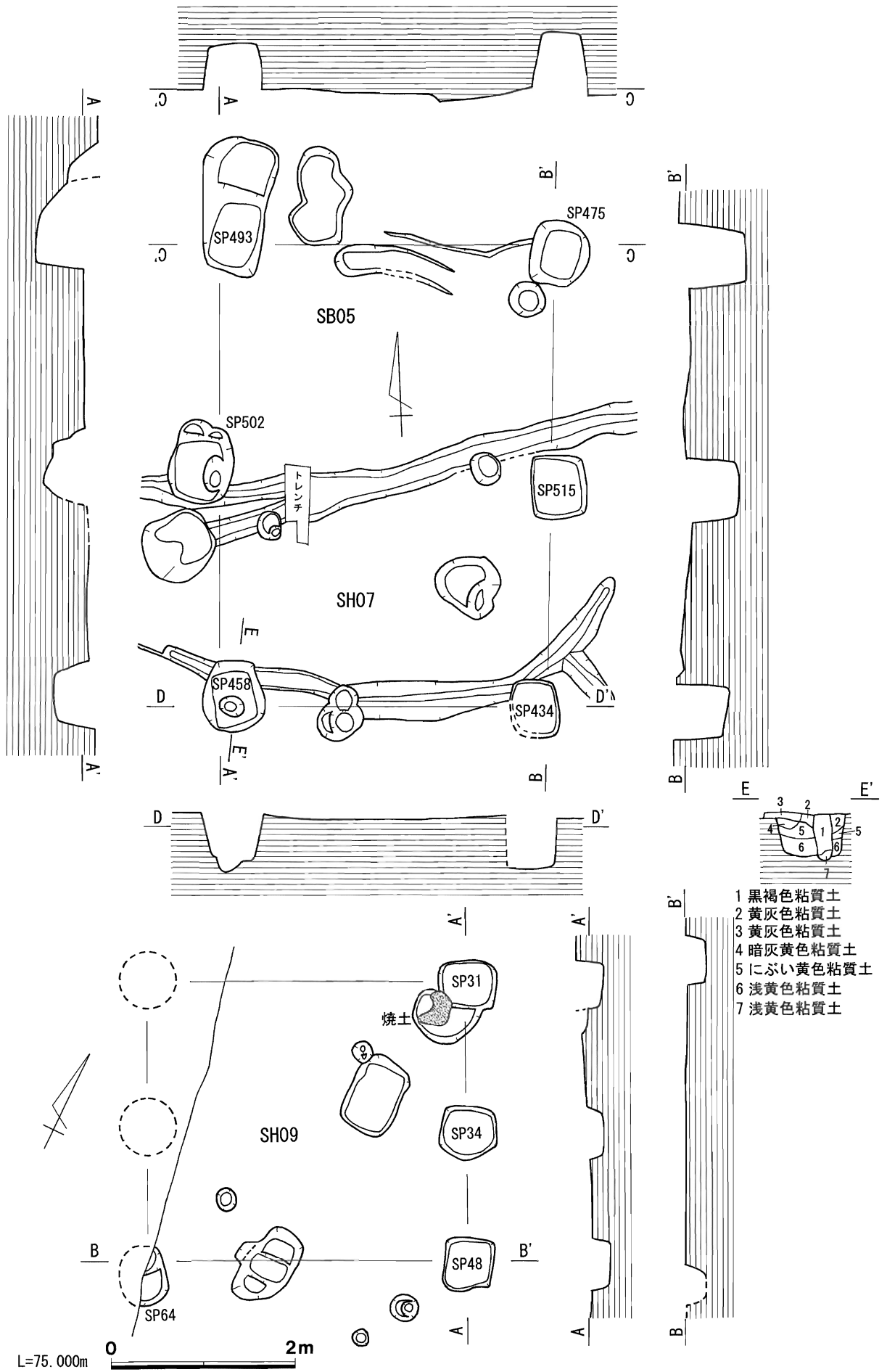
第10図 SH03実測図



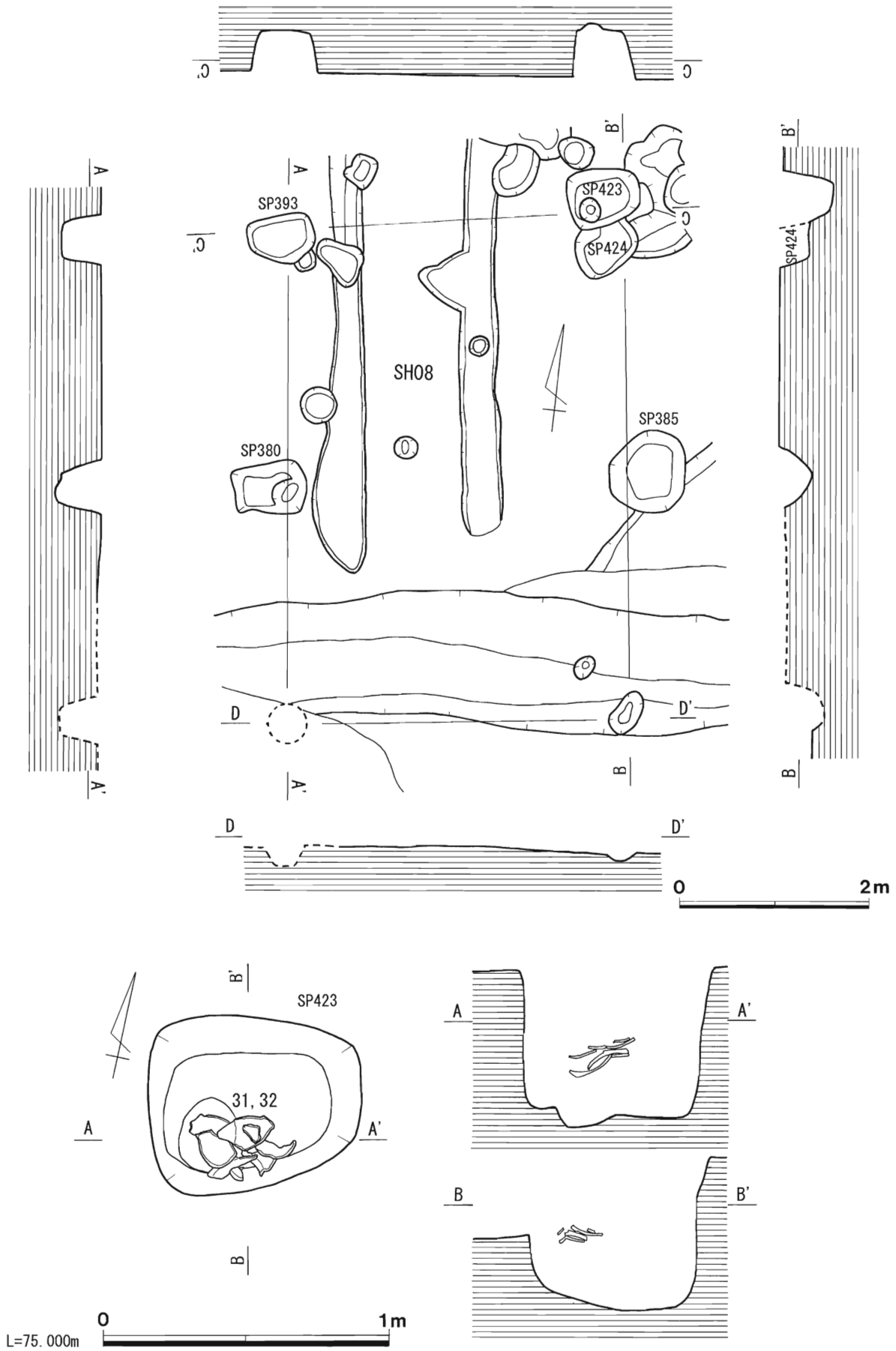
第11図 SH04、05実測図



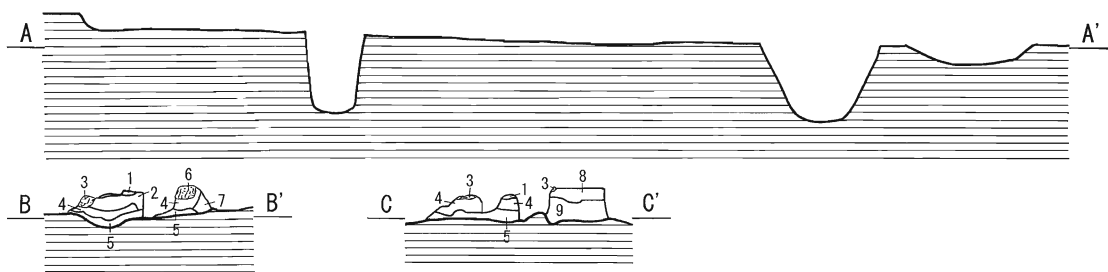
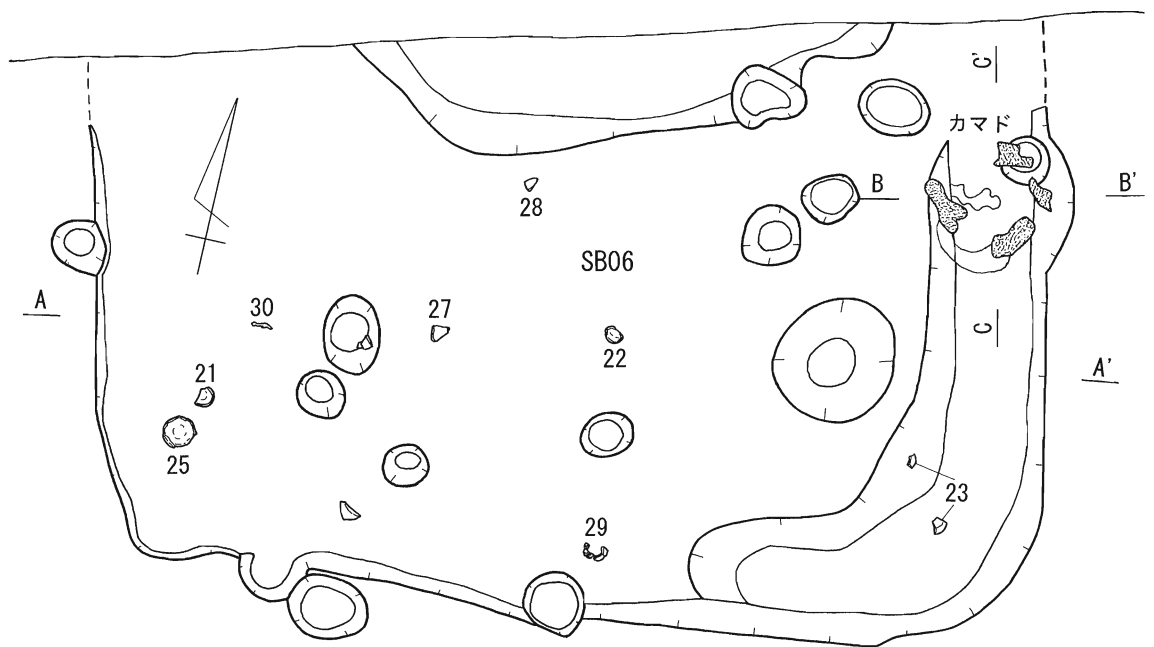
第12図 E-3区柱穴列、SH06実測図



第13図 SH07、09実測図



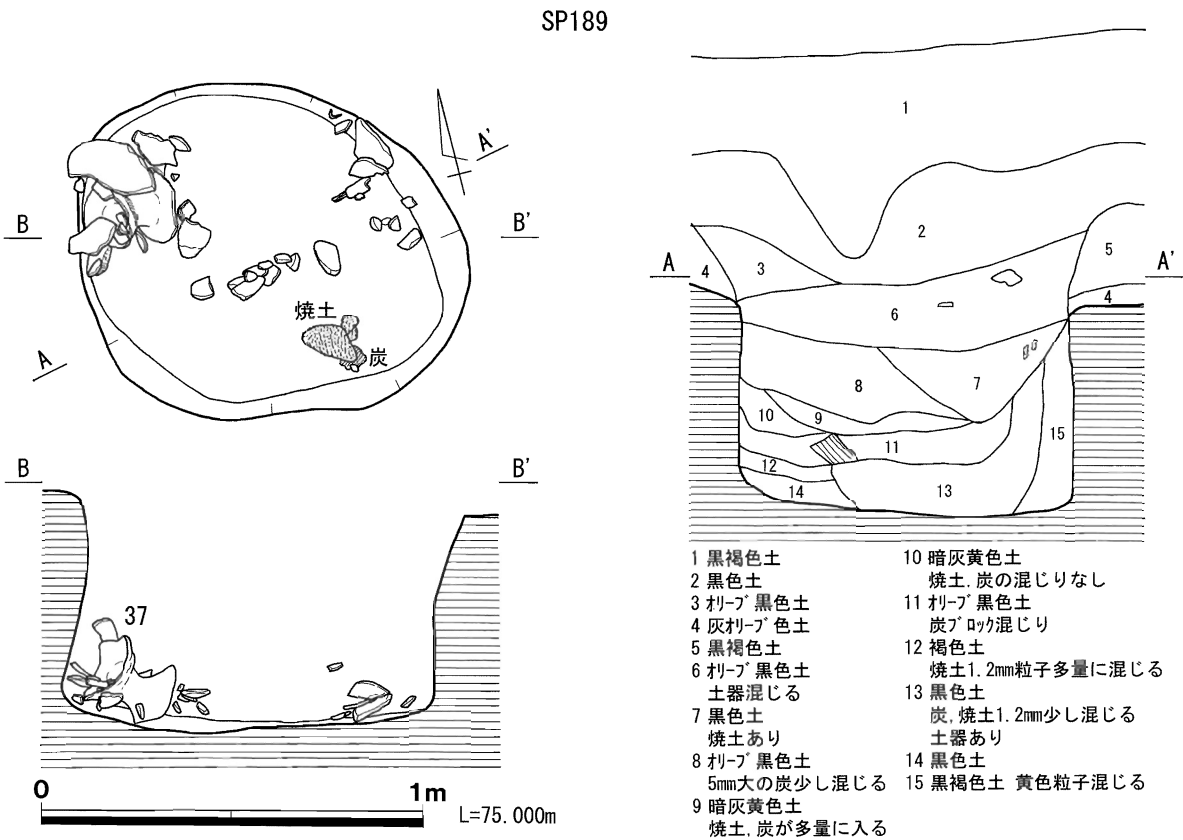
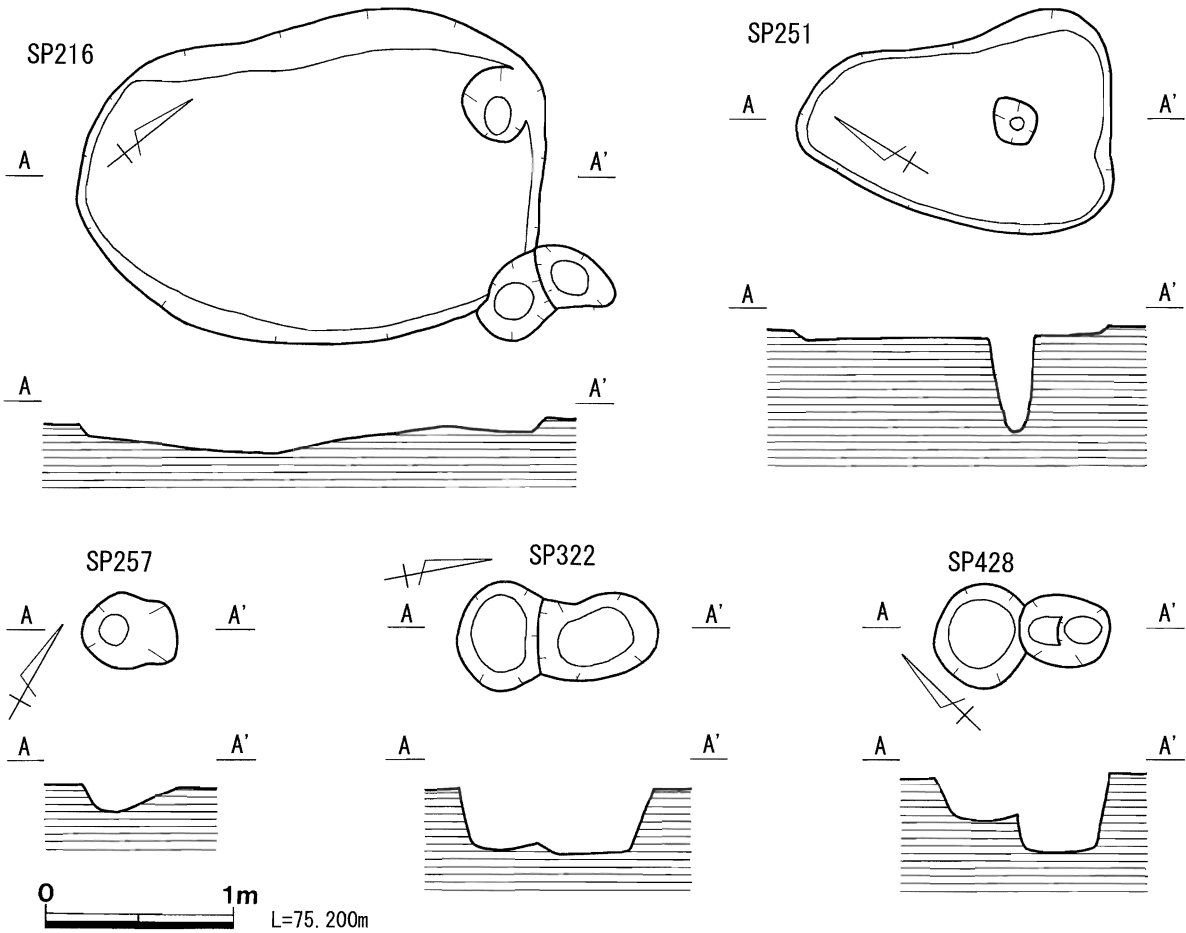
第14図 SH08実測図



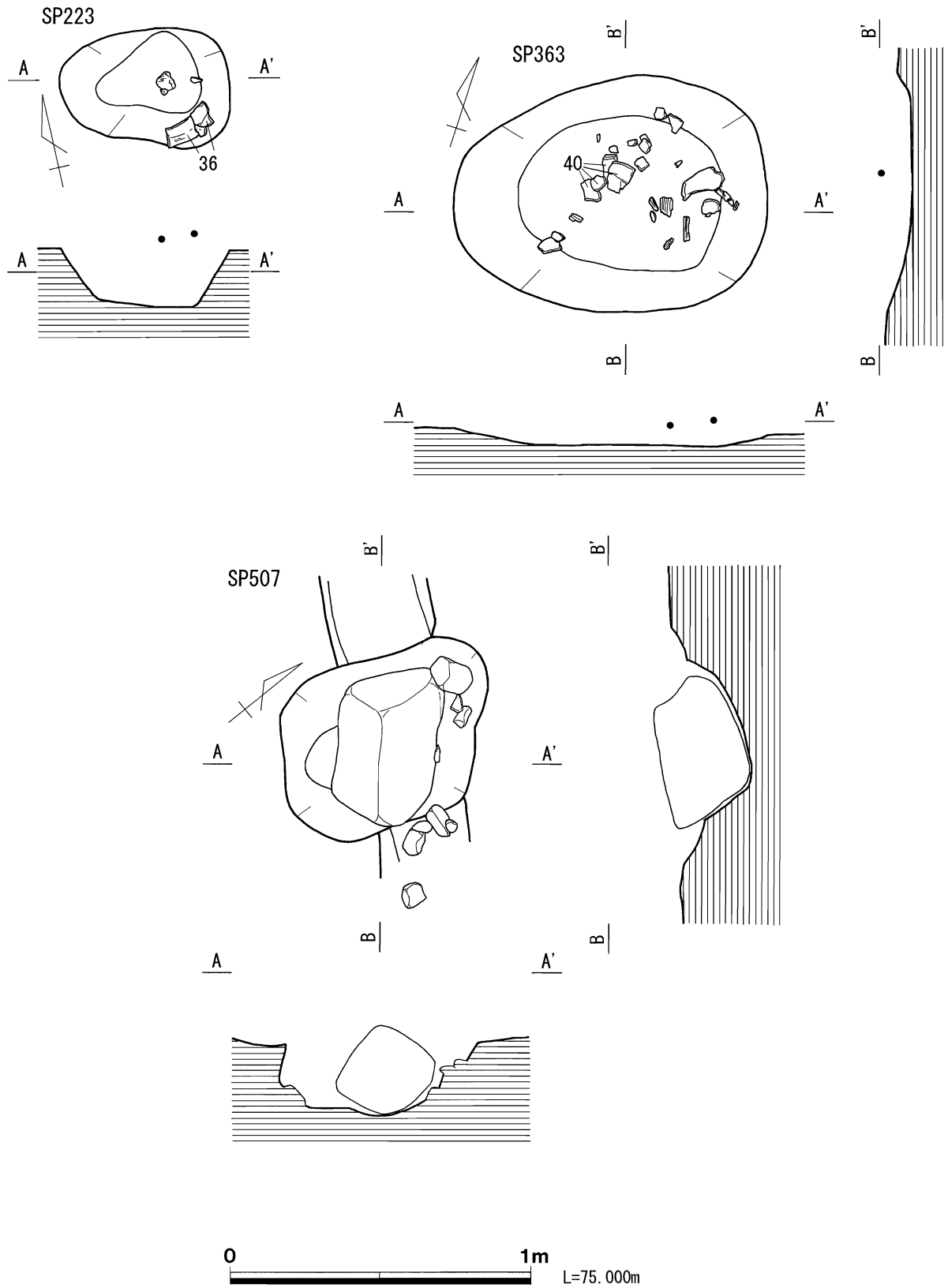
- 1 黒褐色土 (炭を含む)
- 2 褐灰色土
- 3 うすい焼土
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 明赤褐色土 (焼土)
- 7 褐灰色土
- 8 黒色土
- 9 黒褐色土

L=75.000m 0 1m

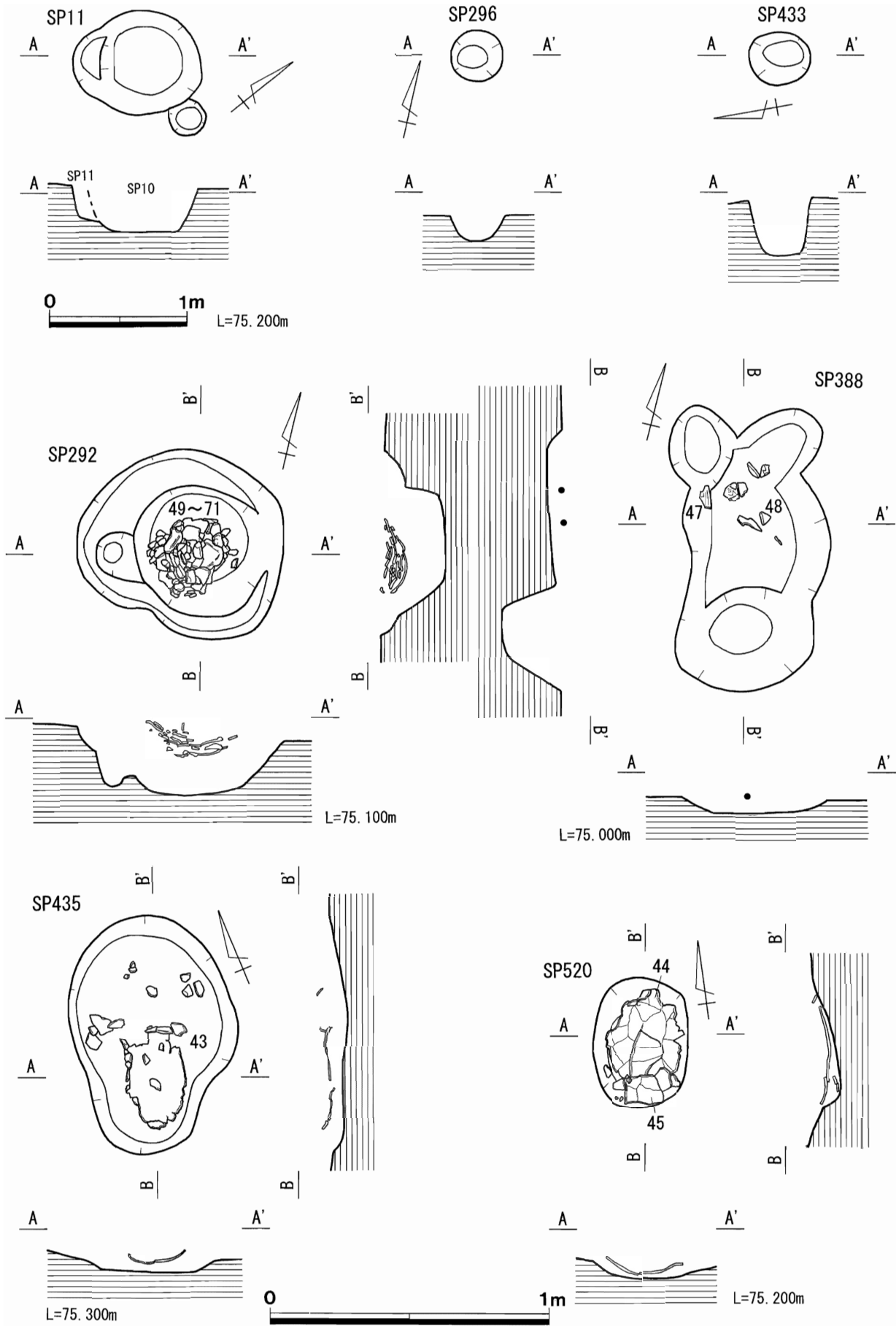
第15図 SB06実測図



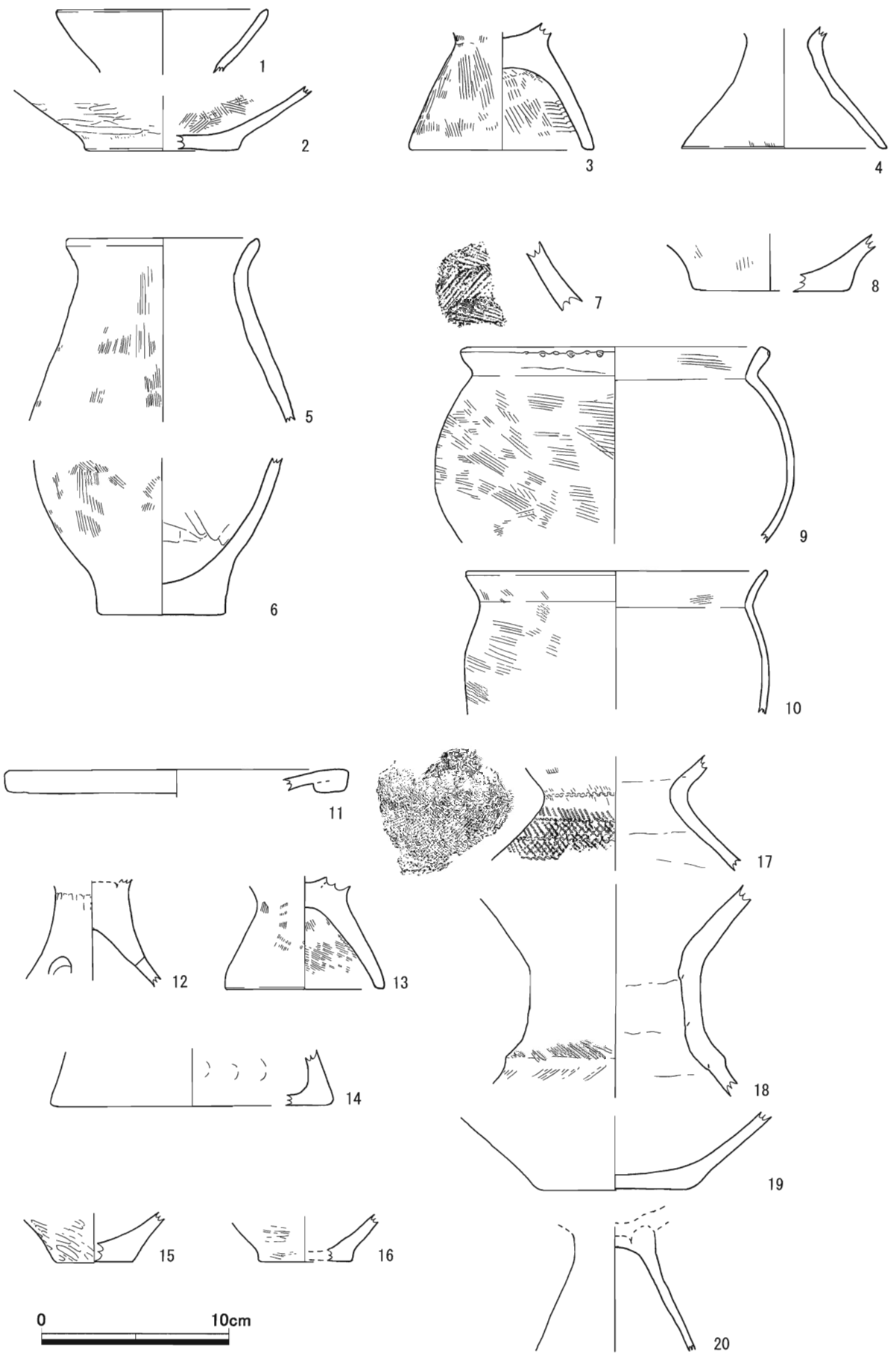
第16図 SP216、251、257、322、428、189実測図



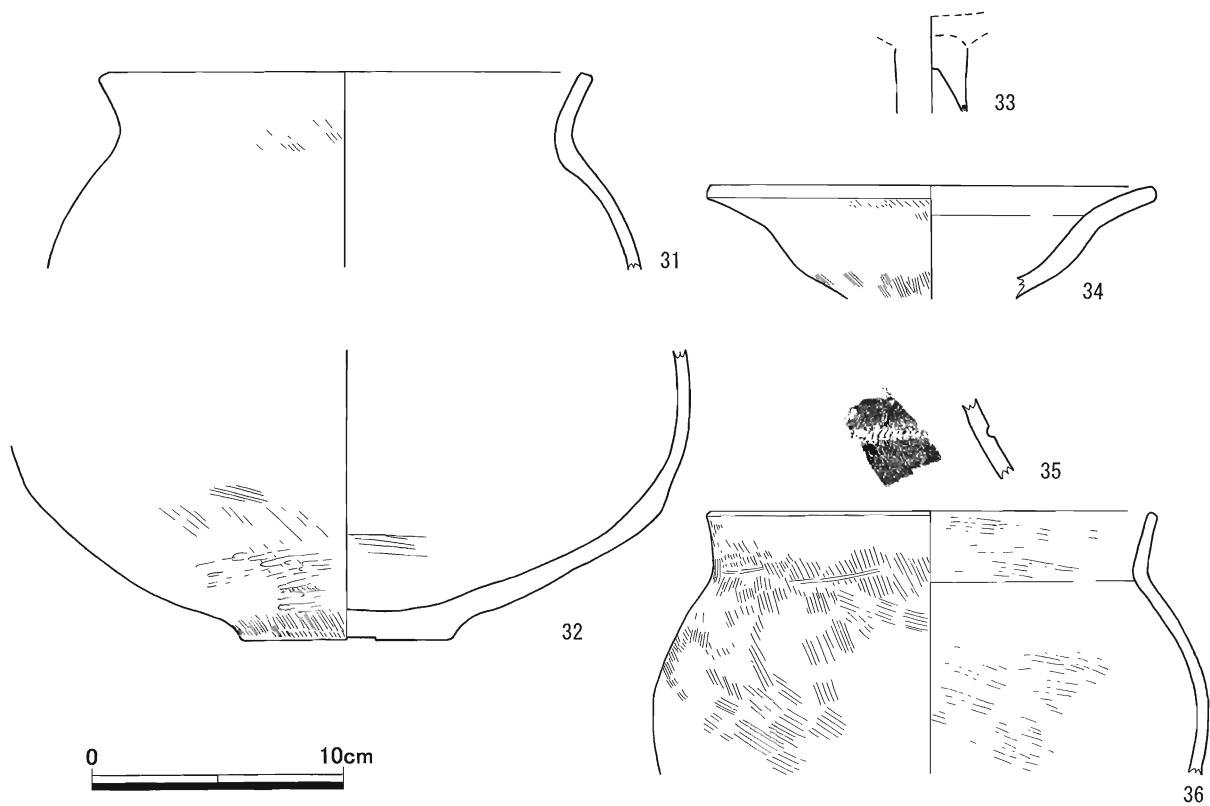
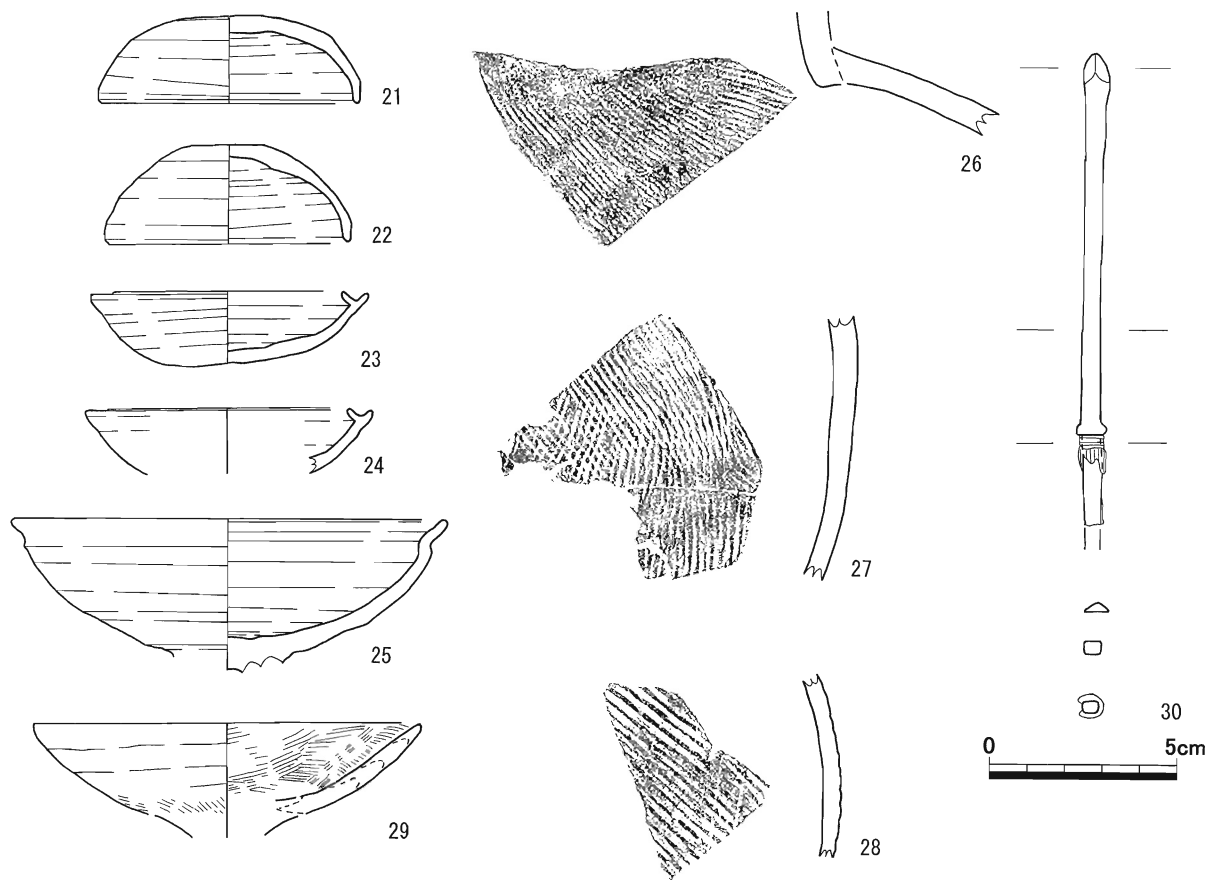
第17図 SP223、363、507実測図



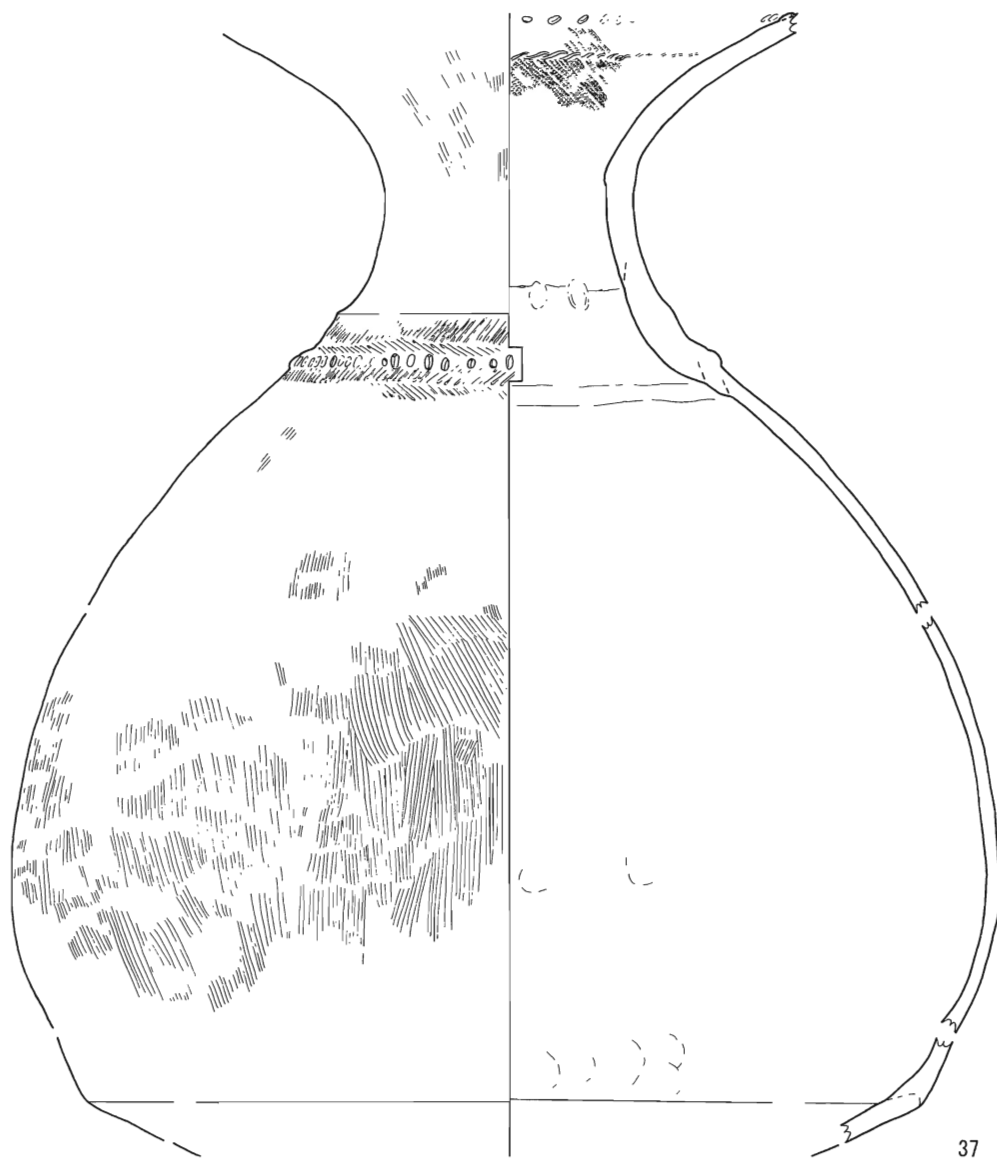
第18図 SP11、292、296、388、433、435、520実測図



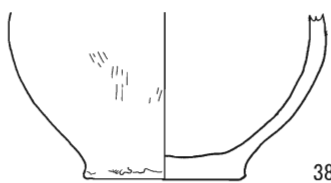
第19図 出土遺物実測図(1)



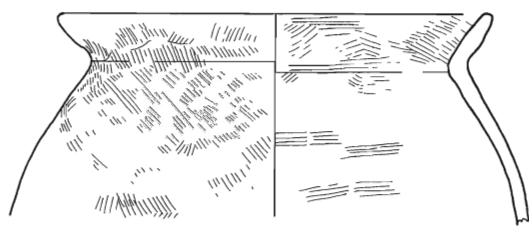
第20図 出土遺物実測図(2)



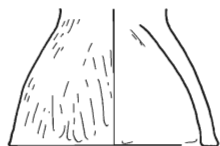
37



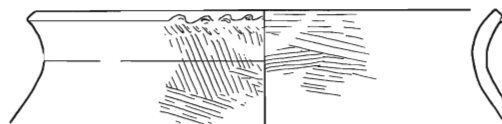
38



40



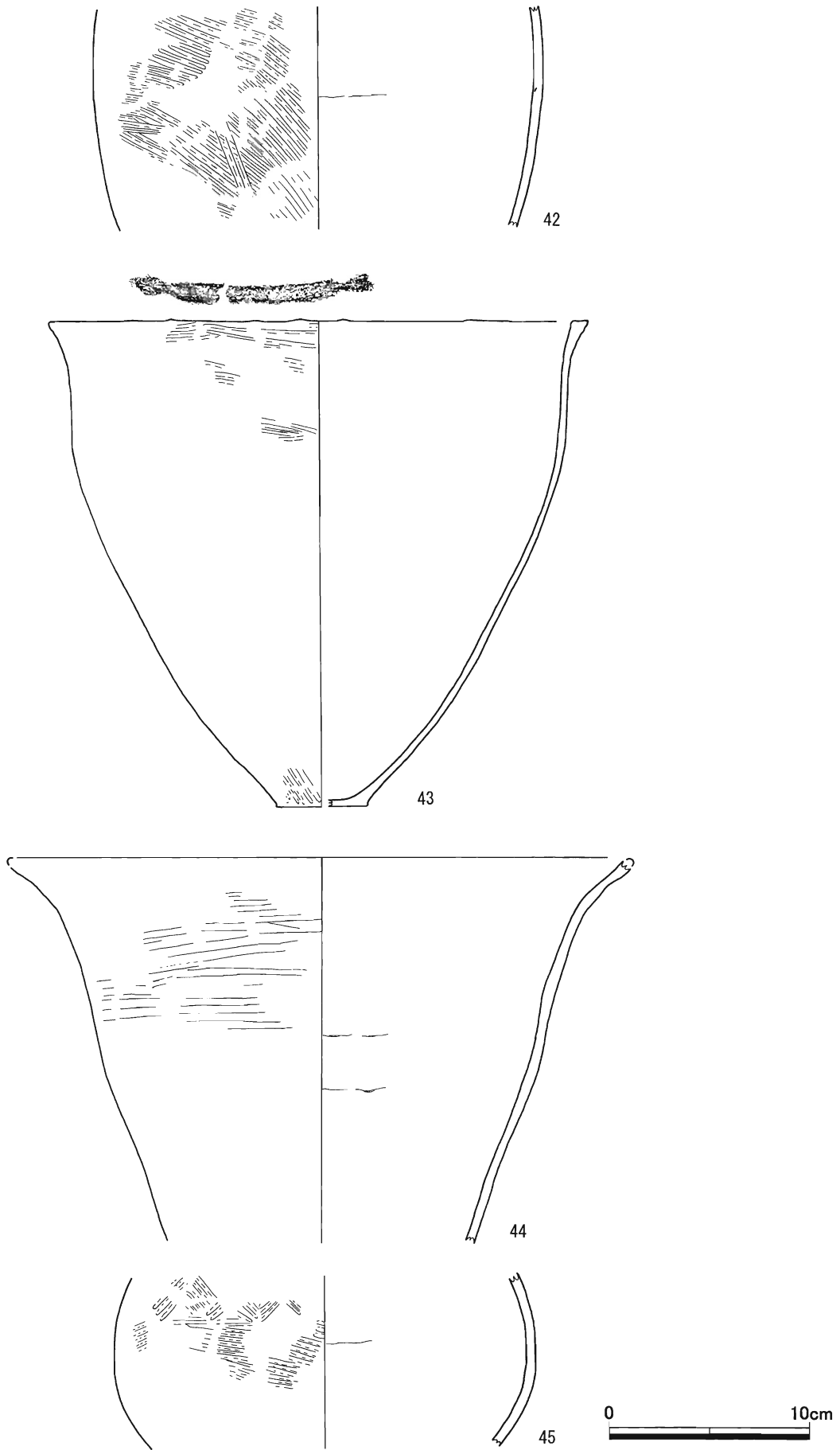
39



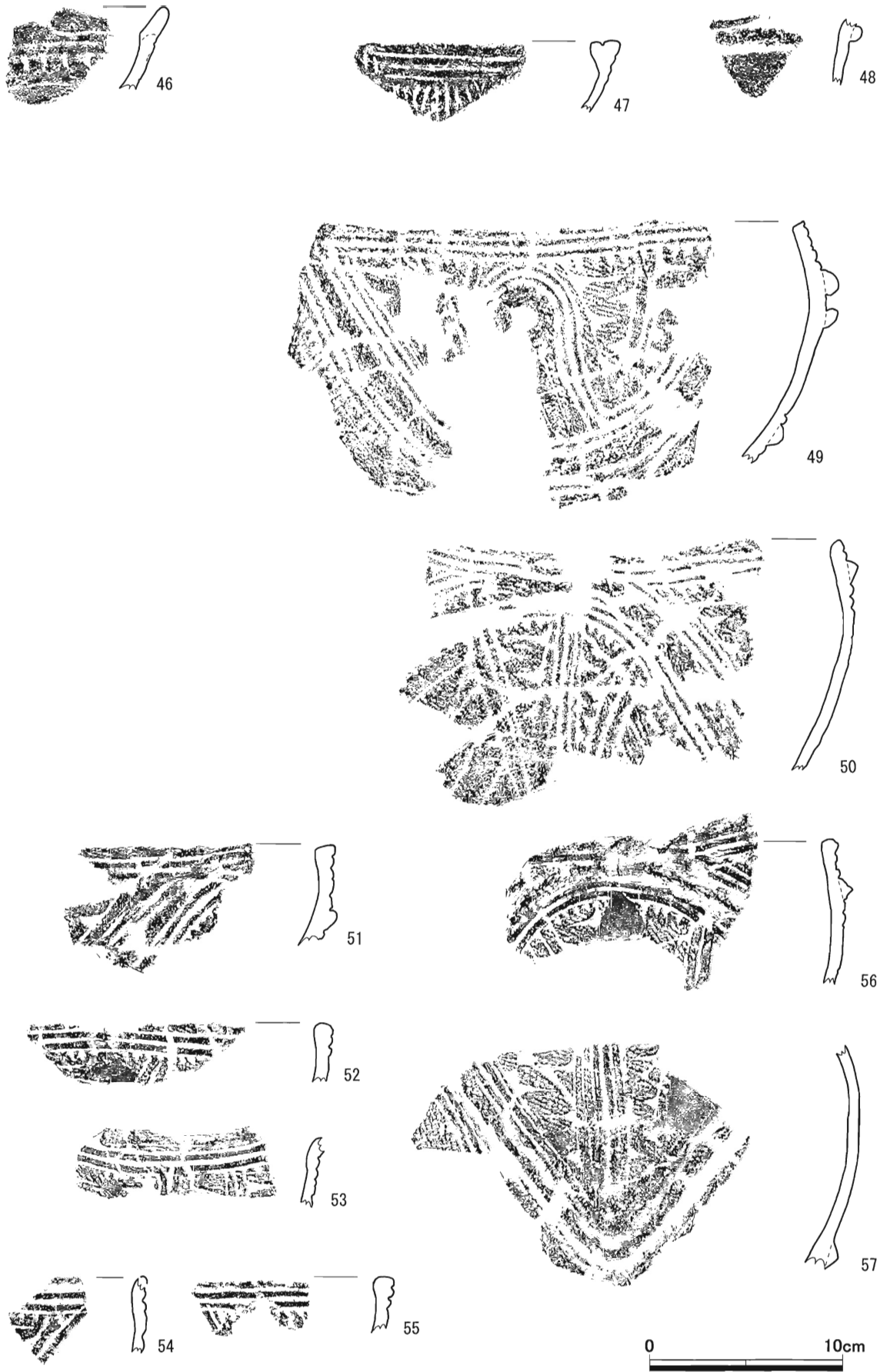
41



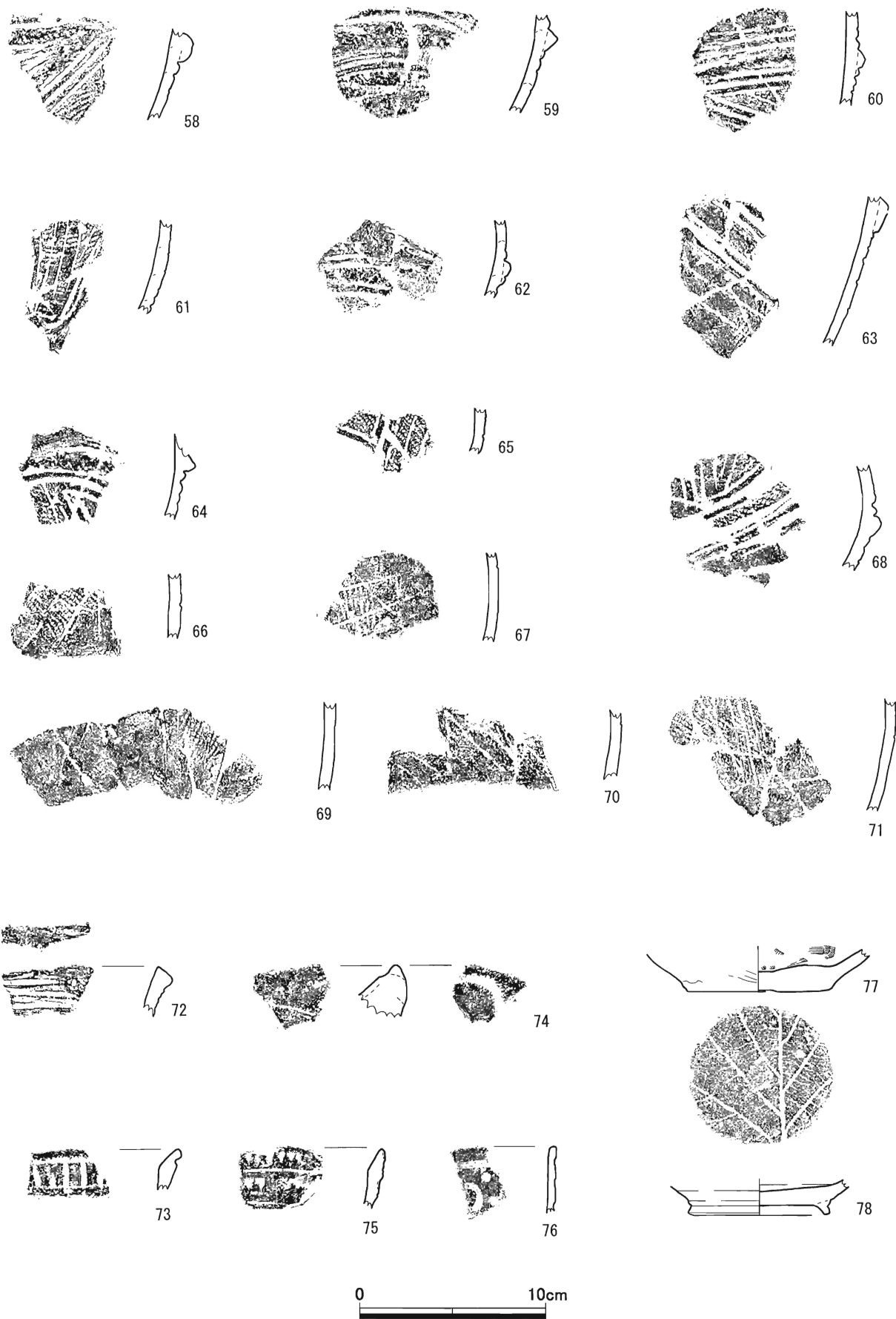
第21図 出土遺物実測図 (3)



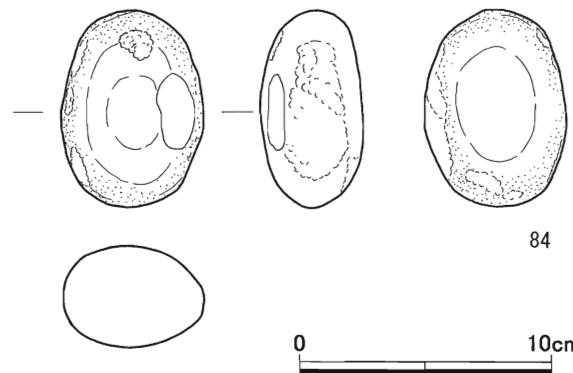
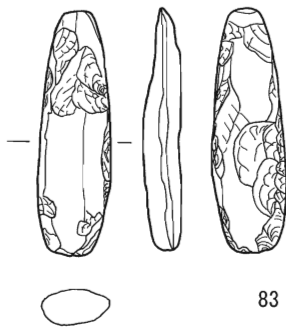
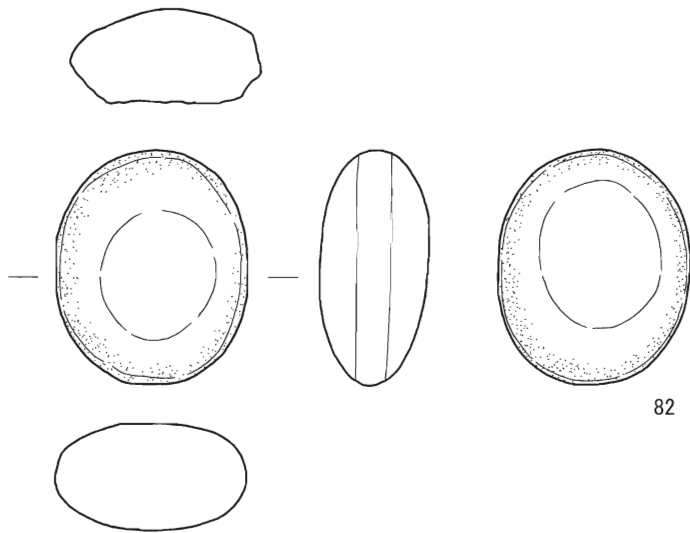
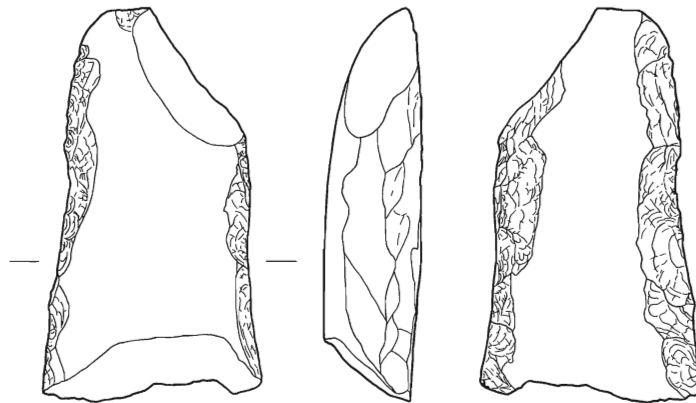
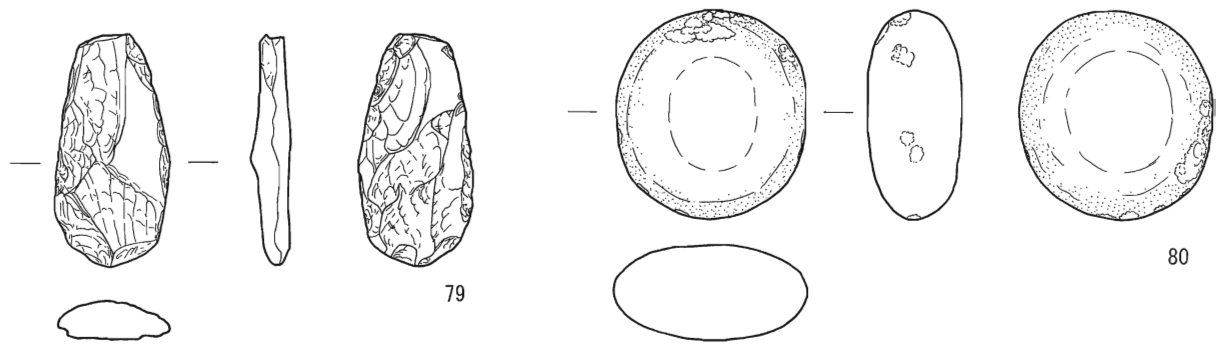
第22図 出土遺物実測図(4)



第23图 出土遺物実測図(5)



第24図 出土遺物実測図 (6)



第25図 出土遺物実測図（7）

吉岡原遺跡第10次

Ⅲ 吉岡原遺跡第10次

1 調査に至る経緯

埋蔵文化財である吉岡原遺跡内にある当地点において、畑から茶園へ転換する計画があると耕作者から相談を受けた。そこで教育委員会では、平成22年5月13日に確認調査を実施した。0.5×0.5mの試掘坑6箇所設定し調査を行った結果、一つの試掘坑から弥生土器が出土し、遺跡の存在はほぼ確実となった。今回茶畑への転換は、天地返しは実施せず、高低差のある畑を均一にならし、茶樹の苗を植える計画である。そのため削土が行われる計画地東側の630㎡において、遺跡の消滅が免れない状況であることを確認し、その範囲の本発掘調査を実施することとなった。

平成22年10月26日付けで、掛川市教育委員会は静岡県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進達した。これに対し、平成22年11月10日付けで、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

この近接地での発掘調査の状況であるが、平成18年に今回の調査地東側で、幅約1.5mのトレンチをL字形に、南北21m、東西約14mに設定して調査を行っている。この調査では、弥生時代後期の方形周溝墓を検出している。また、昭和61年に南側20mの所で、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物1棟、土坑墓を確認し、今回の調査でもこの時期の遺構が検出されることが、想定された。

2 調査の方法と経過

調査区の設定 今回の調査区は、遺跡の消滅が免れない630㎡とした。そして、対象地の地形に合わせて5m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げや測量・実測の基準とした。東西の列を東からA、B、C…のアルファベットで、南北の列を北から1、2、3……の数字で表した。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北東角の杭の名称と一致させた。

また、調査地点を国家座標で記録するために、基準点測量を業者に委託し実施した。

重機掘削 耕作土の除去を、重機（バックホー）、クローラードンプを1台ずつ用いて行った。

遺構検出 最初は人力により遺構確認面において、粗掘を行った。鍬と鋤簾を使用し、5～10cmほど地表を掘り下げた後、鋤簾を用いて丁寧に地表を削り遺構を検出した。

遺構掘削 検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、土層帯を設定し観察を行った。

遺構実測 遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図は1/10の縮尺で、平面図と土層断面図は1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）1台と35mm判（カラーネガ、リバーサル）2台を使用した。調査区遠景、全景の垂直写真等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて行った。

整理作業 出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土位置を注記し、また接合復元し、実測を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に編集し清書した。そして、遺物の写真撮影、報告を原稿にまとめ、印刷に付した。

3 調査の成果

調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡11軒分、掘立柱建物跡1棟分、方形周溝墓1基、土坑、小穴等を確認した。

(1) 竪穴住居跡

SB01 (第28、36図)

B-3区に位置する。規模は東西推定5.3m、南北6.3mを測り、形状はいびつな楕円形を呈している。暗褐色土の貼床が、部分的に検出された。炉跡は、中央からやや北寄りに確認された。支柱穴間は、東西3m、南北3.6mを測る。貼床の検出状況から、切り合い関係のある方形周溝墓の溝SD01より先行する。

出土遺物は、第36図1～5に図示した。1と2は床面から出土した折返口縁の壺の破片である。1は、口唇部に櫛描波状文が施文された後、櫛刺突文が施されている。2は、口縁部内側と口唇部に櫛描波状文が施されている。4と5は高坏である。5は、脚部が小穴内において天地逆位の状況で出土した。4と5ともに口唇部は、ヘラ状工具による刺突を行い、坏部は内外面ともにハケ目の後、ヘラミガキ調整を施す。5の坏部と脚部の境には、有段羽状文が施されている。SB01の年代は、出土した土器から菊川様式の新段階に位置づけられる。

SB03 (第29、36、37図)

A-5、B-5・6区に位置する。規模は東西3.8m、南北3.6mを測り、形状は隅丸方形を呈する。暗灰褐色土の貼床が、確認された。掘り方のほぼ中央で残りの良くない皿状の炉が、また床面の各所で焼土や炭が認められた。なお北側の支柱穴は、確認されなかった。

出土遺物は、第36図6～11、第37図12～24である。土器は、掘り方の北西部分から集中して出土した。6は内外面ともに赤彩が施された単純口縁の壺、7は、大型の広口壺である。8～10は、くの字口縁の台付甕である。口縁部は、いずれも横ナデを施している。体部の調整は、8ではナデ・板ナデ、9ではハケの後ナデである。11～13は、S字状口縁の台付甕である。11と12は、肩部にタテ方向のハケの後、横方向のハケを施している。これらは胎土から搬入品であるといえるが、13は、胎土及び形態から在地産と考えられる。14～18は、S字状口縁の台付甕の台部あるいは体部との接合部である。胎土からすべて搬入品であるといえる。19と20、24は小型丸底鉢、21～23は、小型丸底埴である。23は、内外面ともにススが付着していた。SB03の年代は、これらの出土土器から古墳時代前期に位置づけられる。

SB04 (第30、37図)

A・B-6・7区に位置する。規模は東西5.2m、南北5.2mを測り、形状は隅丸方形を呈している。黄褐色粘質土混じりの貼床が、ほぼ全面にわたり確認された。特に中心部の3m四方は、固くしまっていた。炉跡は、中央からやや北寄りに認められた。北西隅と南西隅からは、焼土が検出された。壁溝は、東側を除き掘り方の周囲において検出された。土層の堆積状況からSB05より後出することが、確認された。支柱穴間の距離は、東西2.7m、南北2.7mを測る。

出土遺物は、第37図25～36である。25は複合口縁の壺、26は二重口縁の壺、27は柳ヶ坪型の壺である。30と32は、S字状口縁の台付甕である。31は、くの字口縁の台付甕の台部である。33～35は小型

の鉢である。SB04の年代は、これらの土器から古墳時代前期に位置づけられる。

SB05 (第30、38図)

A・B-7・8区に位置する。規模は、東西5.5m、南北推定7mで、形状は南北に長い小判形を呈している。茶色土の固くしまった貼床が、確認された。炉跡は、中央からやや北寄りに2カ所で認められた。一つの炉は、火皿状で部分的に白色粘土が存在した。住居跡の掘り方は、中央部に平坦面をもち、周囲が掘り下げされていた。支柱穴間の距離は、東西3.5m、南北3.5mを測る。土層の堆積状況からSB04、06より先行し、SB09より後出であることが、認められた。

出土遺物はわずかで、第38図37の壺底部と38の甕の破片だけである。

SB06 (第31、38、40図)

A・B-8・9区に位置する。規模は、東西6m、南北推定7.7mで、形状は南北に長い小判形を呈している。南東部分は、攪乱を受けており掘り方は壊れていた。北半分に弱い貼床が確認され、炉跡と焼土が、中央からやや北寄りでも認められた。貼床の検出状況から、SB05、07より後出であることが認められた。

出土遺物は、第38図39と40、第40図78である。39は穿孔された壺底部、40は高坏の口縁部である。78は、P4から出土した台付甕の台部である。

SB07、08 (第32、38図)

B・C-8・9区に位置する。規模は東西6m、南北4.7mを測り、形状は東西に長い小判形を呈している。黄茶色土の貼床が2面確認されたことから、建て替えが存在したと考えられる。上面をSB08、下面をSB07とした。それぞれの面で炉が認められ、先行するSB07の炉跡も、建て替えの際に壊されることなく残っていた。床面の北側において焼土や炭が多く検出された。住居跡の掘り方は、中央部に平坦面をもち、周囲が掘り下げされていた。掘り方の外周には、壁溝が巡っていた。支柱穴間の距離は、東西3.3m、南北3mを測る。なお、SB09より先行することが、切り合い関係から判明している。

出土遺物は、第38図41～45である。41は、複合口縁の壺である。口縁部は羽状縄文を施文した後、棒状貼付文が13個で1単位として、4方向に施されている。口唇部にも縄文が施されている。43は、単純口縁の壺で、内面には櫛描簾状文が施されている。45は、SB08の床面から出土した鉢の口縁部である。

SB09 (第32、33、38図)

B・C-8・9区に位置する。貼床の検出状況からSB08より後出するが、残りは良くなく、規模、形状は不明である。残存する床面には貼床が部分的に認められ、その上には土器、焼土、炭がまとまって検出された。掘り方は、北辺が確認されただけで、その深さも5～8cmと浅く遺存状態は悪いが、残存した部分からまとまって土器が出土した。

出土遺物は、第38図46～52である。46と47は、単純口縁の壺である。46は、頸部に櫛刺突羽状文が施されているが、器面全体は風化が進んでいる。47は、頸部から体部にかけて無節の縄文が2段に施されている。48は、体部の上半部に結節縄文を施している。底部には、木葉痕が残る。49と50は壺の体部、51は甕の体部上半部である。52は高坏の口縁部で、口唇部にはヘラ状工具による刺突文が施さ

れている。

SB10 (第34、39図)

B・C-10区に位置する。規模は東西3.8m、南北4mを測り、形状は隅丸方形を呈している。床面の中央部分に、貼床が認められた。炉跡は、床面中央からやや北寄りで確認された。主柱穴と考えられる柱穴は、検出されなかった。

出土遺物には、第39図53の壺底部と54の甕口縁部がある。

SB12 (第34図)

B・C-11区に位置する。規模は、東西不明、南北4mを測る。遺存状態は非常に悪く、遺構検出面で炉跡が確認された。掘り方の南西部分は後世の攪乱を受けており、覆土もほとんど見られなかった。北側部分では、壁溝を検出した。主柱穴と考えられるものは、P1のみである。

出土遺物は、小片のため図示はしなかった。

SB13 (第33、39、40図)

A・B-11・12区に位置する。規模は東西5.2m、南北6.2mを測り、形状はいびつな楕円形を呈している。西側の一部は、後世の攪乱を受けていた。また遺存状態も悪く、焼土は遺構検出面で確認され、掘り方の覆土はわずかに5～9cmであった。主柱穴は、ピットが存在するものの、特定できなかった。SB12との切り合い関係は、不明である。

出土遺物は、第39図55と56、第40図の80である。55と56は壺底部で、56は外面の一部分に、赤彩が施されている。80は、SB13内のP7から出土した高坏の坏部である。口唇部には、櫛刺突文を施している。坏部の内外面ともにミガキが施されている。

(2) 掘立柱建物跡

SH01 (第27図)

B・C-4・5区に位置する。規模は3×5.1m、柱間は梁間1間×桁行3間である。長軸の方位はN15°30'Eである。南西角の柱穴は、確認されなかった。SB03の貼床除去後に柱穴が確認されたことから、SH01が先行することは明らかである。柱穴内からは土器が出土したが、小片のため図示しなかった。

(3) 方形周溝墓 (第28、39図)

C-2～4区に位置する。検出したのは方形周溝墓を構成する東側の溝SD01であり、本体は、西側の調査区外にある。SD01の北端は、西に向かっていることから、方形周溝墓の北東隅にあたと推測される。SD01の幅は0.7m、深さ0.3mを測る。SB01と切り合い関係にあり、この方形周溝墓が後出である。

出土遺物は、第39図57～60である。57は単純口縁の壺であり、口縁部の内外面には、横ナデを施している。横ナデを強く施しているため、わずかに受口状を呈する。58は、折返口縁の壺である。口唇部には、櫛状工具による押引き状となった刺突文とヘラ状工具による刺突文が施されている。部分的に、赤彩が施されている。59はS字状口縁の甕の破片、60は小型の台付甕の台部である。

(4) 土坑

SK02 (第27、39図)

A-6区に位置する。掘り方の西側一部を調査した。規模、形状は不明である。SB04と切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。

出土遺物は、第39図61の小型高坏の坏部がある。細い丁寧なミガキが施されている。

SK03 (第35、39、40図)

B・C-10・11区に位置する。規模は長軸2.4m、短軸1.55mを測り、形状はいびつな楕円形を呈している。覆土には土器片と石が大量に含まれており、土器捨て場であったと推測される。

出土遺物は、第39図62～69、第40図70～73がある。62～67は壺である。62は、単純口縁の壺であるが、口縁部はわずかに内湾する。頸部から肩部にかけて櫛刺突羽状文が三段施されている。68は、鉢の口縁部である。69～72は、くの字口縁の台付甕である。73は、高坏の坏部破片である。

(5) 小穴

SP09 (第35、40図)

B-4区に位置する。規模は長軸0.84m、短軸0.75mを測る。

出土遺物は、第40図74の折返口縁の壺がある。口唇部には、ハケ調整ののちへら状工具による刺突が、内面には縄文が施されている。

SP20 (第35、40図)

B-6区に位置する。規模は長軸0.54m、短軸0.42mを測る。

出土遺物は、第40図75の大型鉢がある。

SP22 (第35、40図)

C-6区に位置する。規模は長軸0.52m、短軸0.5mを測る。

出土遺物は、第40図76の小型の甕がある。

SP33 (第35、40図)

Z-8区に位置する。規模は長軸1.15m、短軸0.46mを測る。

出土遺物は、第40図77の高坏がある。坏部との接合部には、櫛刺突文が認められるが、羽状に施しているかについては不明である。

SP69 (第35、40図)

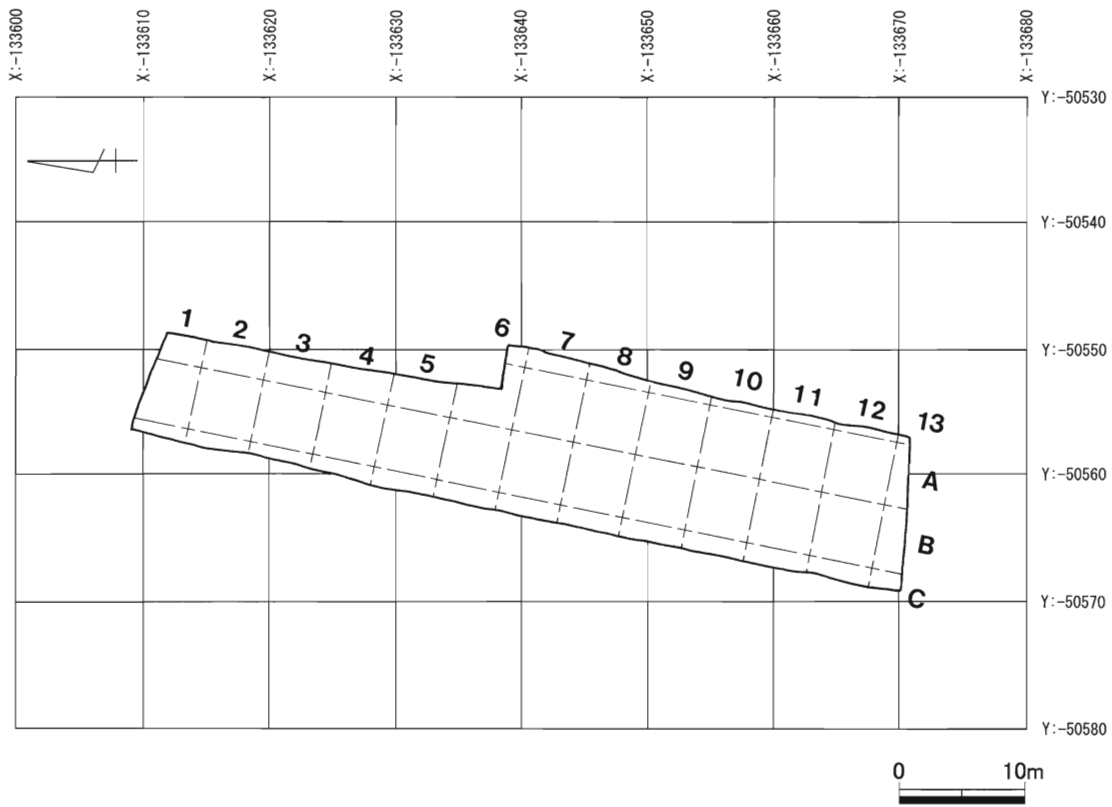
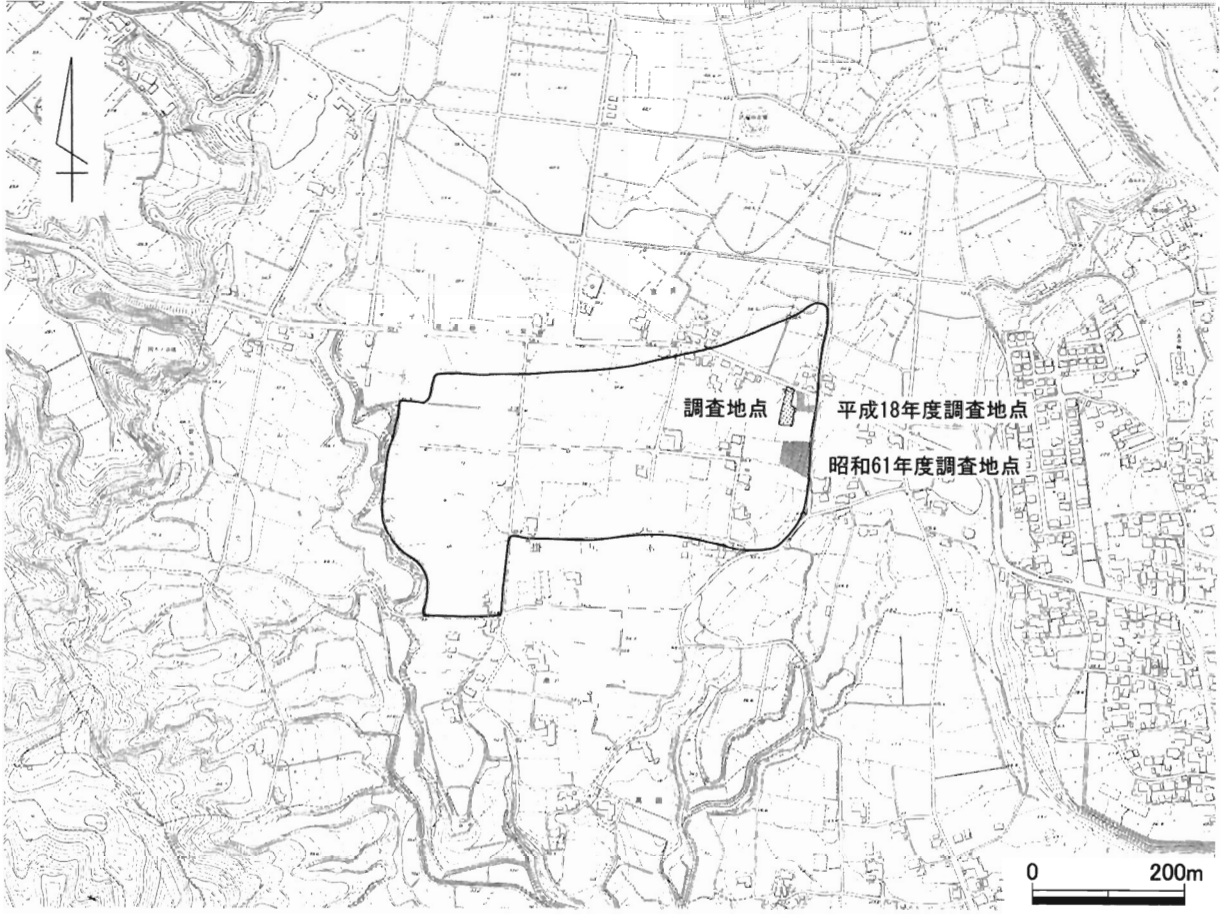
C-13区に位置する。規模は長軸0.45m、短軸0.42mを測る。

出土遺物は、第40図79の小型台付甕の台部がある。

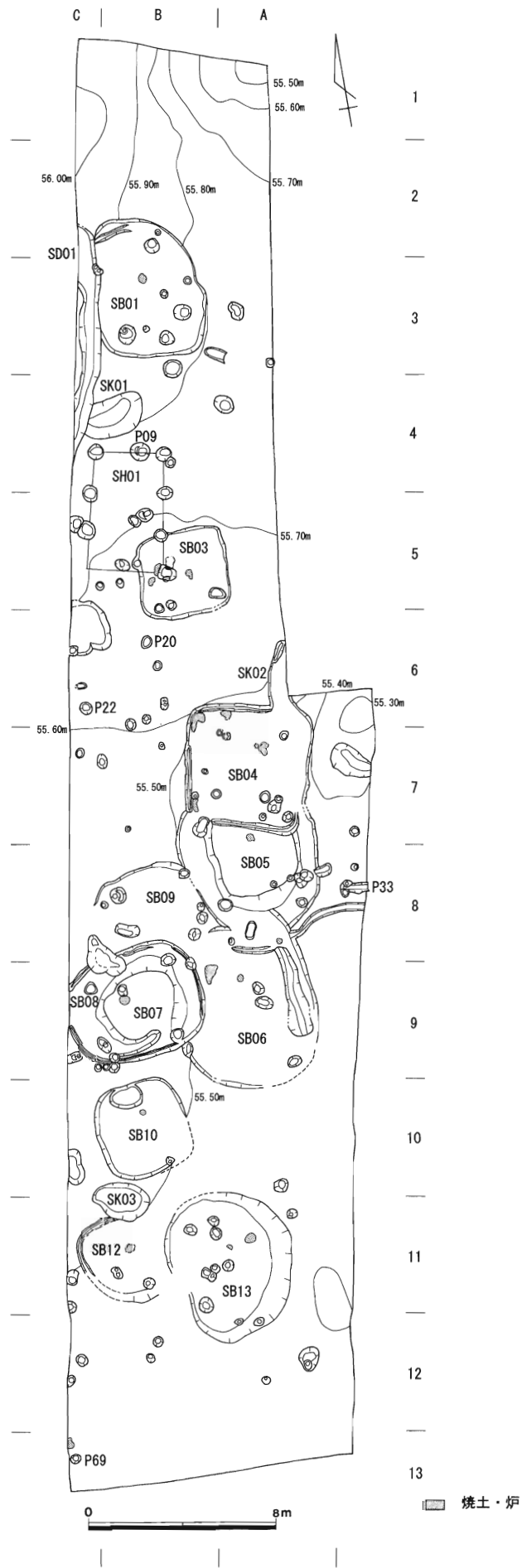
(6) その他 (第40、41図)

81は、A-8区から出土した折返口縁の壺の破片である。口唇部は、横ハケののちナデを施している。82は、A-9区から出土した折返口縁の壺の破片である。口唇部には、へら状工具による刺突文を施している。83は、A-10区から出土した折返口縁の壺の破片である。口唇部には縄文、内面には縄

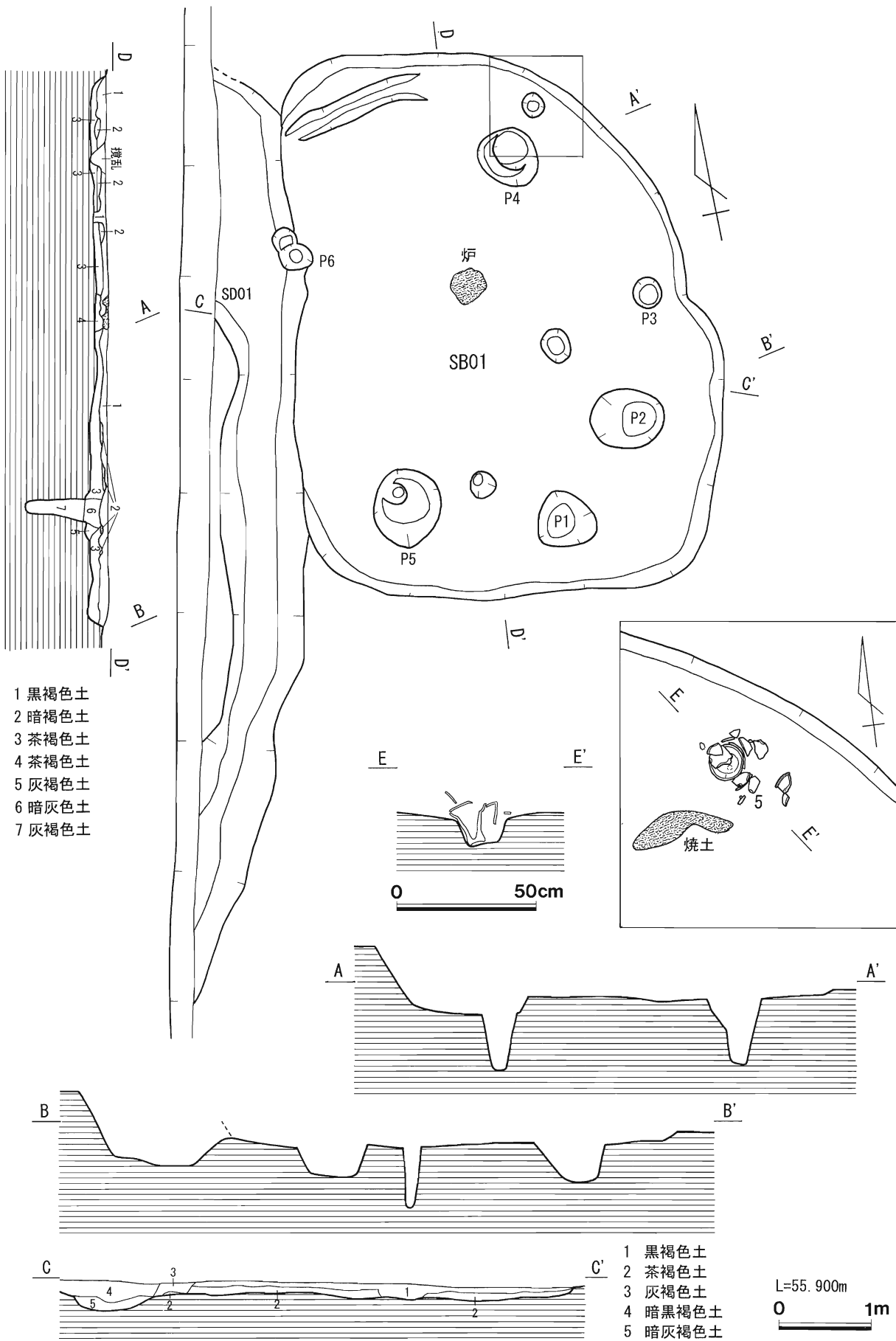
文を施した後に円形貼付文を施している。84は、A-11区から出土した土製の紡錘車である。径は5cm、厚さ1.6cmを測る。85は、A-11区から出土した小型の甕である。86は、A-12区から出土した単純口縁の壺である。口縁部には、櫛刺突羽状文を施す。口唇部には、櫛刺突文か縄文かは不明であるが、施文の存在は認められた。わずかに赤彩が残っていた。87と88は、B・C-8区から出土した壺の破片である。87は折返口縁の壺で、口唇部と内面に縄文を施している。88は、肩部に有段羽状文を施している。89と90は、B-3区から出土した。89は広口壺で、内外面ともにミガキを施している。90は、二重口縁の柳ヶ坪型の壺である。1次口縁は、ゆるやかに外反し、その先端に同じく外反する2次口縁がつく。内外面ともに櫛刺突文を施している。また内外面ともにわずかに赤彩が認められた。91も柳ヶ坪型の壺で、B-6区から出土した。92は、B-1区から出土した菊川様式の高坏脚部の破片である。93~95は、C-6区から出土した。93と94は、S字状口縁の甕の破片で、93は口縁部、94は台部である。いずれも胎土から搬入品と考えられる。95は、小型高坏の脚部で赤彩が施されている。96は、C-7区から出土したS字状口縁の甕で、体部と台部との接合部である。胎土から搬入品と考えられる。97は、C-8区から出土したS字状口縁の甕である。胎土から搬入品と考えられる。98と99は、B-7区から出土した。98は、複合口縁の壺である。口縁部外面は縄文を施した後、円形貼付文が施されている。内面は櫛描波状文が施されている。100と101は、B-8区から出土した。100は、S字状口縁の甕であるが、地元産である。101は、壺の肩部に櫛描波状文、櫛刺突羽状文、縄文が施されている。102~105は、C-10区から出土した。102は折返口縁の壺で、口縁部は櫛刺突文が施されている。103と104は、くの字口縁の台付甕である。105は折返口縁の壺で、口唇部にはヘラ状工具による刺突文、内面には縄文と櫛描扇形文が施されている。



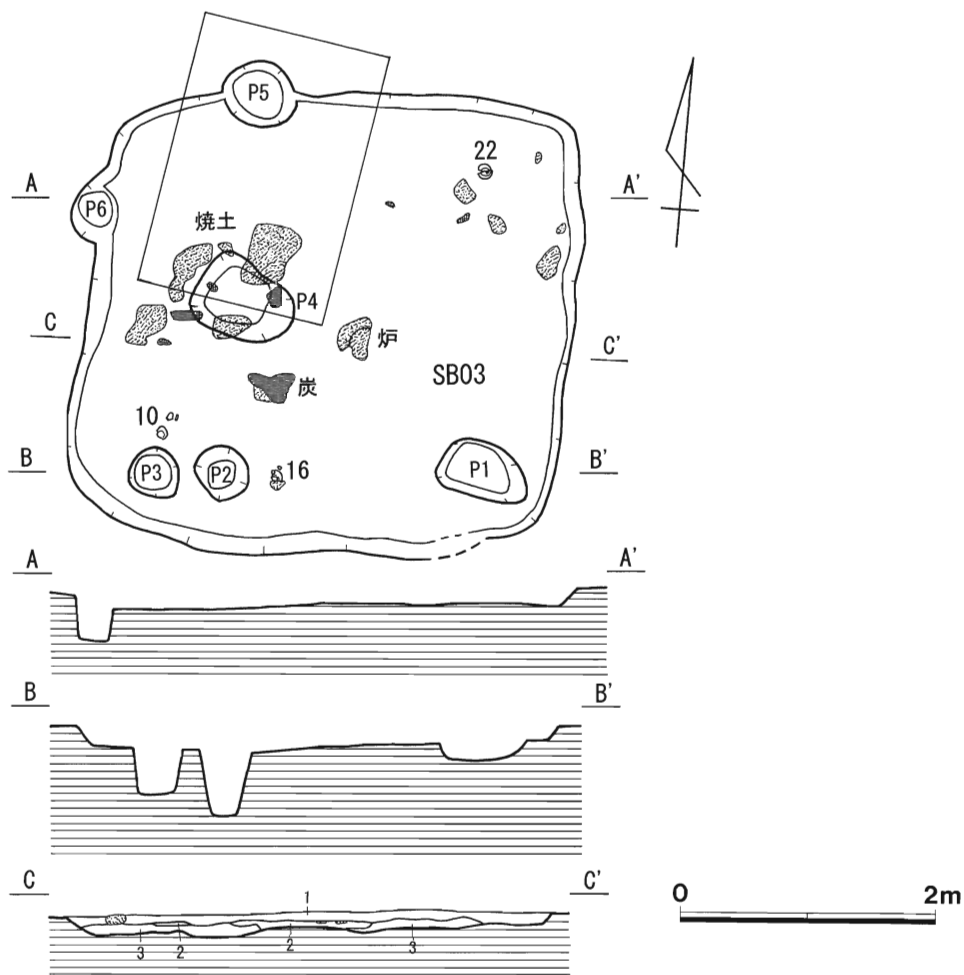
第26図 遺跡位置図・グリッド配置図



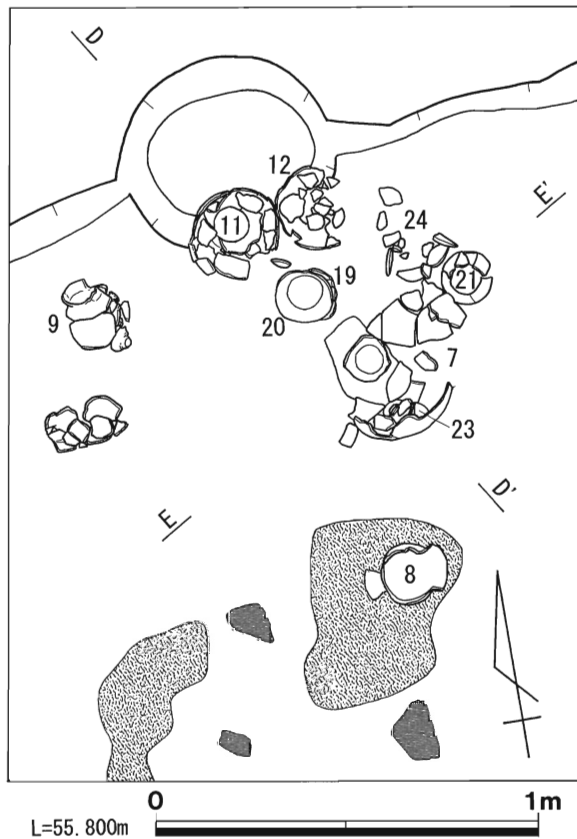
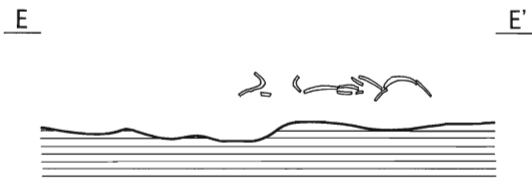
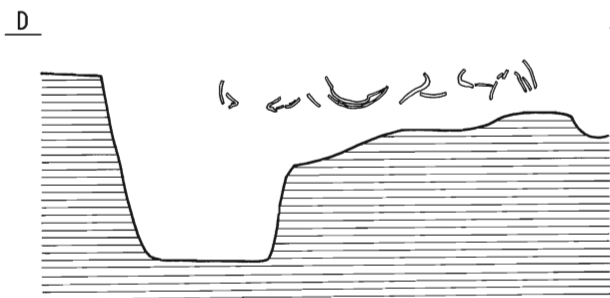
第27図 遺構全体図



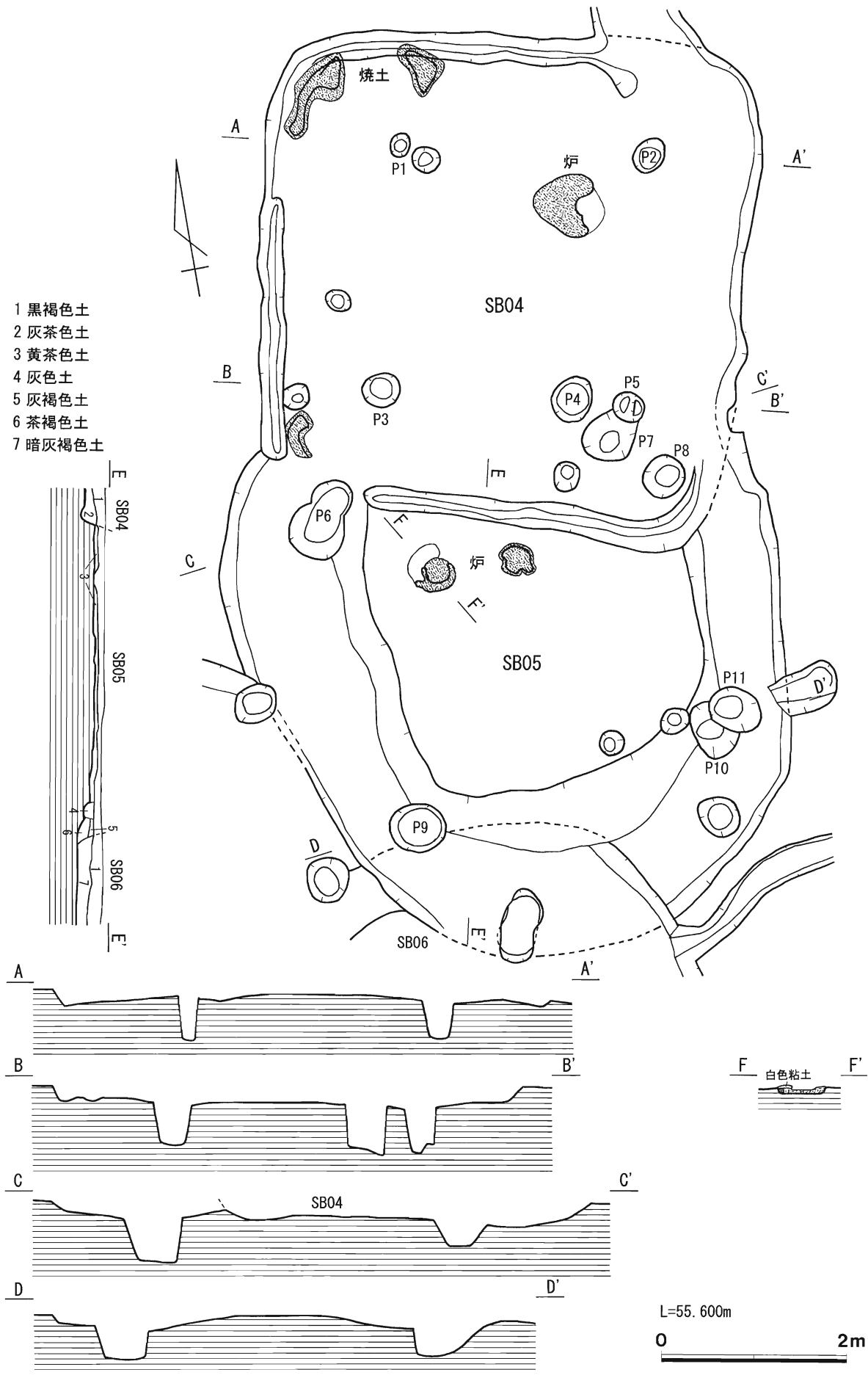
第28図 SB01、SD01実測図



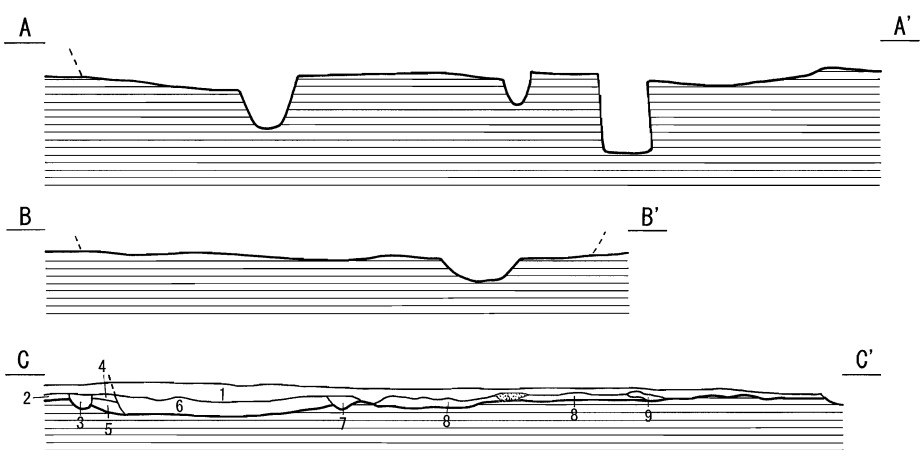
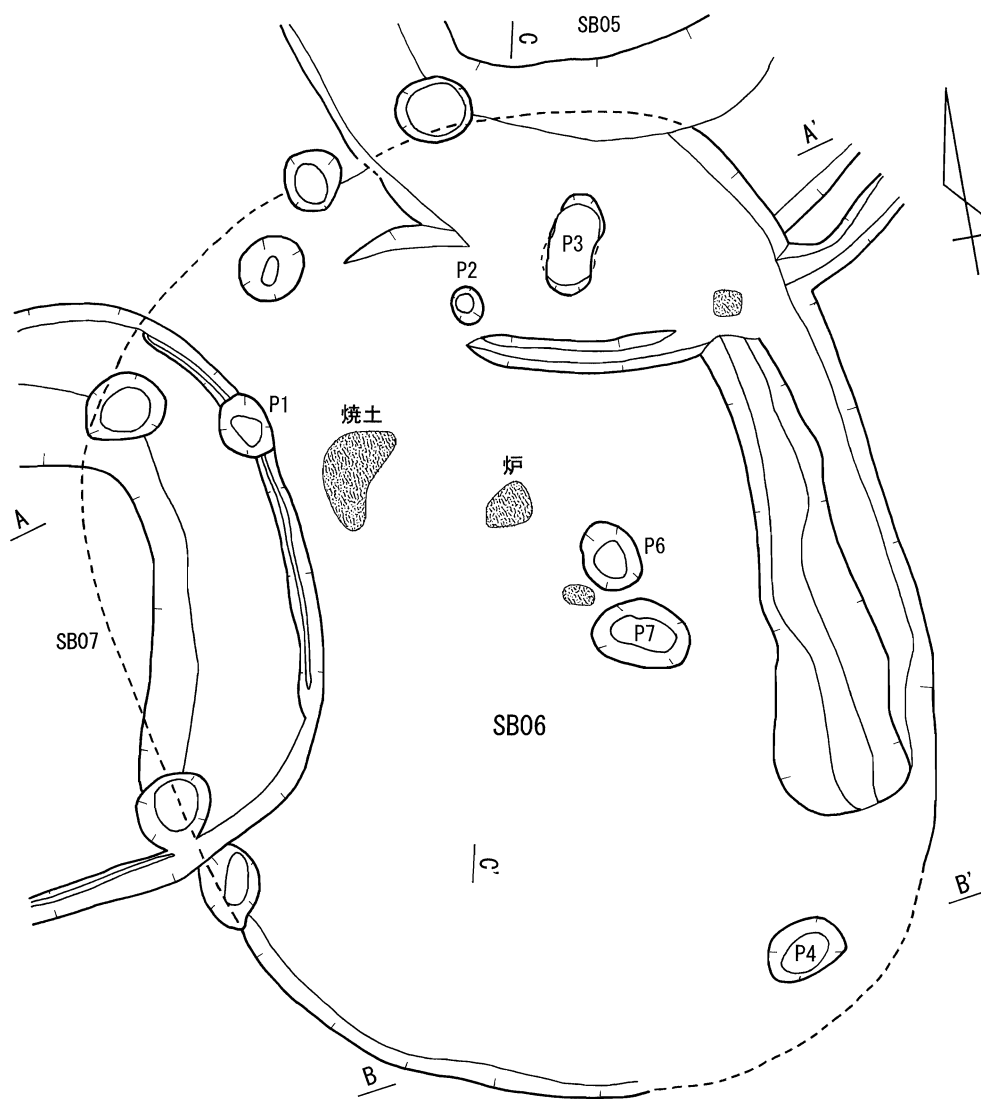
- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 黄茶色土



第29图 SB03实测图



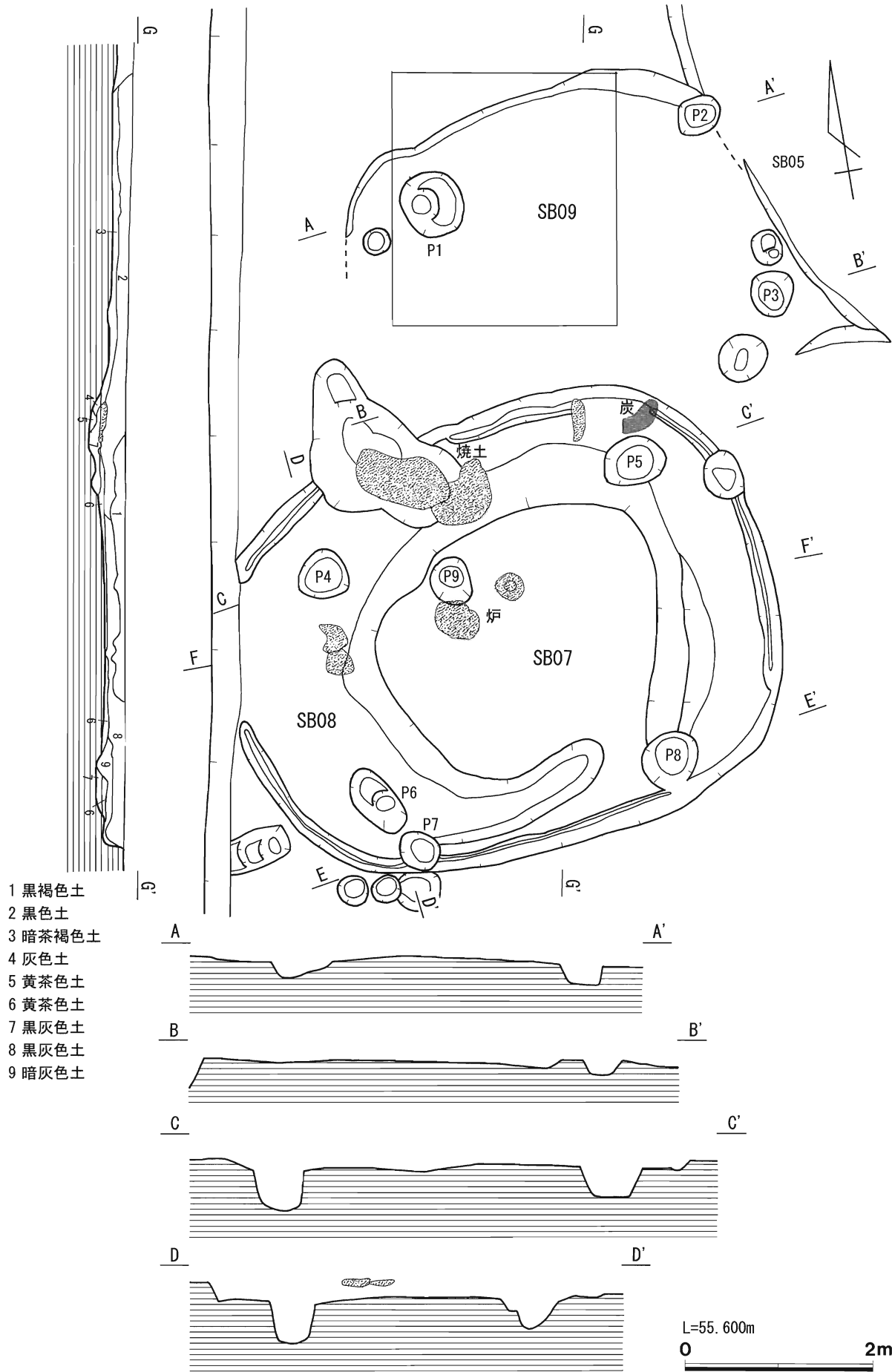
第30图 SB04、05実測図

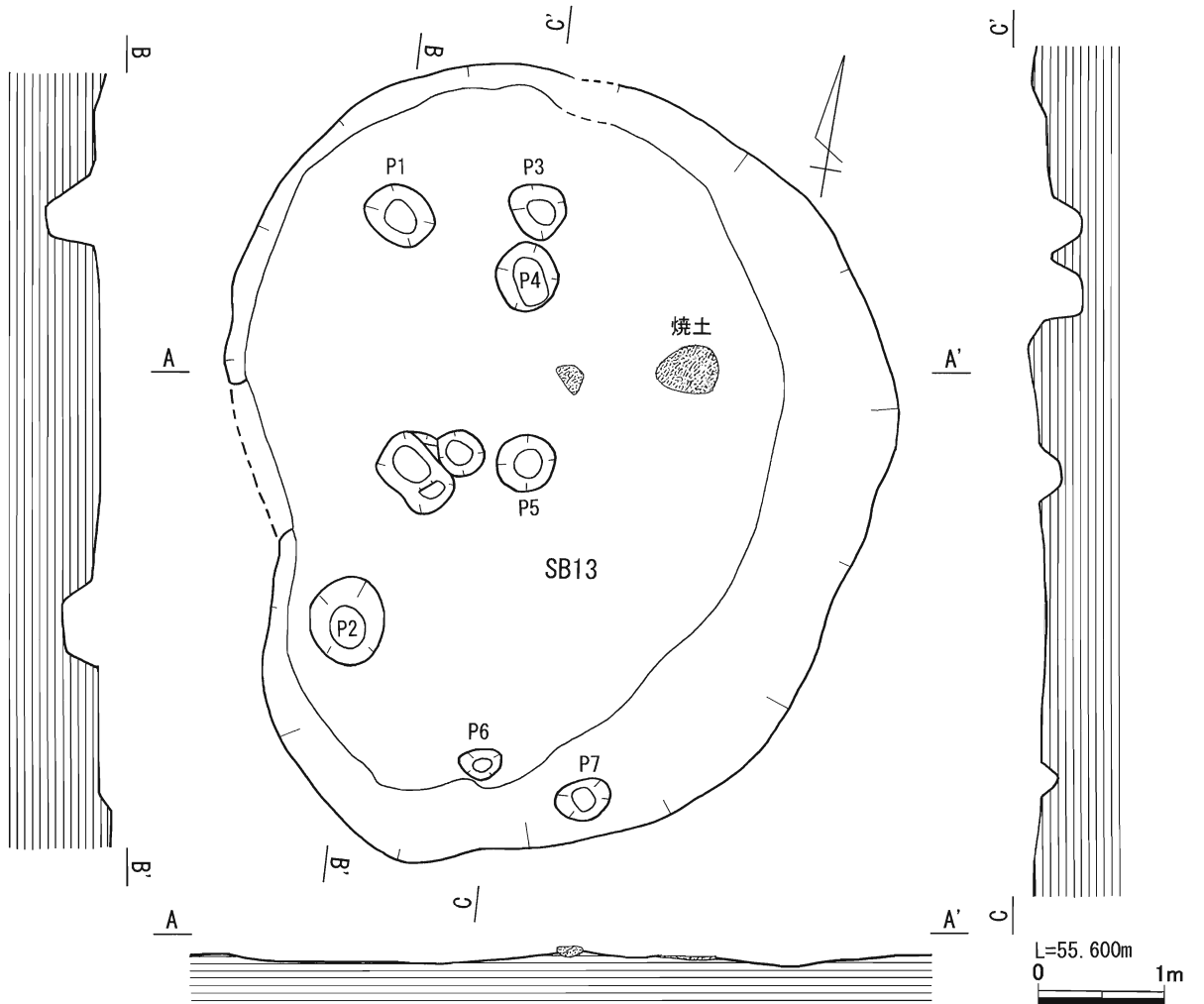
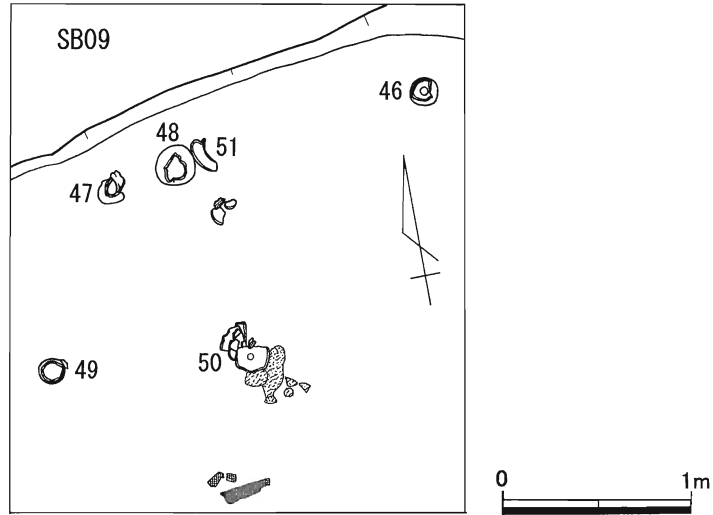
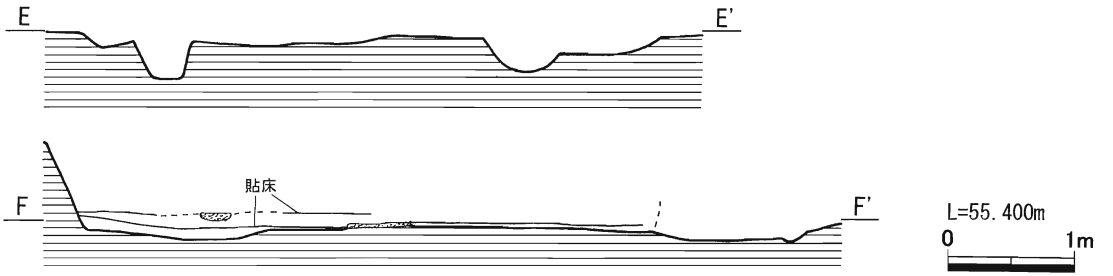


- | | | |
|--------|---------|--------|
| 1 黑褐色土 | 4 灰褐色土 | 7 黑褐色土 |
| 2 黄茶色土 | 5 茶褐色土 | 8 灰色土 |
| 3 灰色土 | 6 暗灰褐色土 | 9 茶褐色土 |

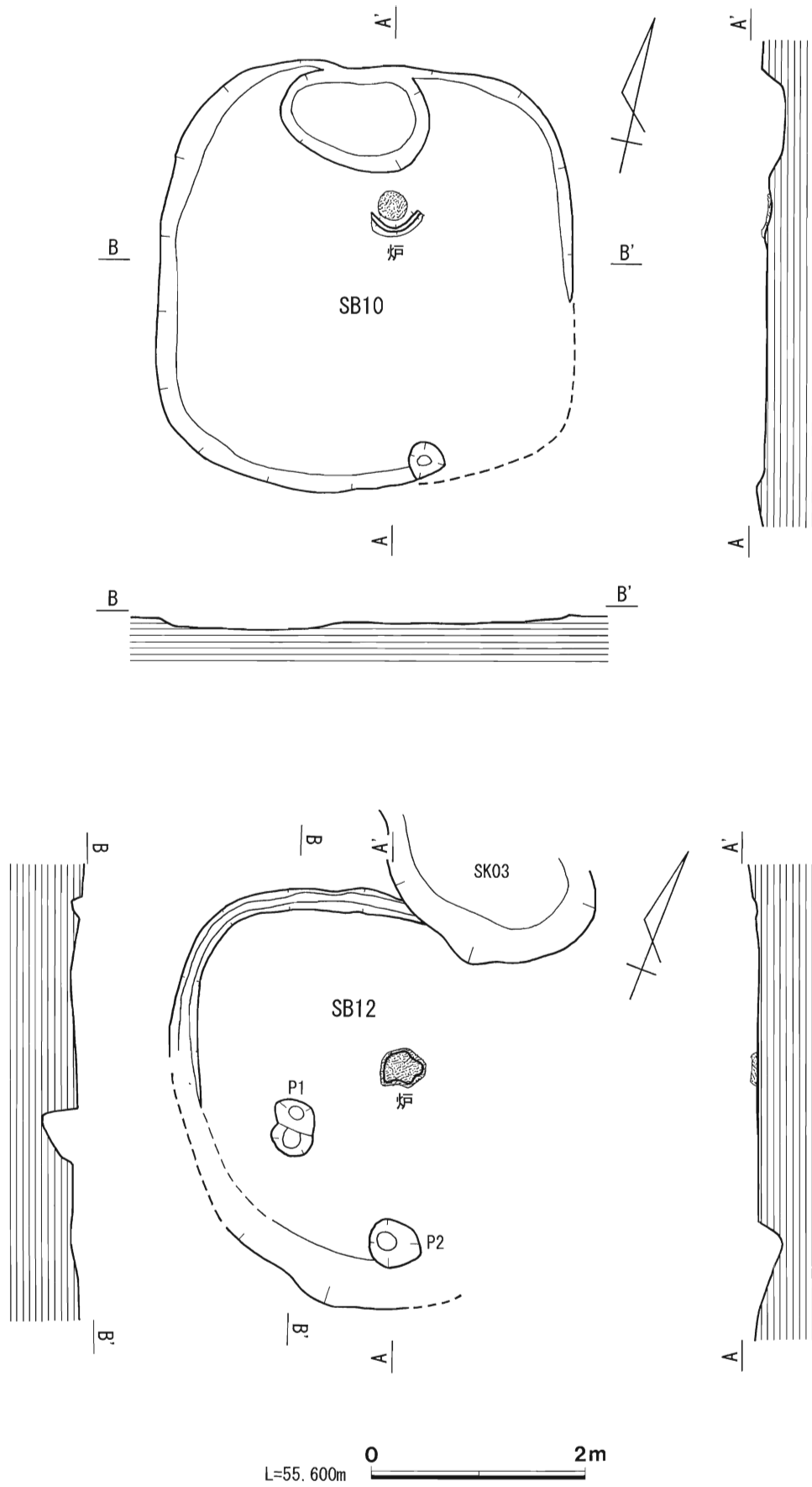
L=55.600m 2m

第31图 SB06实测图

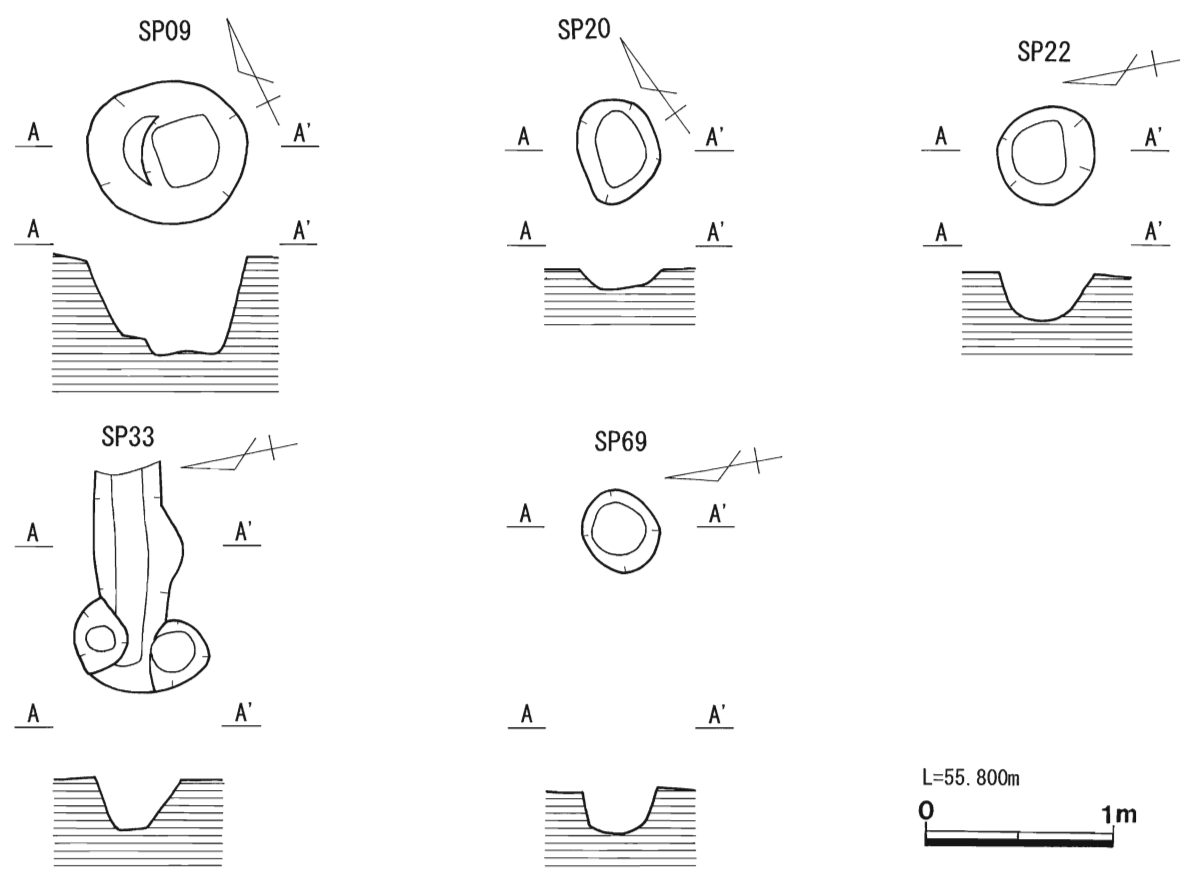
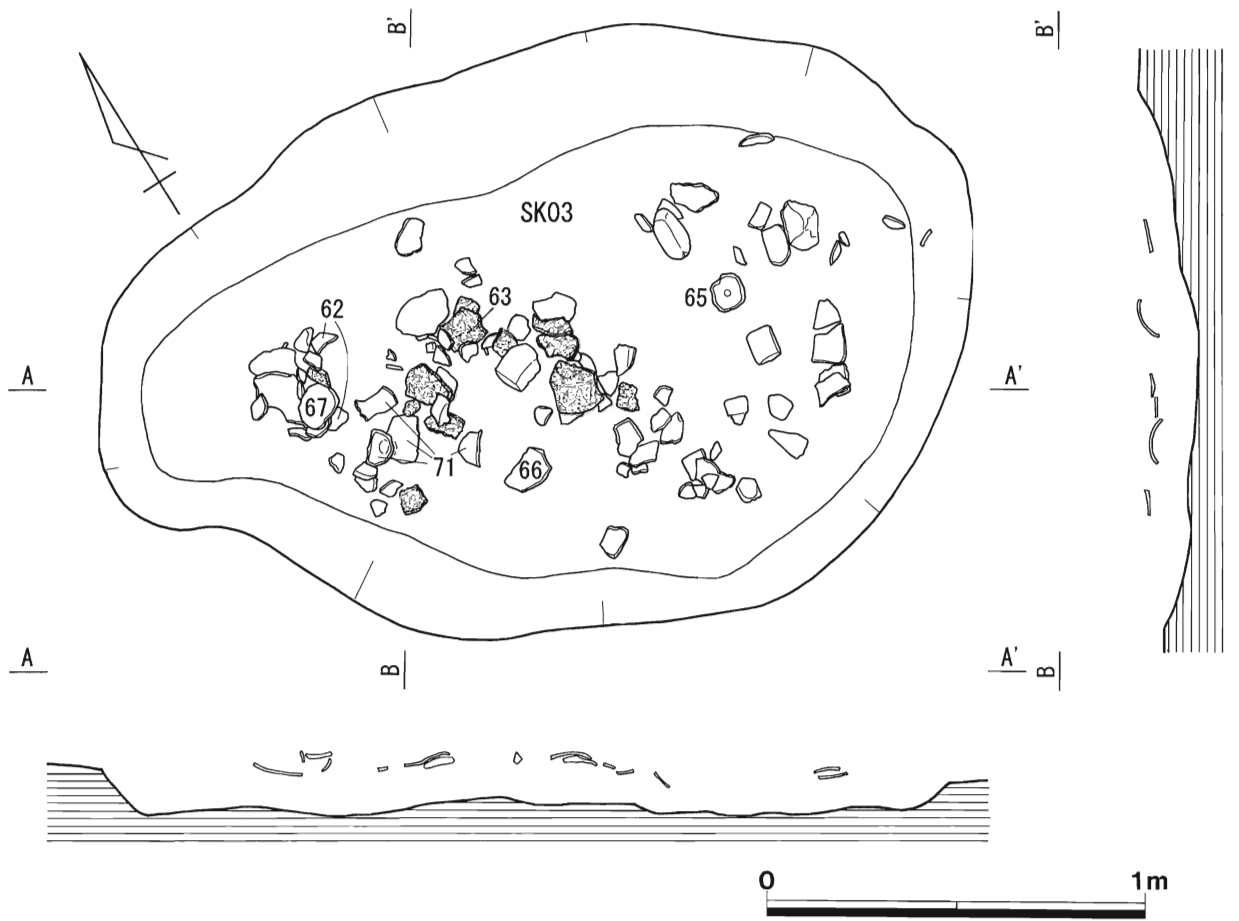




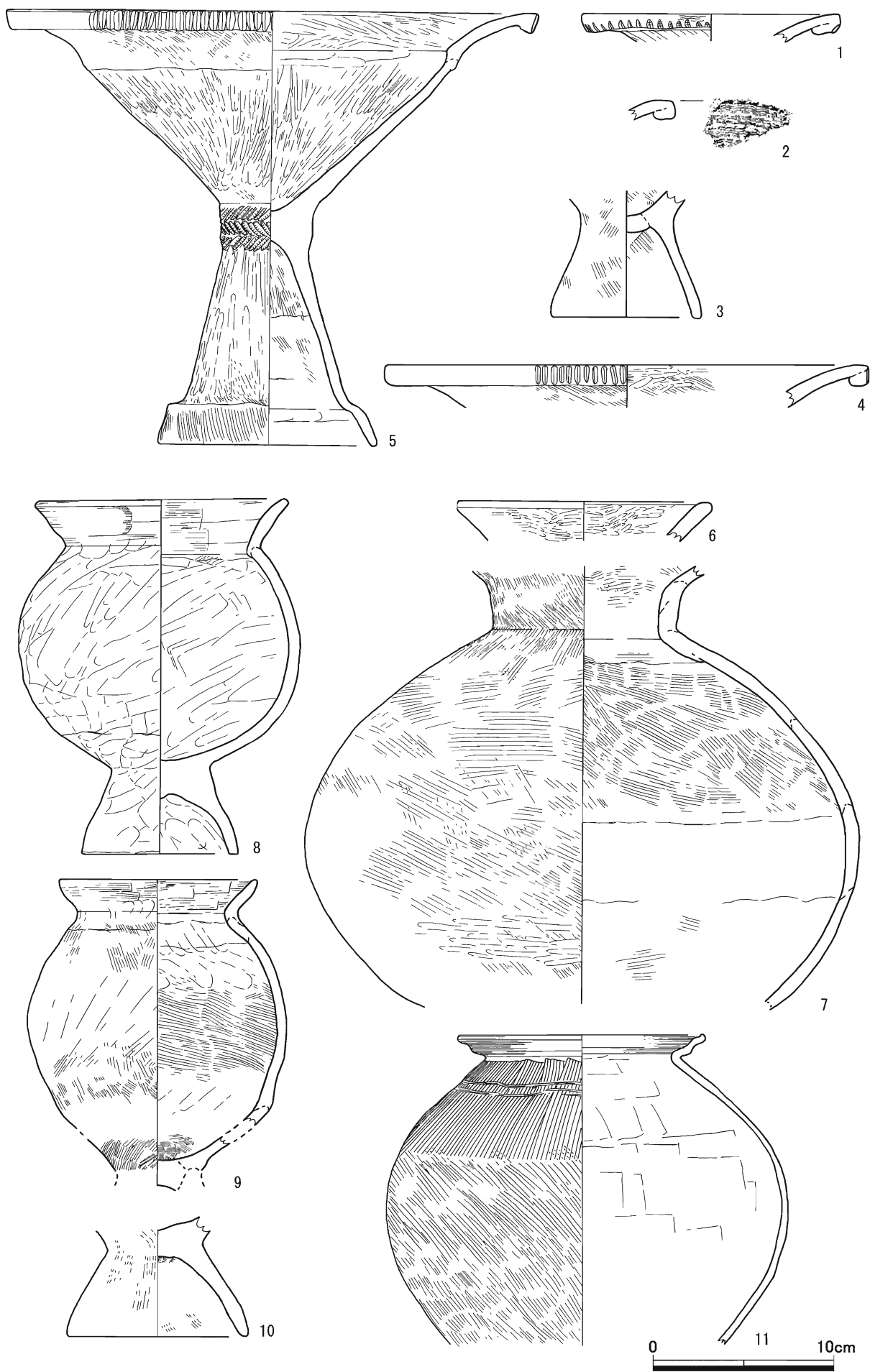
第33図 SB09、13実測図



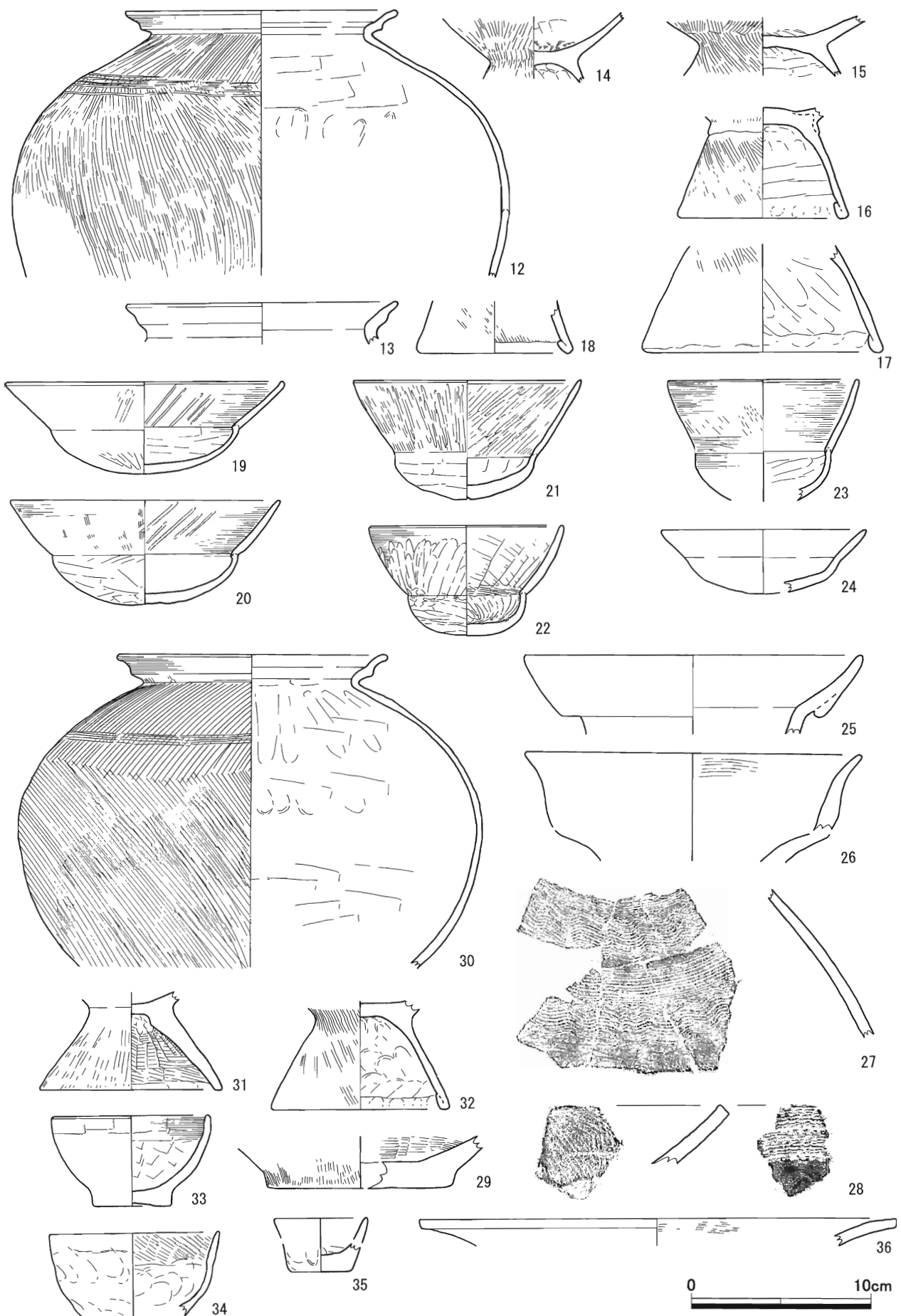
第34図 SB10、12実測図



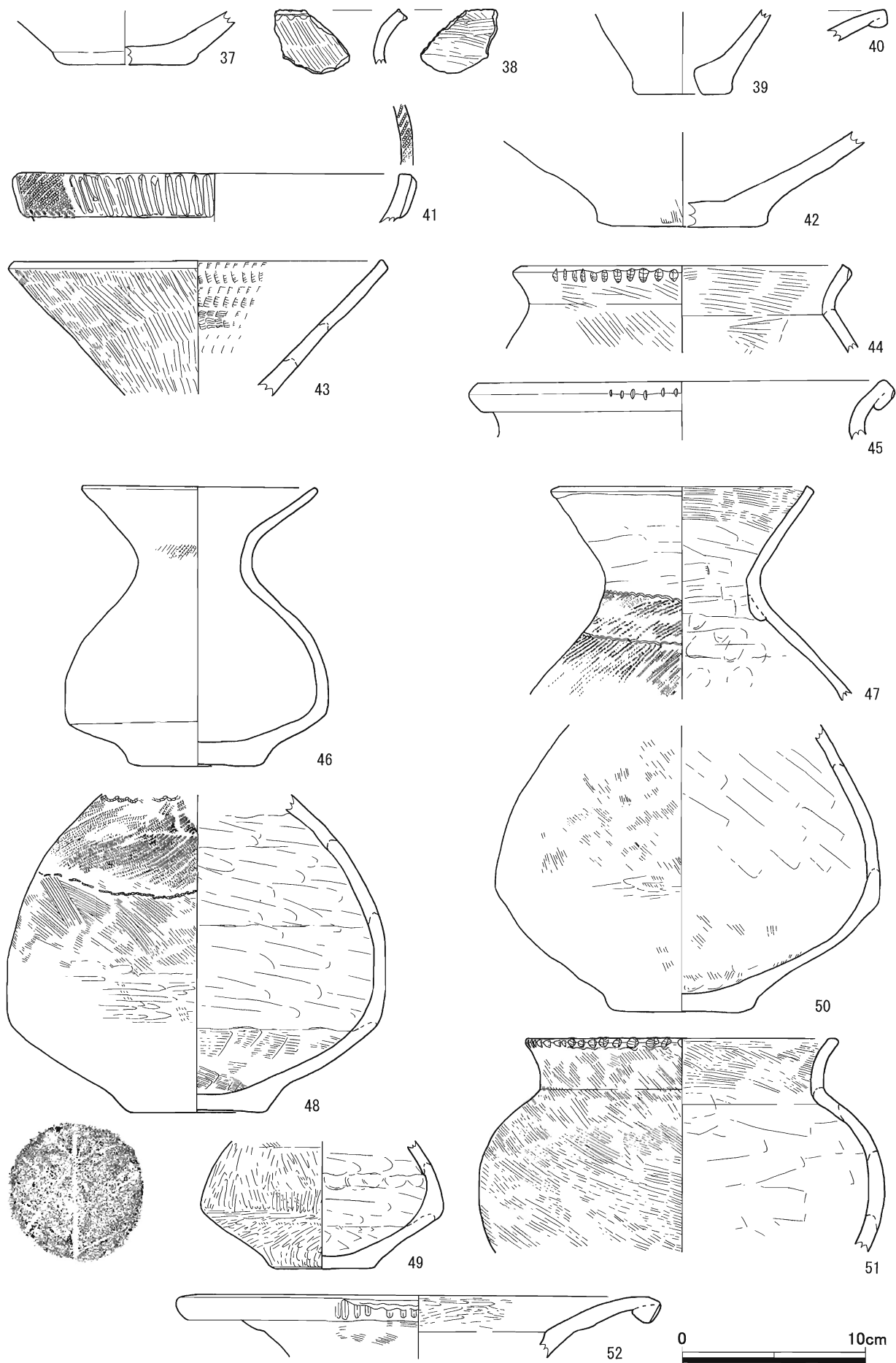
第35图 SK03、SP09、20、22、33、69实测图



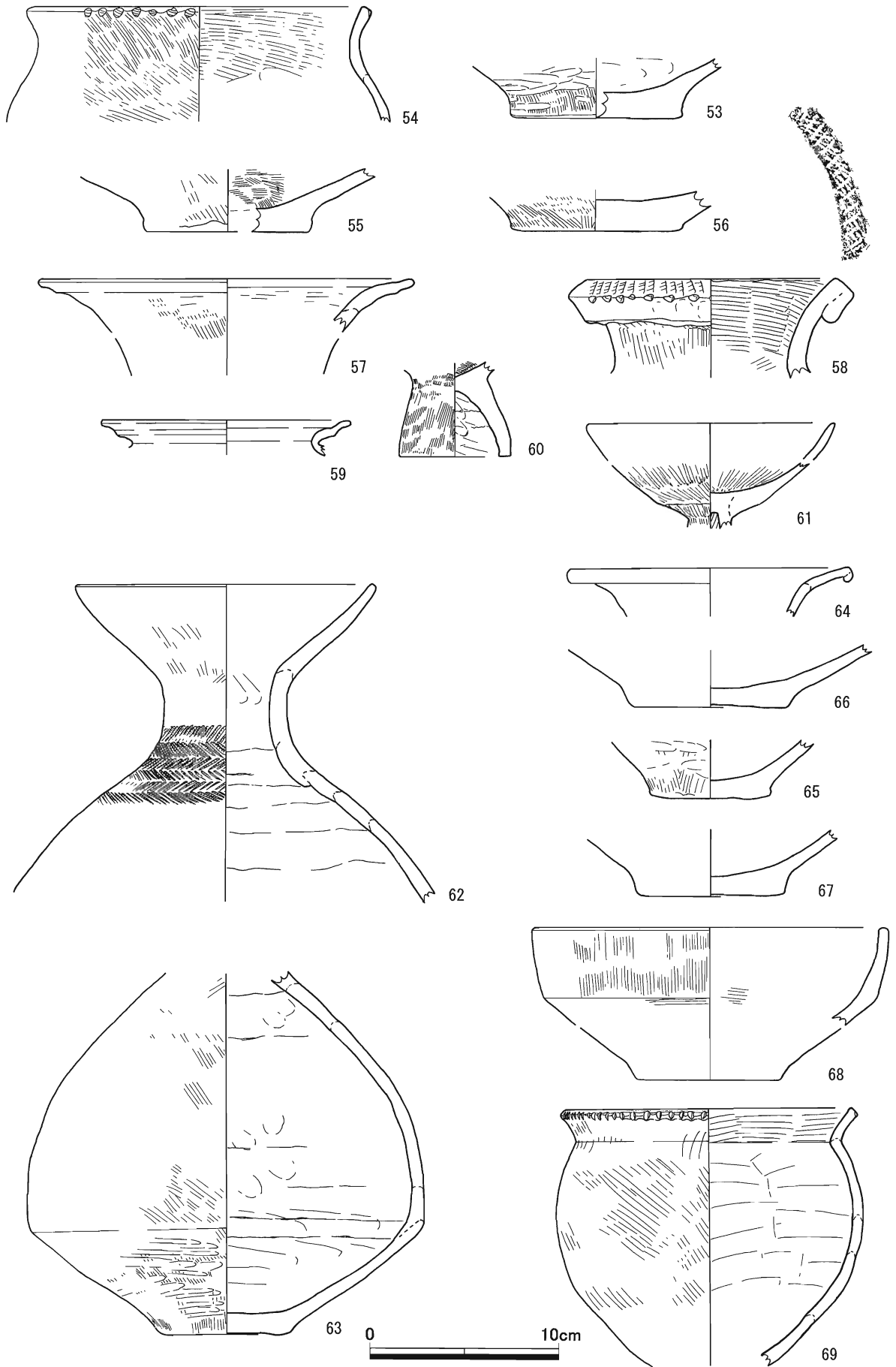
第36図 出土遺物実測図(1)



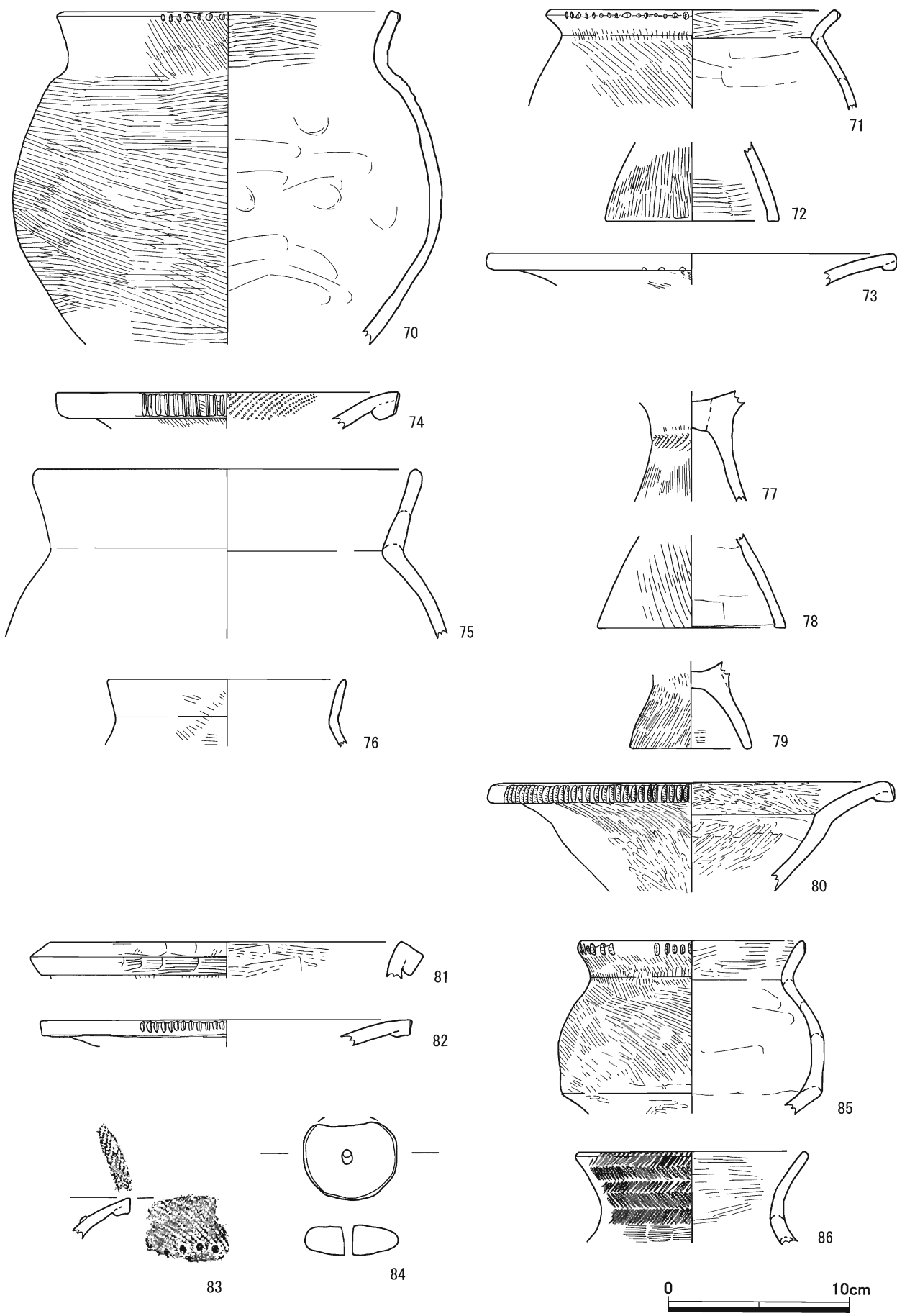
第37图 出土遺物実測図(2)



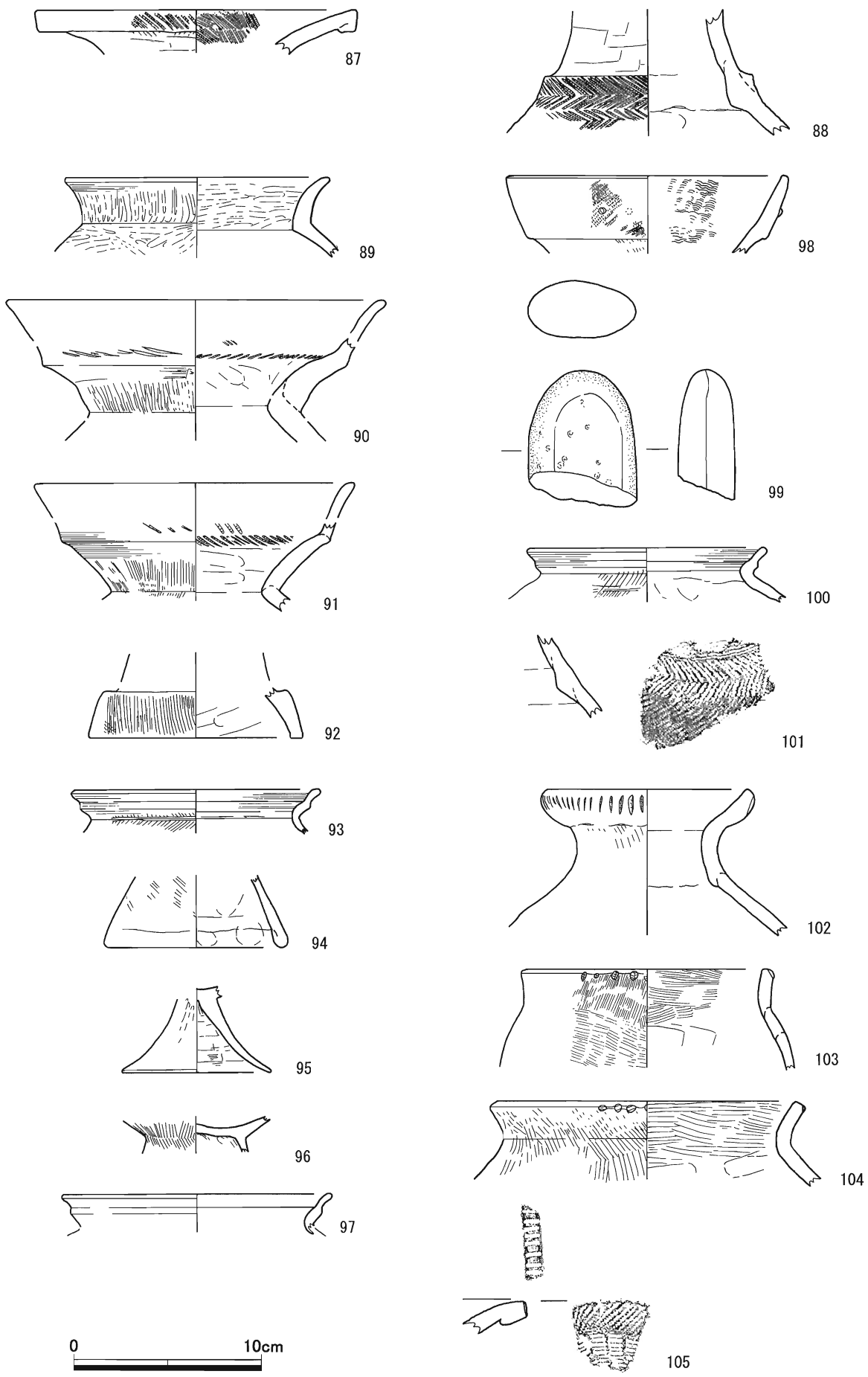
第38図 出土遺物実測図(3)



第39图 出土遺物実測図(4)



第40図 出土遺物実測図(5)



第41图 出土遺物実測図(6)

高田遺跡第25次

IV 高田遺跡第25次

1 調査に至る経緯

埋蔵文化財である高田遺跡内にある当地点において、平成21年度に茶園改植の計画があることを把握し、平成21年9月9日に確認調査を実施した。計画地内に1×0.5mの試掘坑を4カ所設定して調査した結果、弥生時代の土器を確認した。耕作者と協議した結果、改植の深耕が現地地表下0.7mに及ぶことから、遺跡の破壊が免れない状況と判断されたため、記録保存のための本発掘調査を実施することで合意した。

平成22年9月3日付けで、掛川市教育委員会は静岡県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進達した。これに対し、平成22年10月12日付けで、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査の実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

2 調査の方法と経過

調査区の設定 今回の調査は、改植が行われる600㎡の範囲である。対象地の地形に合わせて5m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げや測量・実測の基準とした。東西の列を西から1、2、3…の数字で、南北の列を北からA、B、C…のアルファベットで表すことにした。それぞれの交点をその杭に名称とし、グリッド名は南西角の杭の名称と一致させた。

また、調査地点を国家座標で記録するために、基準点測量を業者に委託し実施した。

重機掘削 耕作土の除去を、重機（バックホー）、クローラードンプを1台ずつ用いて行った。

遺構検出 最初は遺構確認面において人力により、粗掘を行った。鍬と鋤簾を使用し、5～10cmほど地表を掘り下げた後、鋤簾を用いて地表を丁寧に削り遺構を検出した。

遺構掘削 検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、土層帯を設定し観察を行った。

遺構実測 遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図は1/10の縮尺で、遺構全体平面図と土層断面図は1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判（モノクロ）1台と35mm判（カラーネガ、リバーサル）2台を使用した。調査区遠景、全景の垂直写真等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて撮影を行った。

整理作業 出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土位置を注記し、また接合復元した後に、実測等の作業を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に編集し清書した。そして、遺物の写真撮影、報告を原稿にまとめ、印刷に付した。

3 調査の成果

調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡10軒分、掘立柱建物跡1棟分、近世土坑墓1基の他数多く小穴等を確認した。竪穴住居跡は、ほとんどが重複関係にあり、炉跡の検出状況数から考えるとさらに多くの竪穴住居跡が存在していたと思われる。

(1) 竪穴住居跡

SH01 (第44、51図)

A・B-3・4区に位置する。掘り方の北側部分は、調査区外へ及んでいる。規模は東西5mを測り、形状は隅丸方形であると推定される。炉跡は、中央からやや北寄りで確認されたが、遺存状態が悪く、遺構検出面で確認された。

出土遺物は、第51図1～4である。1～3は壺である。1は折返口縁の壺で、口縁部は直線的に開き、口唇部は玉縁状の折返口縁となっている。口唇部は横ハケの後、櫛刺突文、内面は櫛描波状文が施されている。2は肩部の破片で、櫛刺突文が施されている。4は、台付甕の台部である。

SH03・04 (第45、51図)

B・C-3・4区に位置する。切り合い関係にある竪穴住居跡SH03・04の掘り方北辺の一部分が検出された。SH03・04ともに規模、形状は不明であり、しかも新旧関係も明確ではない。SH03の支柱穴はSP69、168、56、60、SH04の支柱穴はSP69、75、55、59と考えた。焼土は検出面において確認された。SH05との切り合い関係は不明である。

出土遺物は、第51図5～11である。5は壺の肩部の破片である。櫛描波状文、縄文LRを施文した後に円形貼付文が施されている。6は粗製の折返口縁をもつ鉢、7は口唇部に刻目を持たない甕である。8と9は台付甕の台部である。10はSP60から出土した壺底部、11は、SP69から出土したくの字口縁の台付甕である。11の口唇部には、刻目が施されていない。

SH05 (第46、51図)

C-3・4区に位置する。掘り方の北側半分を調査した。規模は、東西5.2mを測る。炉跡、焼土は確認されなかった。

出土遺物は、第51図12～17である。12と13は壺である。12は肩部の破片で、櫛刺突羽状文が施されている。13は折返口縁で、口唇部にはヘラ状工具による刺突文、内面には縄文を施した後、円形貼付文が施されている。14～16は、台付甕の台部である。17は、SP55から出土した高坏脚部である。SP55は、SH04の支柱穴の一つとも考えられる。

SH06 (第46、51、55図)

B・C-4・5区に位置する。掘り方の南側は明確には確認されなかったが、規模は東西4m、南北4.1mと推定される。形状は、隅丸方形と考えられる。掘り方内で炉跡は確認されなかったが、掘り方の北側外では焼土が検出されている。この焼土については、SH06に伴うものか否かは不明である。

出土遺物は、第51図18～21、第55図69である。18は単純口縁の壺で、内面に縄文が施されている。19は折返口縁の壺で、内面に櫛刺突羽状文が施されている。20は弥生時代中期前葉の甕で、口唇部に

は凹面が作り出され、内面には条痕文が施されている。21は台付甕の台部である。69は、SP71から出土した壺の破片である。縄文と櫛描波状文が施されている。

SH07 (第47、51図)

A・B-4・5区に位置する。掘り方西側の一部分が確認された。土層の堆積状況から東西の規模は、3.6mと推定される。形状は不明である。中央からやや北寄りと推定される場所に、炉跡を確認した。

出土遺物は、第51図22～26である。22と23は壺である。22は内面に縄文が施され、その上に円形貼付文が施されている。24と25はくの字口縁の甕で、口唇部には刻目は施されていない。26は高坏で、口唇部の上端と下端に櫛刺突文が施されている。

SH08、09 (第47、48、52～54図)

A・B-5・6区に位置する。2軒分の竪穴住居跡が重なっているが、新旧関係は不明である。中央から北寄りに炉跡が確認された。SH09の掘り方南側において多量の土器が出土した。遺物は床面から完全に浮いて出土していることから、竪穴住居が廃棄された後、掘り方の窪地に不要になった土器等が捨てられたものと考えられる。

出土遺物は、第52図27～第54図61である。27～32はSH08からの出土である。27は内湾口縁をもつ鉢で、内外面にミガキ調整が施されている。28は単純口縁の壺で、口唇部には縄文、内外面にはハケ調整が施されている。また内面に赤彩が施されている。29は小型壺、30は壺底部である。31は折返口縁の鉢、32は小型の台付甕の台部である。

33～61がSH09の土器集積からの出土である。出土した土器の器種は、壺と甕だけであり、高坏は含まれていなかった。33～57が壺である。33、36～42、49は単純口縁と内湾口縁の壺である。33、38、41は口縁部がゆるやかに内湾し、口唇部には端面を持っている。33は肩部に櫛刺突羽状文が施されている。体部上部はハケメ調整、下半部はハケメ調整の後ミガキ調整が施されている。口縁部内面は、無節の縄文が施されている。38と41は、内面に縄文が施されている。36、37、40、42は、口縁部が直線的ではあるが、わずかに内湾化して開くものである。36と40は内面に縄文が施され、口唇部にも縄文が施されている。39と49は、直線的な口縁をもつもので、口唇部には端面をもち、内面には縄文が施されている。34、43、44、46は折返口縁の壺である。34は、口唇部に櫛刺突文、肩部と口縁部内面には結節縄文が施されている。43は、口唇部に櫛刺突文、内面に無節の縄文が施されている。44は、口唇部に櫛刺突文、内面は縄文が施された後、上段に3個、下段に2個を単位とした円形貼付文が4方向に施されている。46は、口唇部に櫛刺突文を19で1単位として4方向に、肩部と内面に縄文が施されている。45、47は複合口縁の壺である。45は、外面にはハケ調整、内面には無節の縄文が施されている。47は、肩部に櫛刺突横線文、櫛刺突羽状文、無節の縄文が施されている。体部下半は、ハケの後ミガキ調整が行われている。35は、体部上半で櫛刺突横線文の下方に櫛刺突羽状文が施されている。48、50～55は壺の体部である。50は底部に、52は体部下半に赤彩が認められる。53は、体部上半に施文が施されている。縄文を施した上に3個1単位の円形貼付文が付されている。方向は不明である。縄文の下方には4本描の櫛描波状文が施されている。また、その上には、円形貼付文が12カ所に施されている。体部下半はミガキ調整が行われている。54は、肩部に縄文が施されている。体部下半はミガキ調整が行われ、赤彩が施されている。内面底にも赤彩が確認できた。56と57は、平底の壺底部である。58は、くの字口縁の甕である。口唇部には刻目が施されている。外面には、ススが付着し

ていた。59と60は、台付甕の台部である。59は内湾する台部で、体部との接合部には粘土帯が認められた。60は直線的に開く台部で、体部との接合部には粘土帯が認められた。61は小型の甕である。口唇部には刻目が施されていない。

SH10（第49、55図）

A-5区に位置する。掘り方西側の一部分を調査した。規模、形状は不明である。炉跡は確認されているが、支柱穴の配置は明確ではない。

出土遺物は、第55図62と63である。62は台付甕の台部である。63は頁岩製の石鏃片である。

SH13（第45、55図）

B-4区に位置する。掘り方北側の一部分が検出された。規模、形状は不明である。SH03、04、06と切り合い関係にあるが、その新旧関係は不明である。焼土は確認されたが、支柱穴の配置は明確ではない。

出土遺物は、第55図64と65である。64は単純口縁の壺、65は小型の鉢である。

（2）掘立柱建物跡

SB01（第49図）

C-2、3区に位置する。柱間は梁間1間×桁行3間で、規模は3.2×4.5mを測る。長軸の方位は、N9°30'Wである。すべての柱穴から土器は出土したが、小片のため図示はしなかった。

（3）小穴

SP42（第50、55図）

A-2区に位置する。規模は長軸0.84m、短軸0.75mを測る。

出土遺物は、第55図66と67である。66は小型の鉢、67は台付甕の台部である。

SP57（第50、55図）

C-3区に位置する。規模は長軸0.9m、短軸0.6mを測る。

出土遺物は、第55図68で内湾する口縁をもつ鉢と考えられる。

SP94（第50、55図）

C-5区に位置する。規模は長軸0.5m、短軸0.34mを測る。

出土遺物は、第55図70の折返口縁をもつ鉢である。

SP115（第50、55図）

A-4区に位置する。規模は長軸0.5m、短軸0.4mを測る。

出土遺物は、第55図71の単純口縁の壺である。口縁部は短く直線的に開き、口唇部は端面を有し、ヘラ状工具による刺突文が施されている。肩部には有段の突帯が施されている。

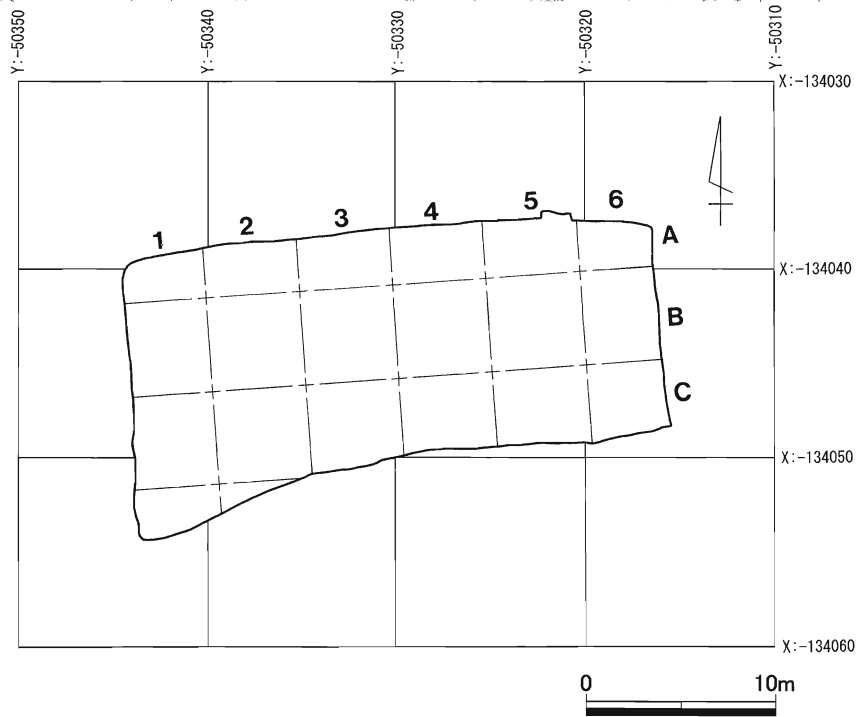
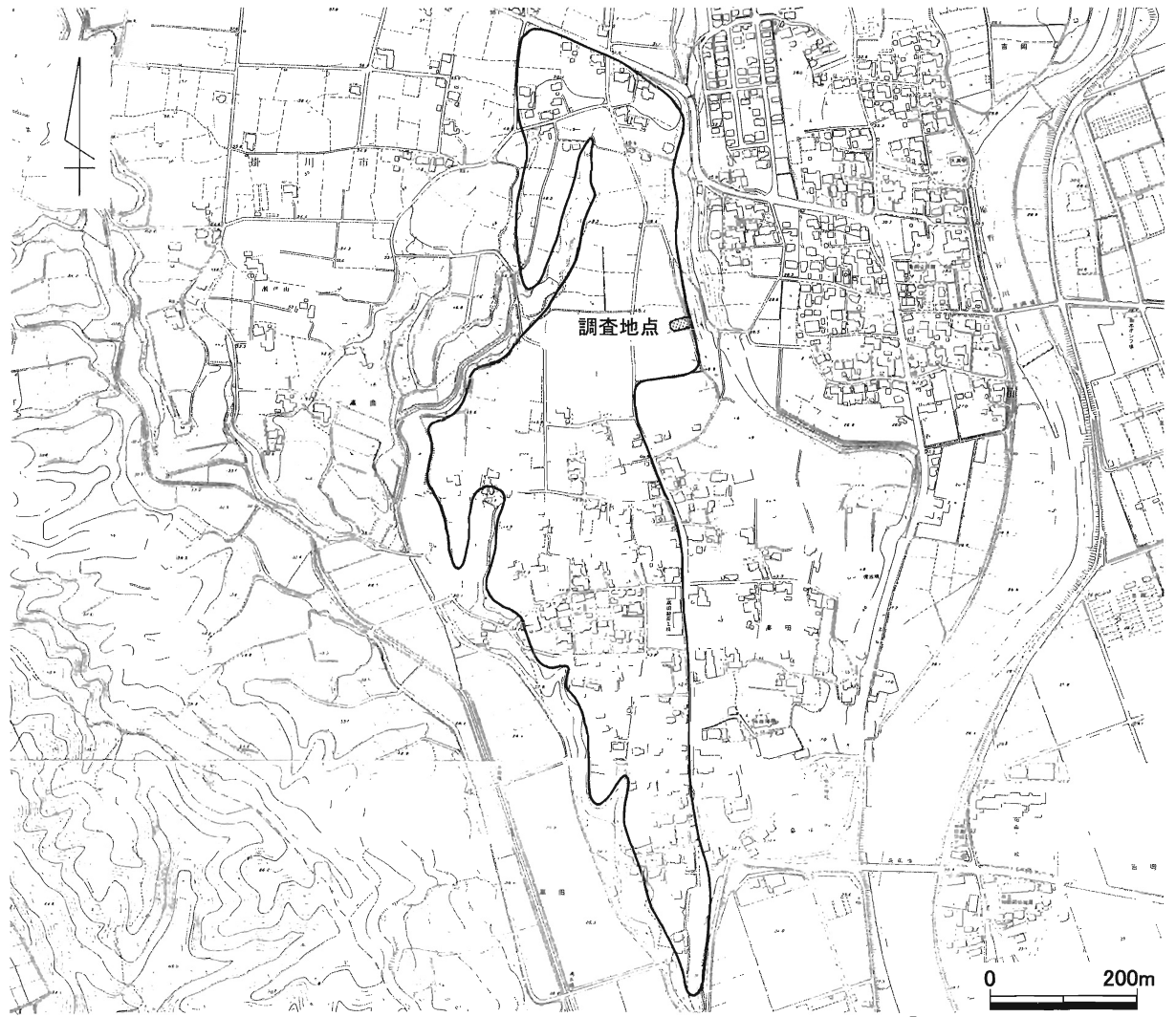
(4) 近世土坑墓

SK01 (第50、55図)

B-4区に位置する。土坑状の掘り方を有していたと考えられるが、後世の攪乱により形状や規模は不明である。炭や焼土、骨片を含んだ黒褐色土を覆土としており、かわらけが5枚が並んで出土し、六文銭も出土した。かわらけは第55図72~76であり、出土状態からSK01は、戦国期から江戸時代の土坑墓である。

(5) その他 (第55図)

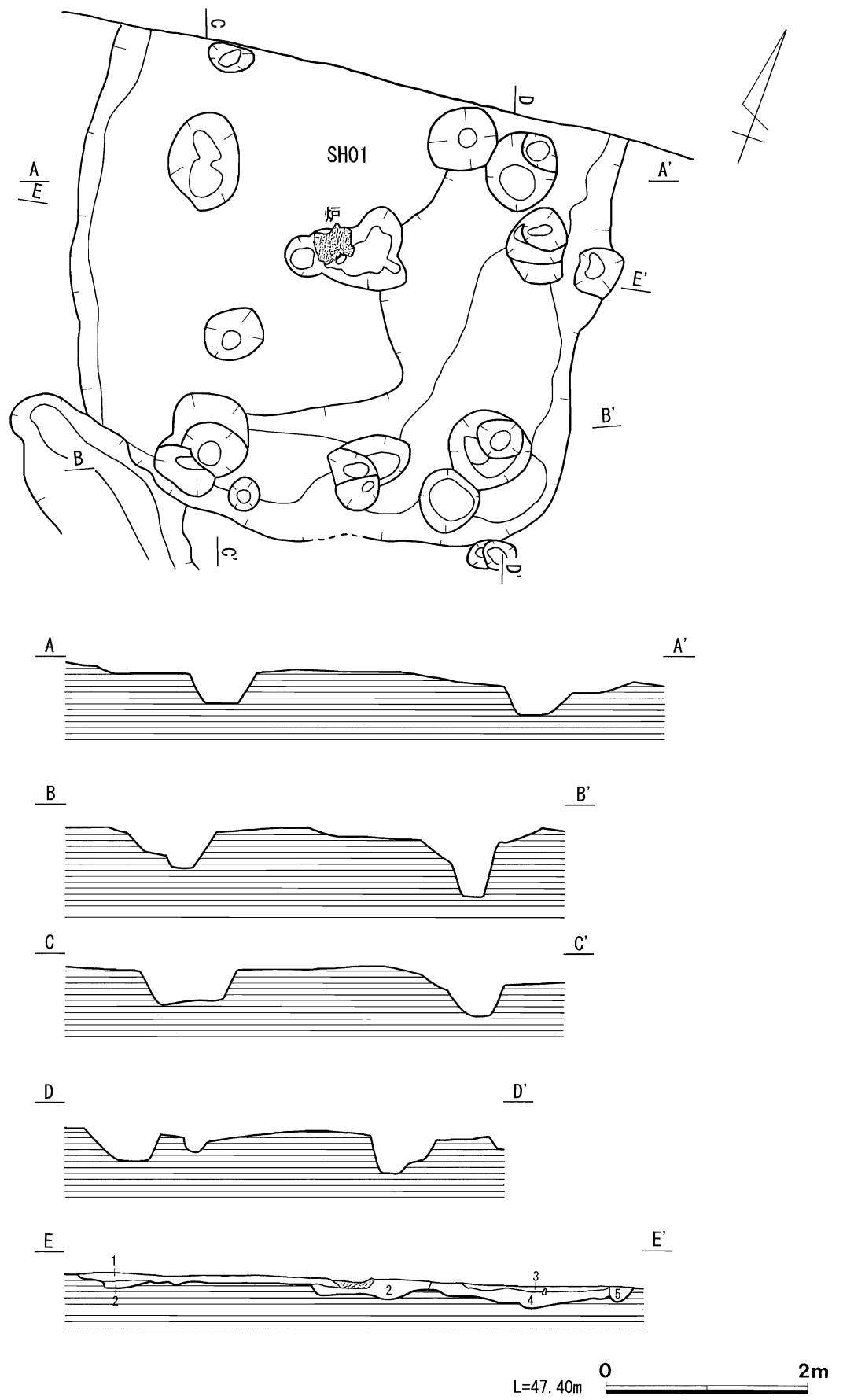
77は、A-4区から出土した小型の壺もしくは鉢である。78と79はB-3区から出土した。78は、複合口縁の壺である。口縁部には、単位は不明であるが6方向に棒状貼付文が施されている。79は高坏脚部で、櫛刺突羽状文が施されている。80~82はB-4区から出土した。80は単純口縁の壺で、口縁部は直線的に開き、口唇部は端面を持っている。81は折返口縁の鉢で、口唇部には縄文が施されている。82は折返口縁の壺である。口唇部には、櫛刺突文が施されている。83と84は、B-5区から出土した。83は小型の鉢である。84は、折返口縁の壺である。口唇部と内面には、縄文が施されている。85~87は、B-6区から出土した。85は、単純口縁の壺である。内面には縄文が施されている。86は壺底部、87はくの字口縁の甕である。88はC-4区から出土した単純口縁の壺である。口唇部には刺突文が施され、外面には羽状縄文が施されている。89と90はC-5区から出土した。89は壺底部、90はくの字口縁の甕である。口唇部には刻目が施されている。91は、C-6区から出土した台付甕の台部である。92と93は排土中から出土した。92は単純口縁の壺である。口縁部はやや内湾しながら開き、口唇部は端面を持っている。内面には縄文が施されている。93は、複合口縁の壺である。肩部には櫛刺突羽状文が施されている。



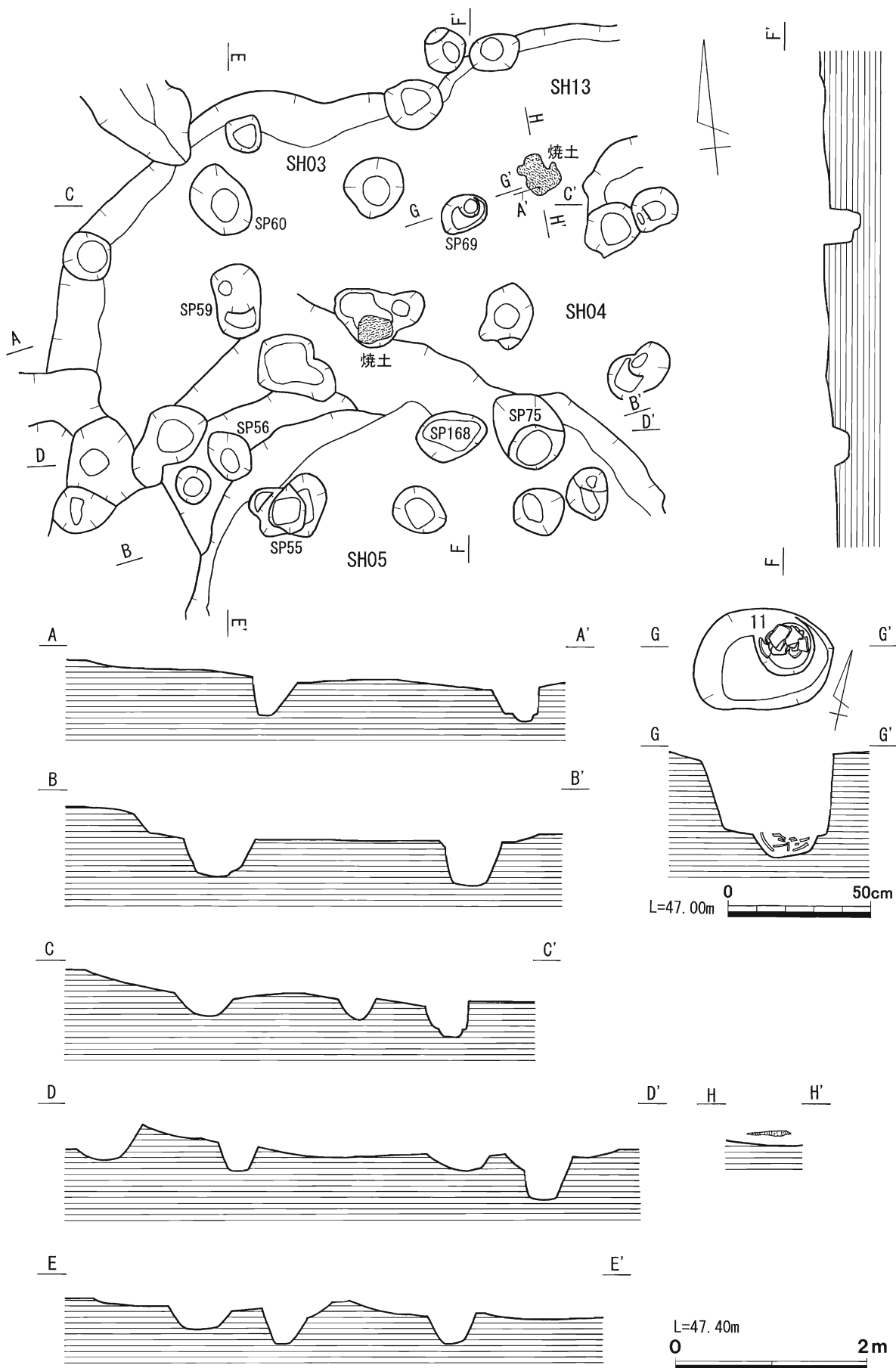
第42図 遺跡位置図・グリッド配置図



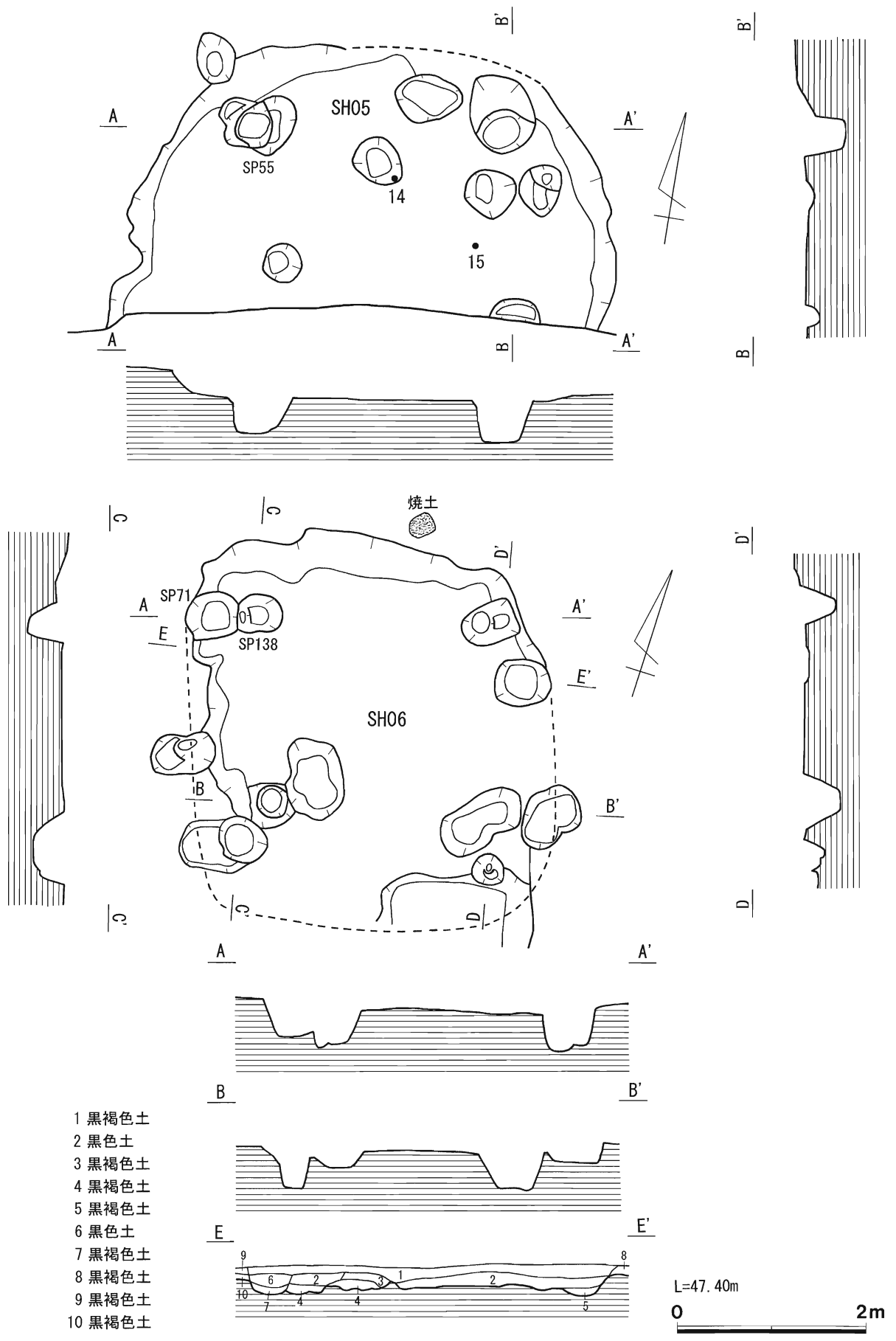
第43図 遺構全体図



第44図 SH01実測図

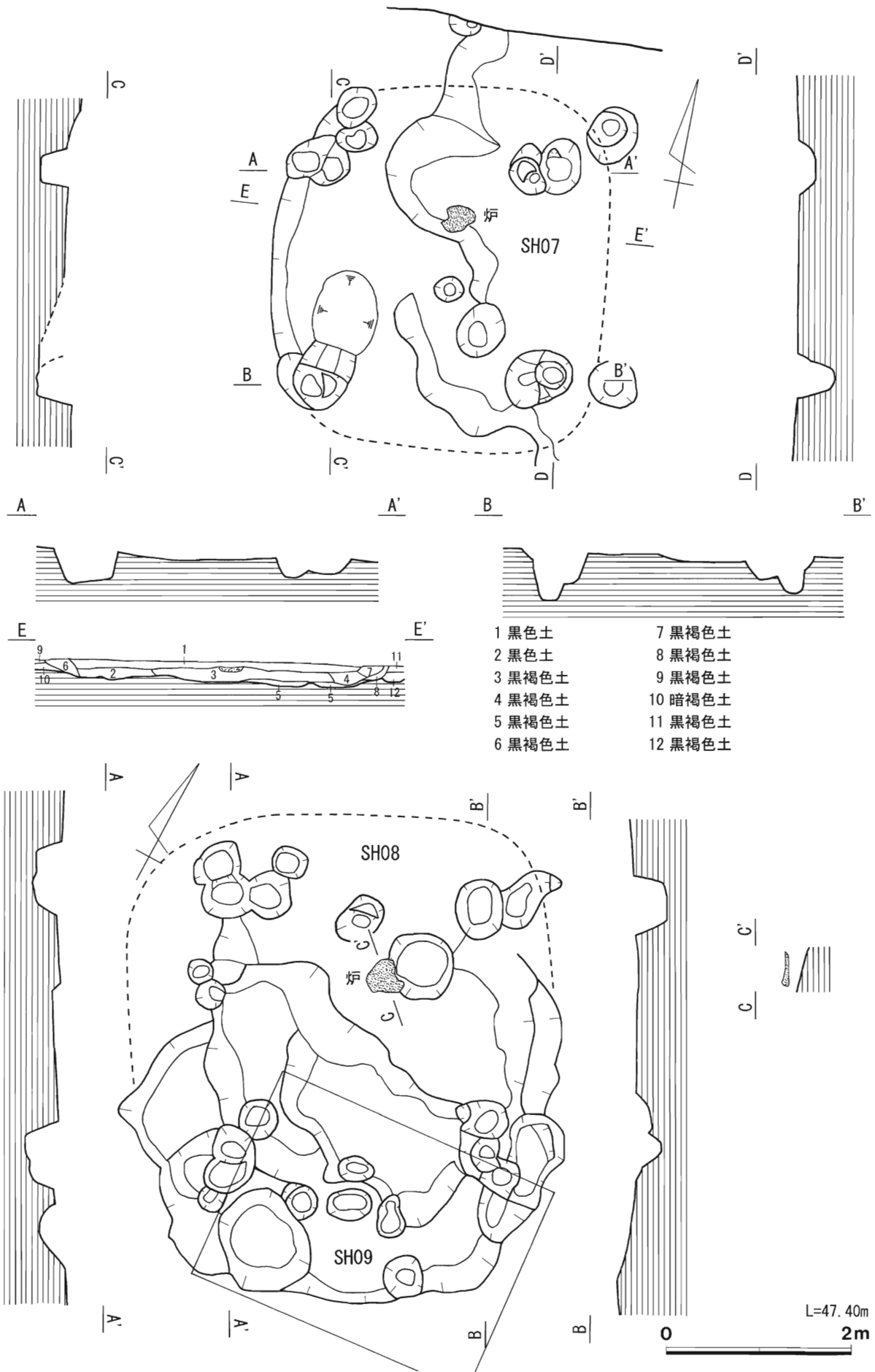


第45図 SH03、04、13実測図

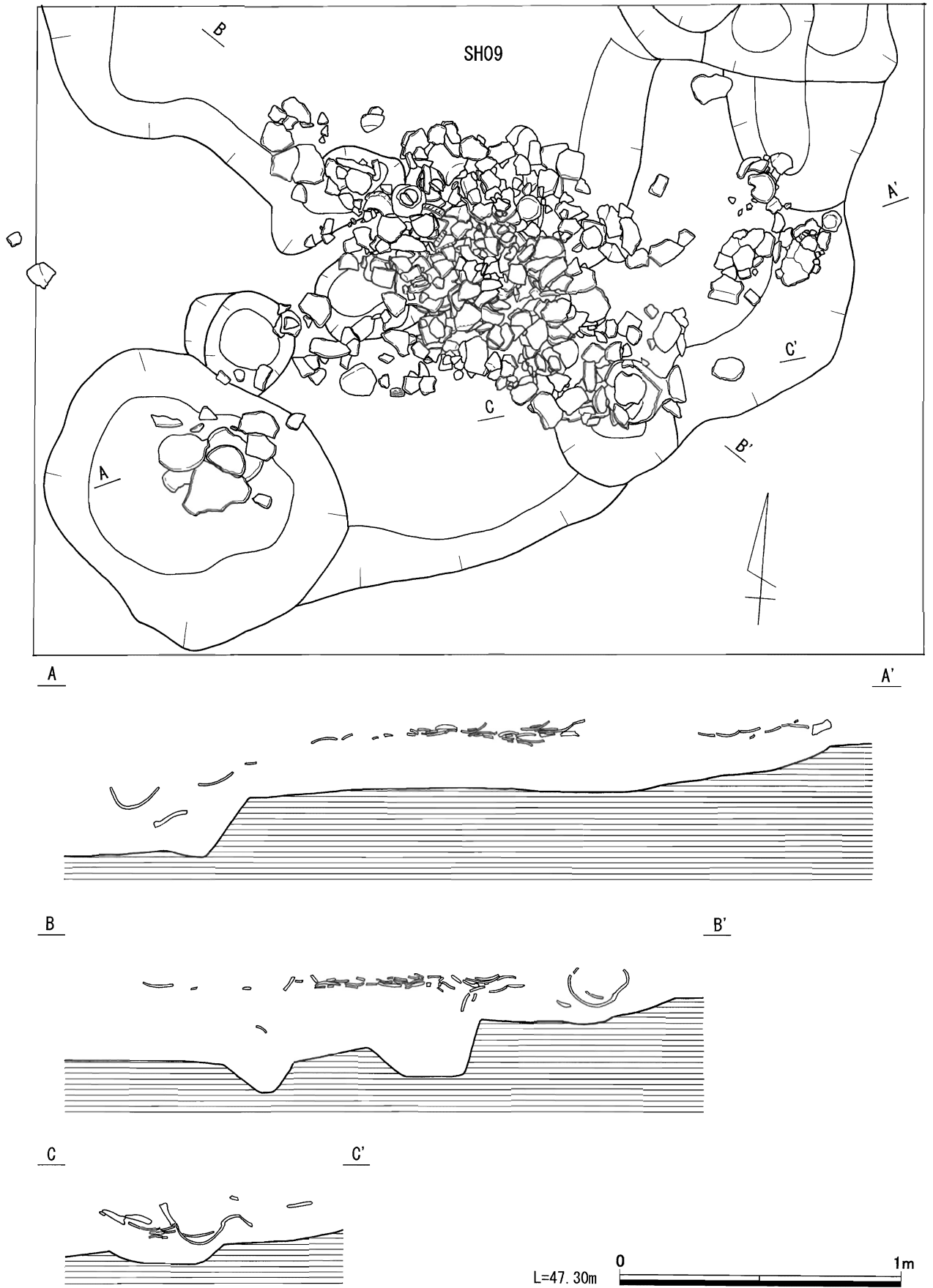


- 1 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黒色土
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土

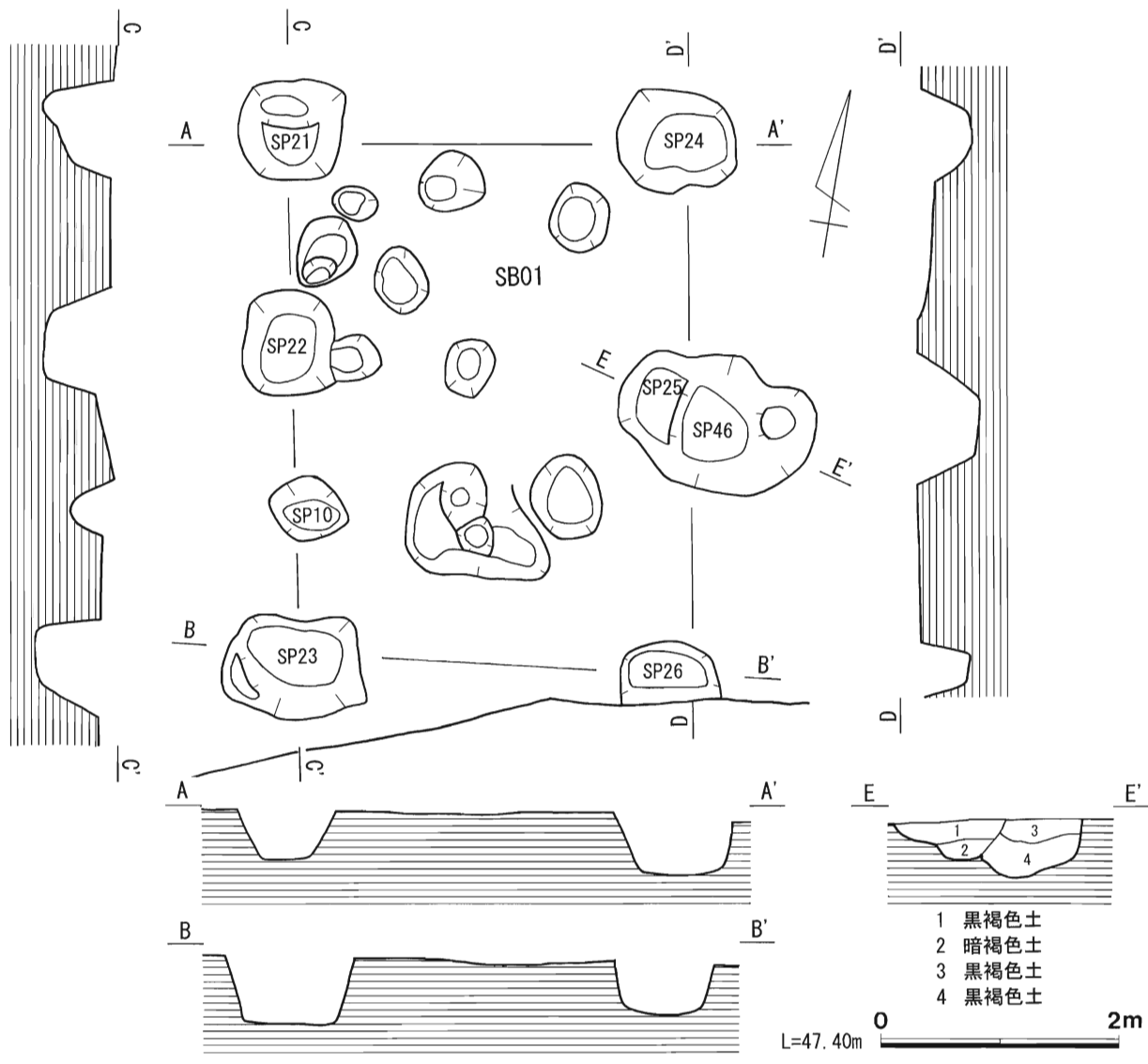
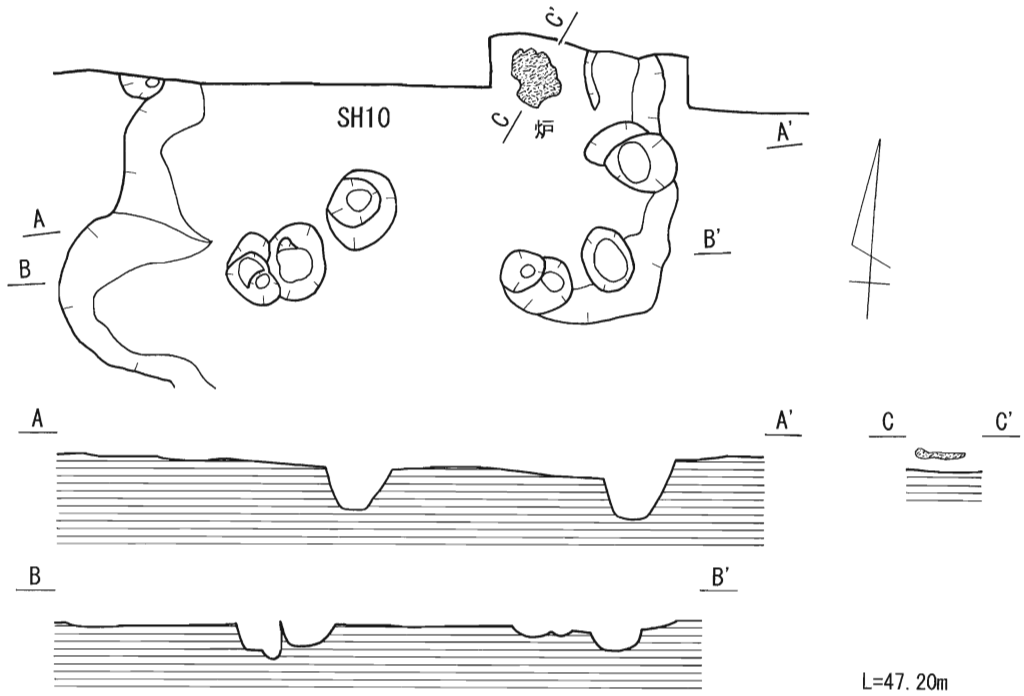
第46図 SH05、06実測図



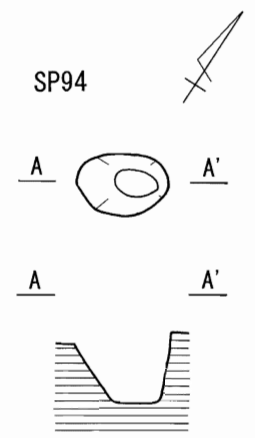
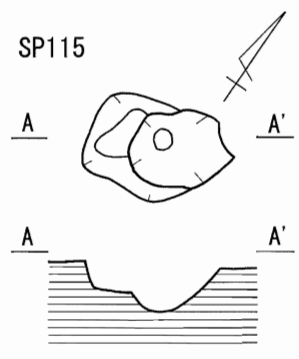
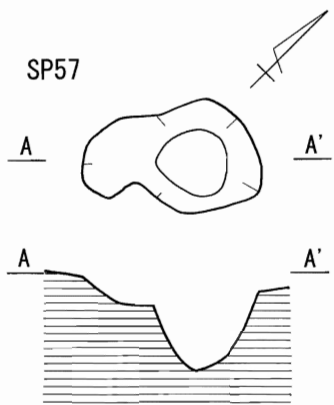
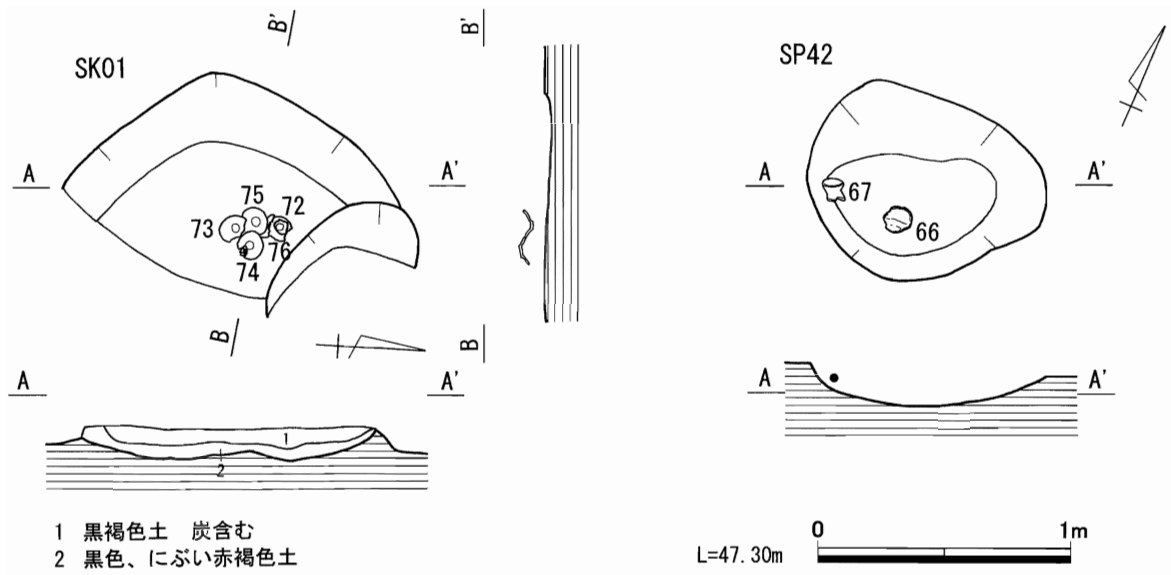
第47図 SH07、08、09実測図



第48图 SH09实测图

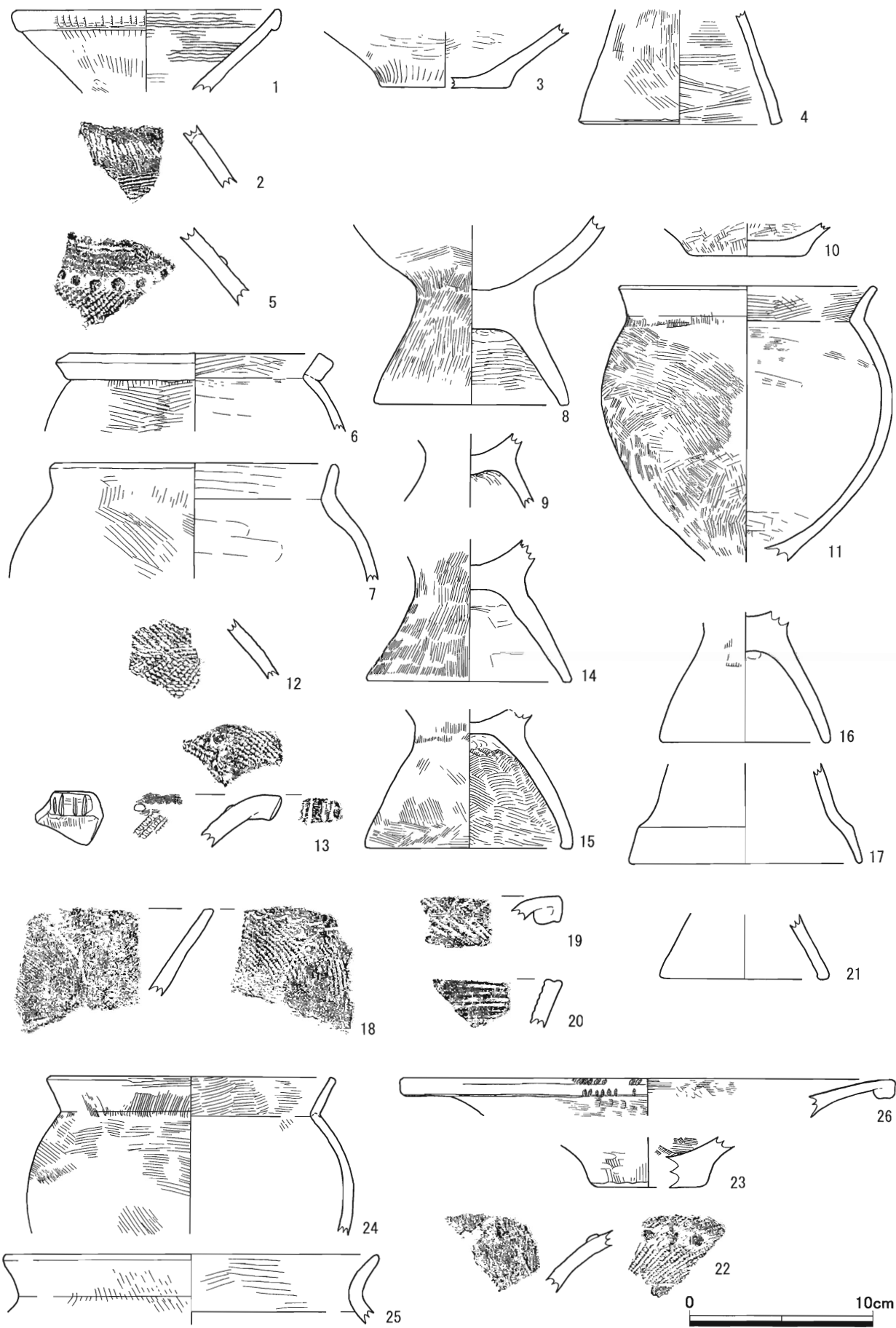


第49図 SH10、SB01実測図

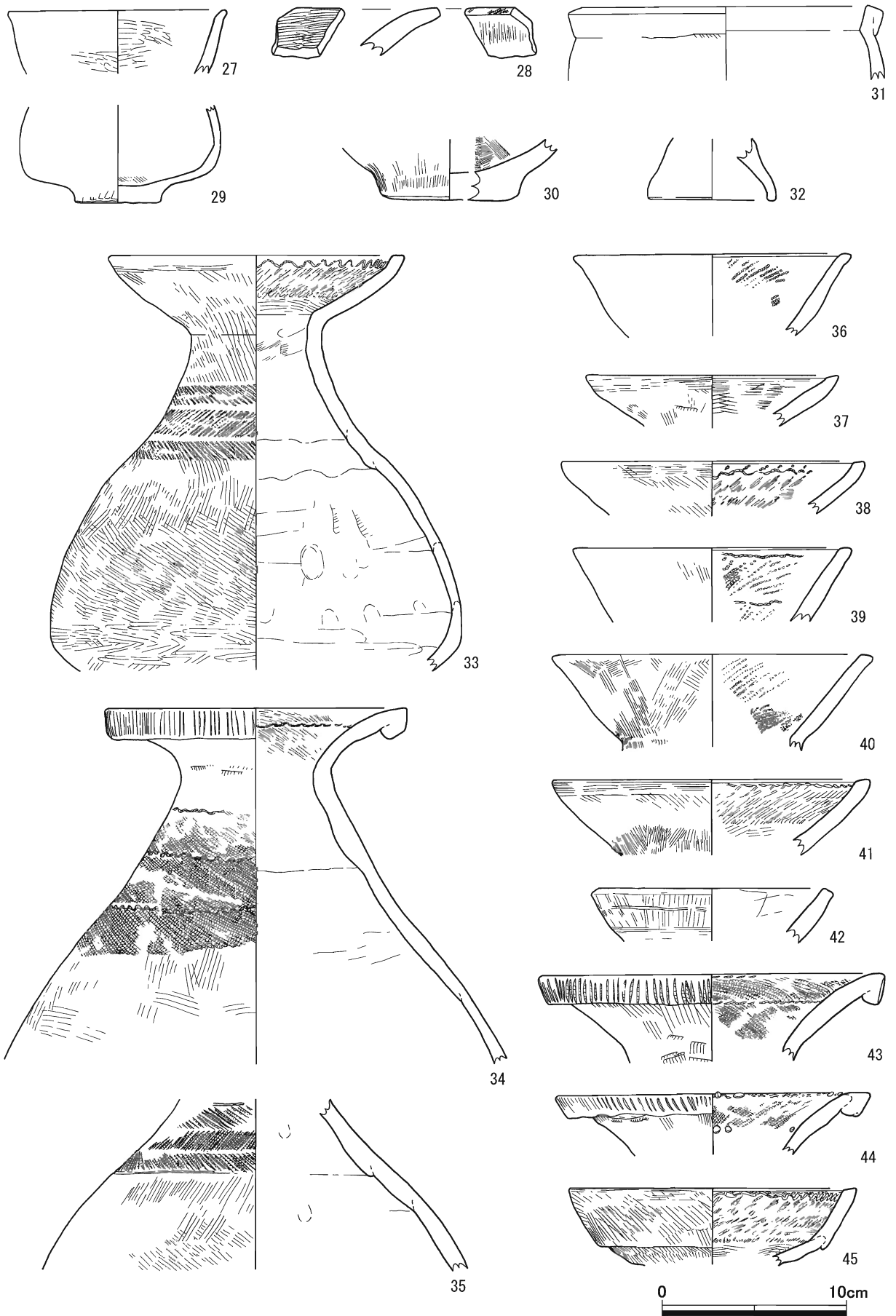


L=47.20m

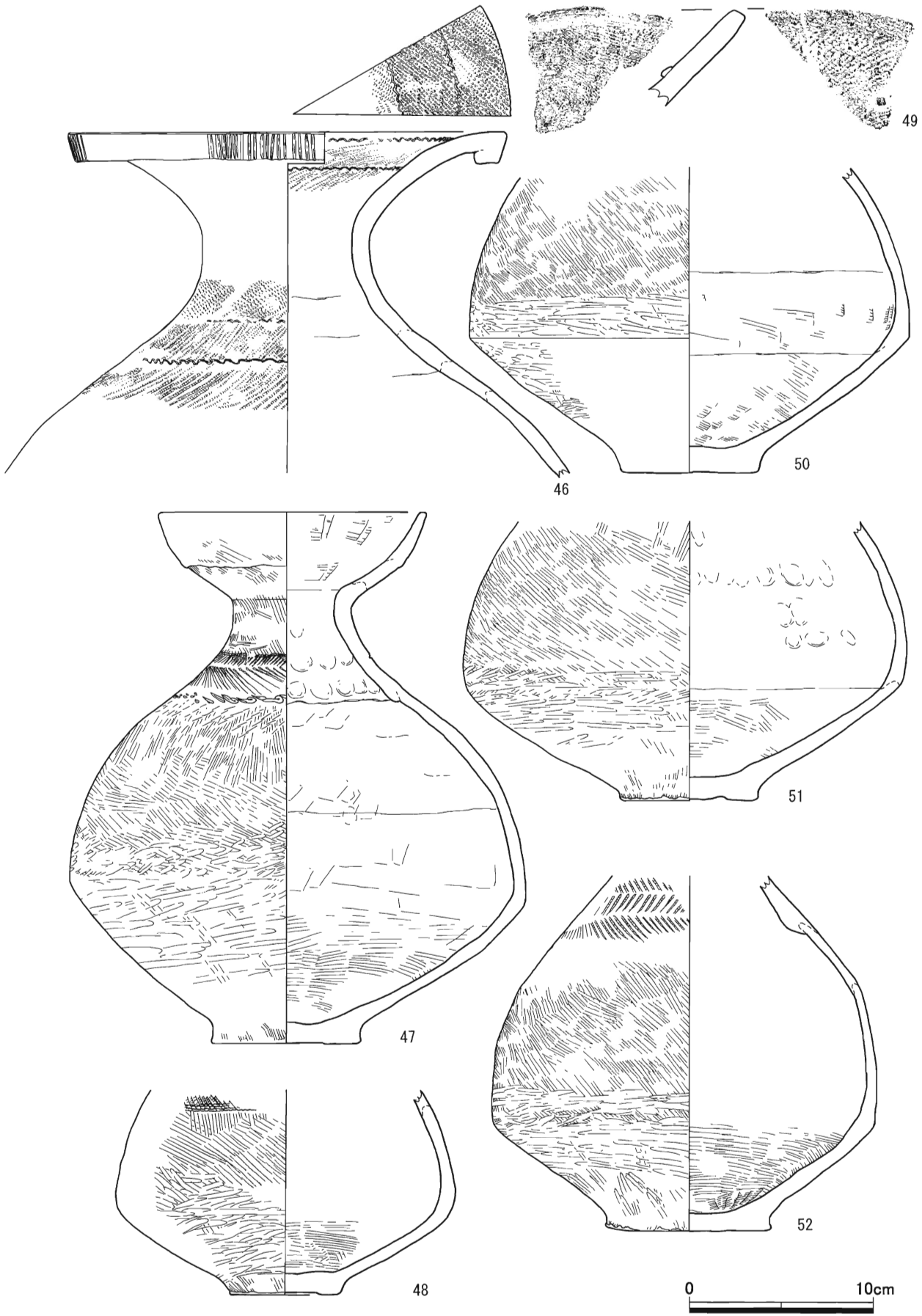
第50図 SK01、SP42、57、94、115実測図



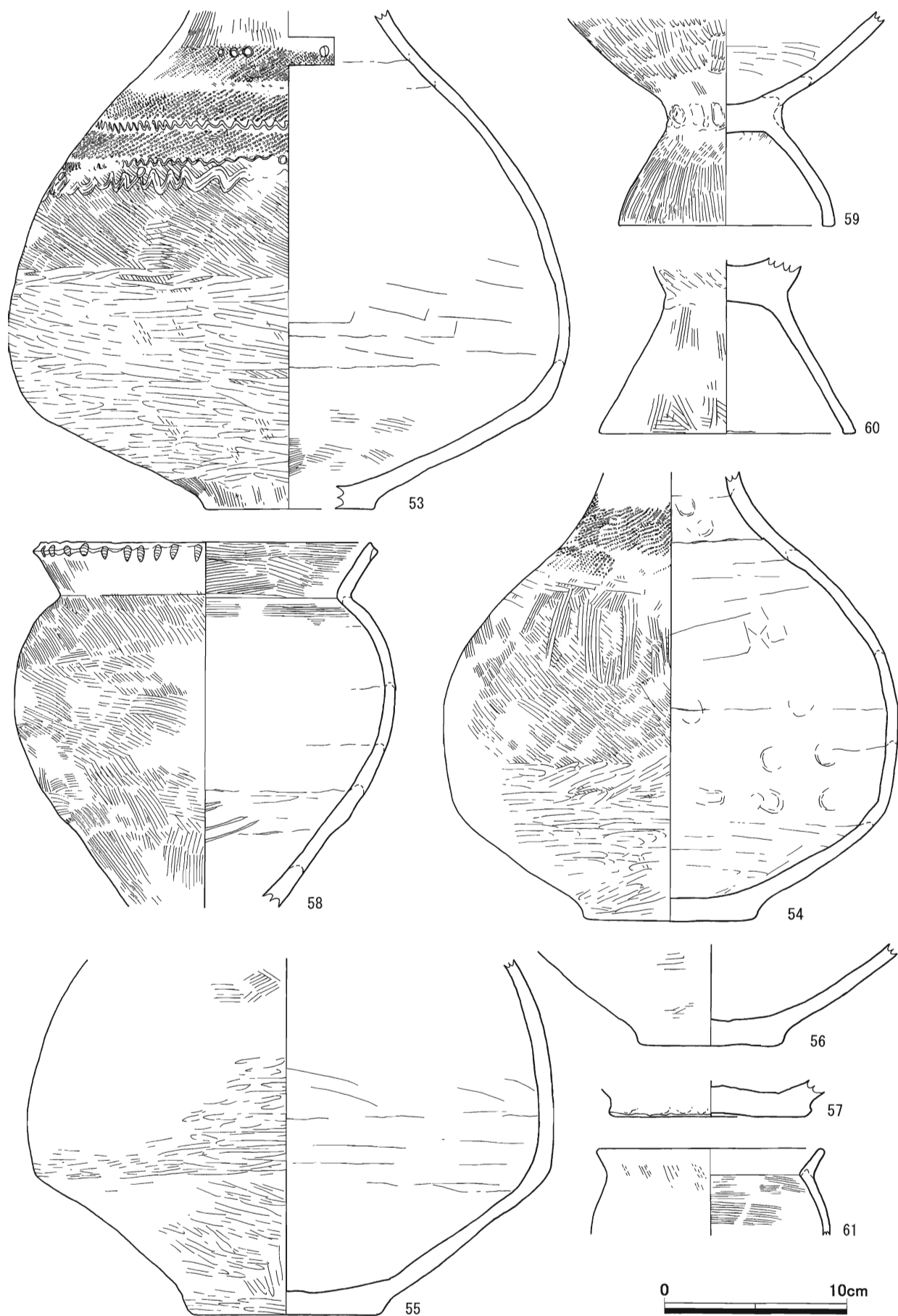
第51図 出土遺物実測図(1)



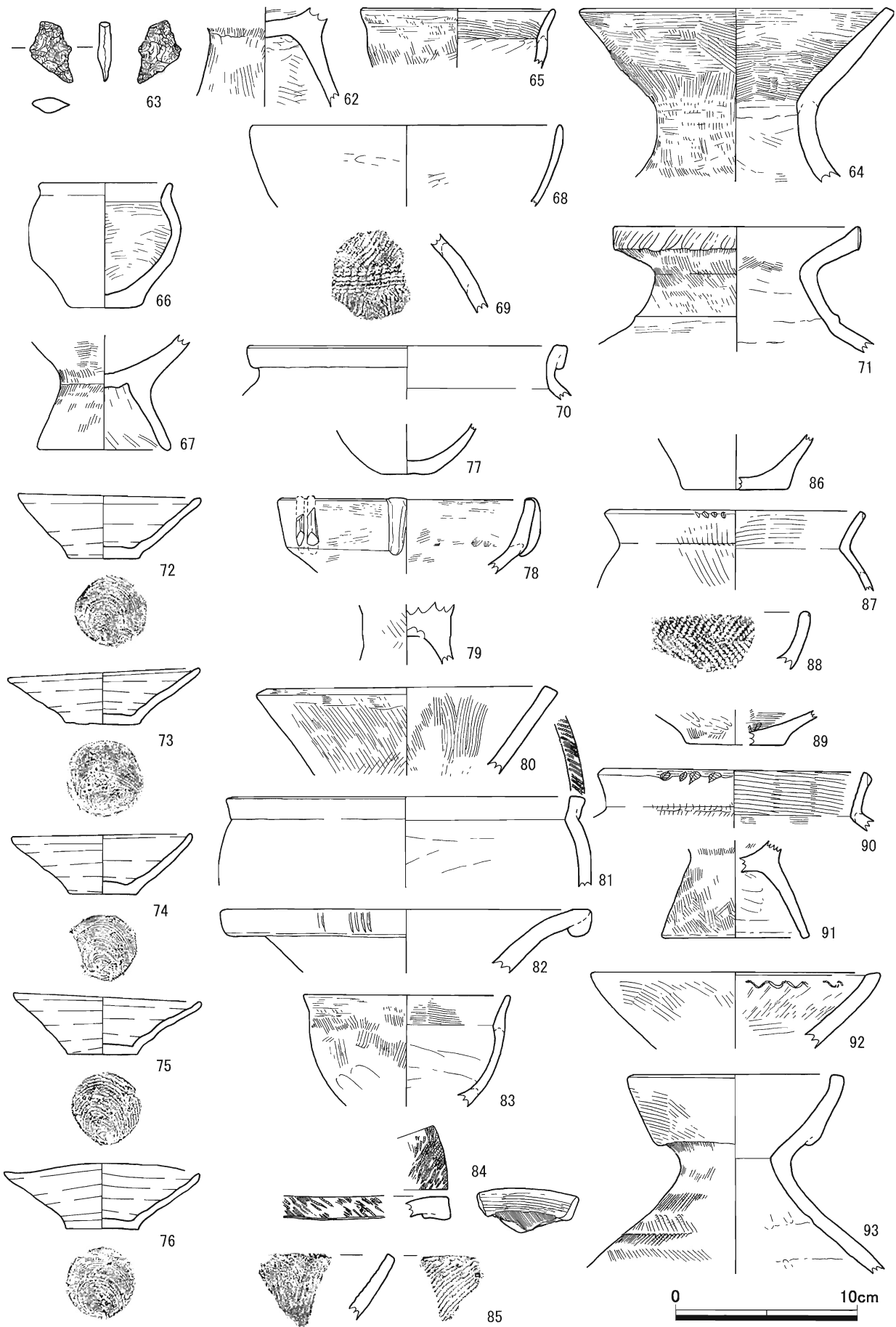
第52図 出土遺物実測図(2)



第53図 出土遺物実測図(3)



第54图 出土遺物実測図(4)



第55図 出土遺物実測図(5)

写真図版



幡鎌峯山遺跡遠景（南西から）



幡鎌峯山遺跡 東区・西区完掘

カラー図版2



幡鎌峯山遺跡 遠景（北から）



幡鎌峯山遺跡 中区完掘



吉岡原遺跡第10次 調査区全景（東から）

カラー図版4



高田遺跡第25次 調査区遠景（北西から）



高田遺跡第25次 調査区全景



東区・西区完掘（北西から）



中区完掘（北から）



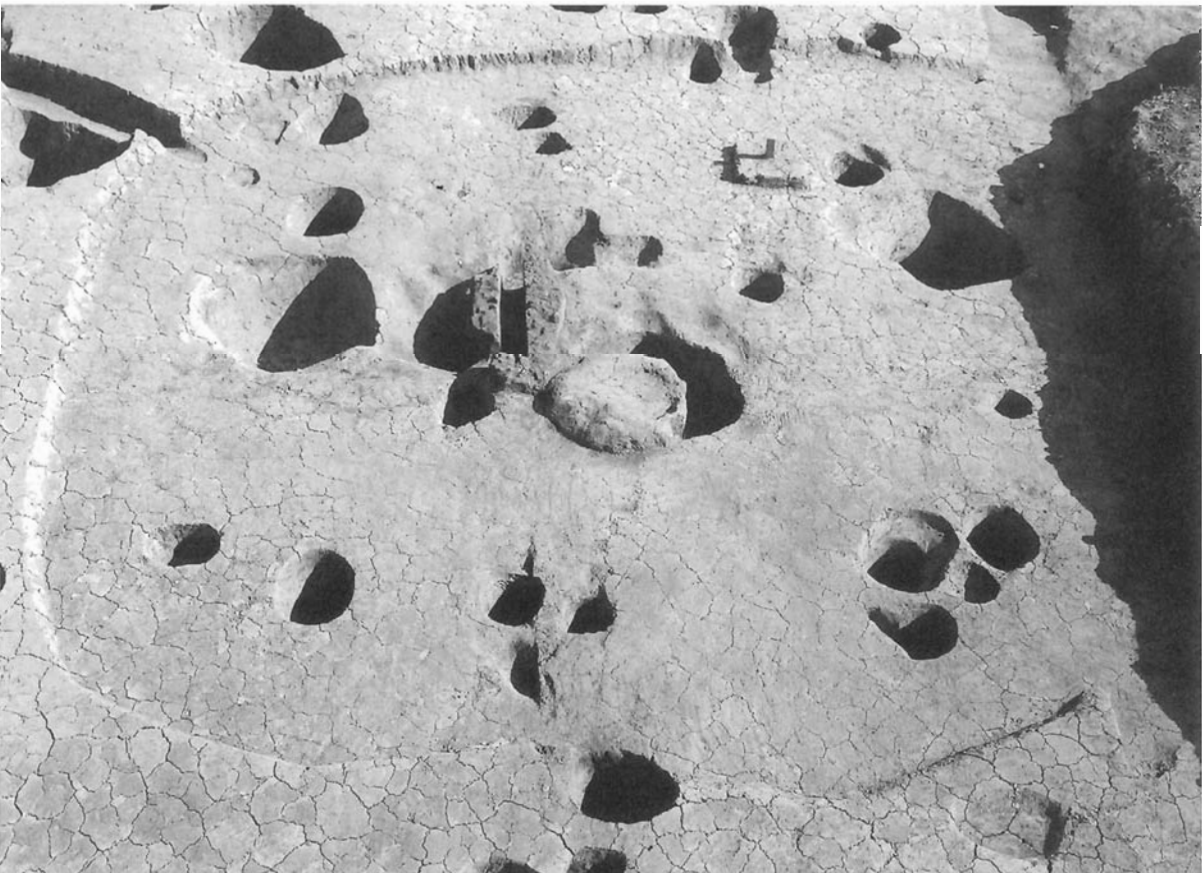
東区完掘（南から）



西区完掘（南から）



SB01貼床検出状態（北から）



SB01（北から）

4



SB02 (東から)



SB02 (南から)



SB03 (西から)



SB04 (北から)

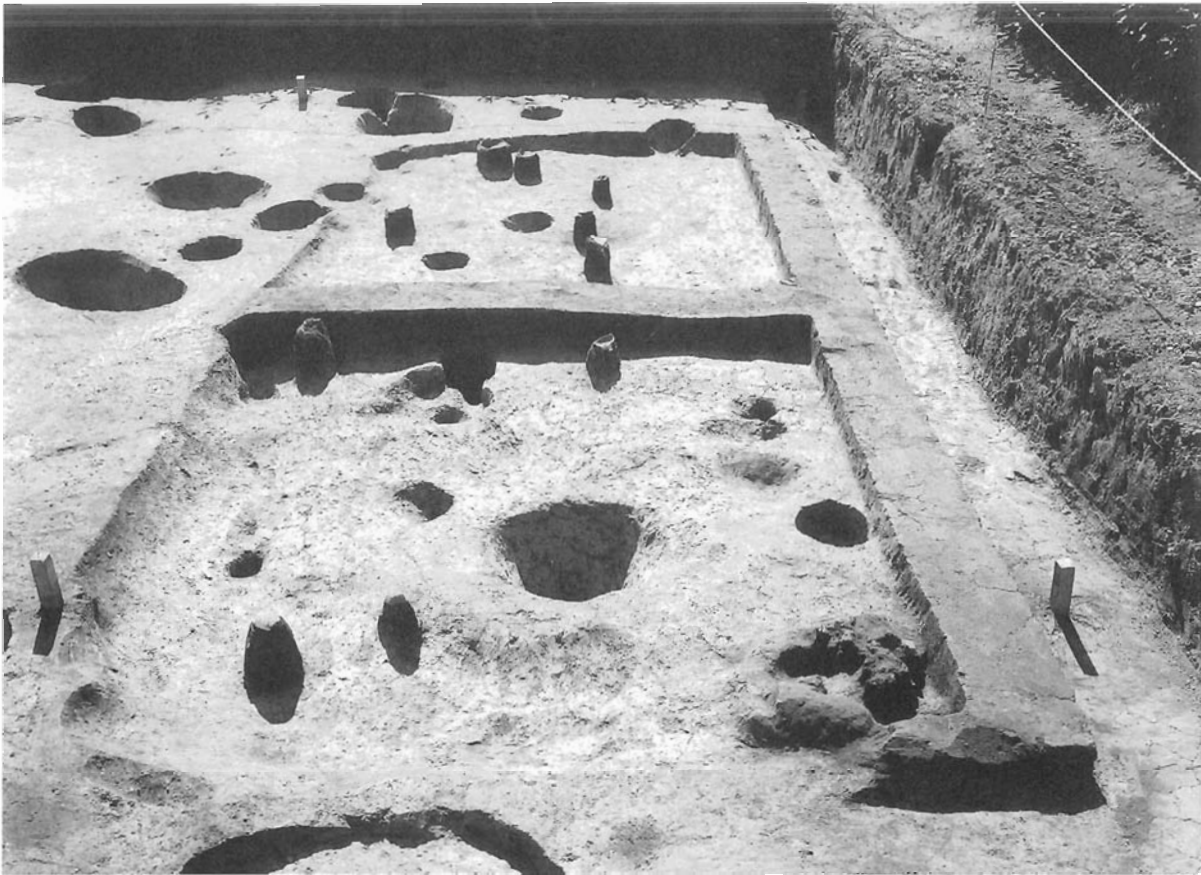
6



SB05 (東から)



SB05、SB07 (北から)



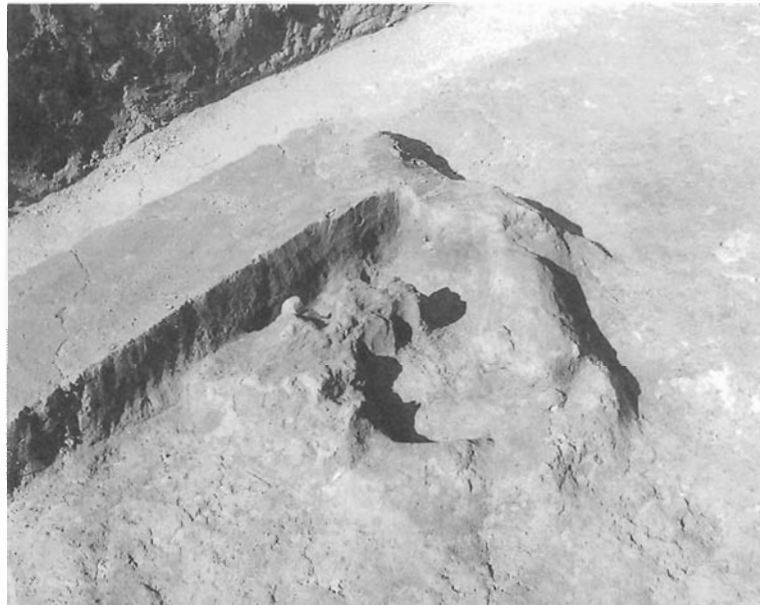
SB06遺物出土状態（東から）



SB06遺物出土状態（南東から）



SB06 (南から)



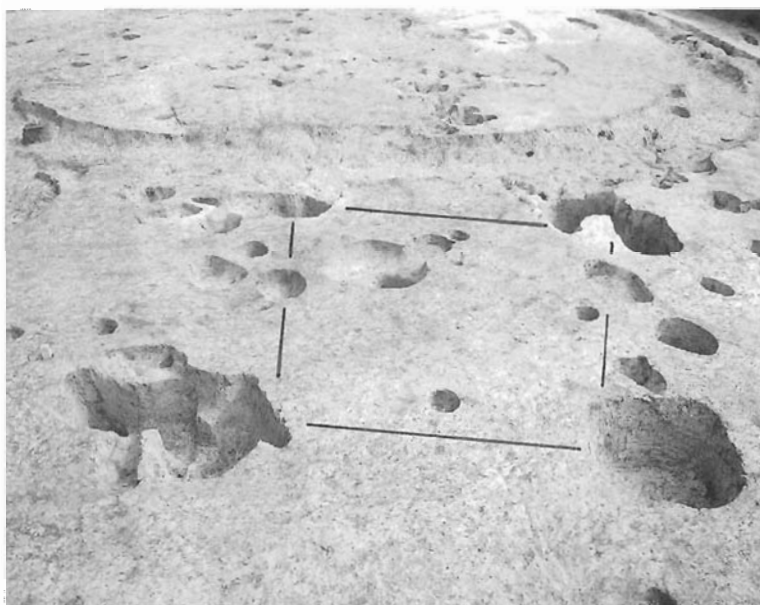
SB06カマド (南から)



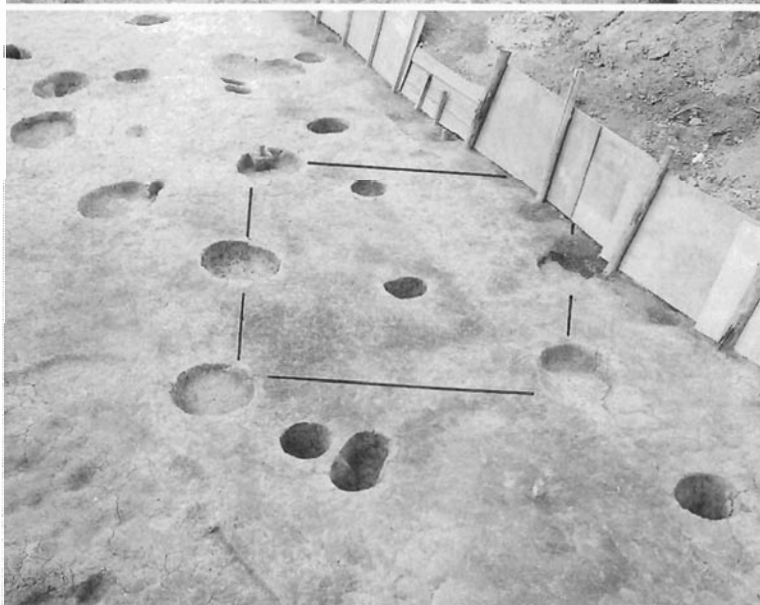
SD04遺物出土状態（南から）



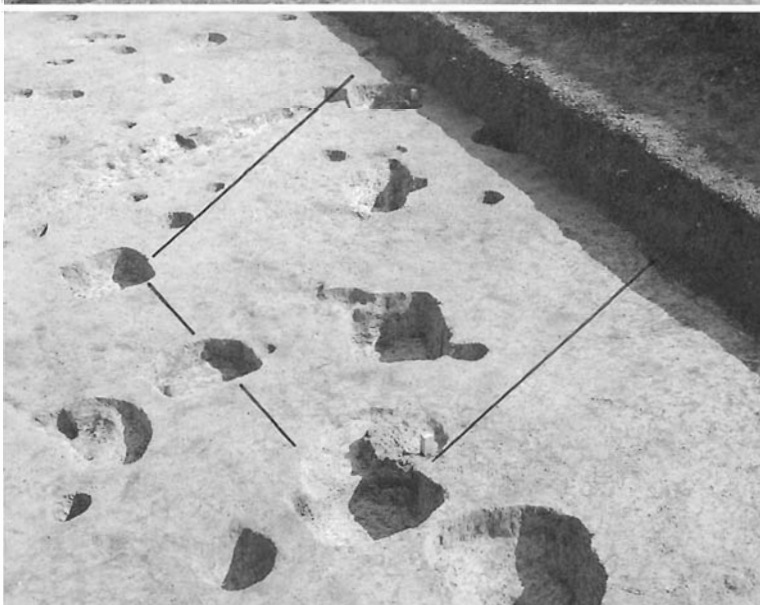
SB07（北から）



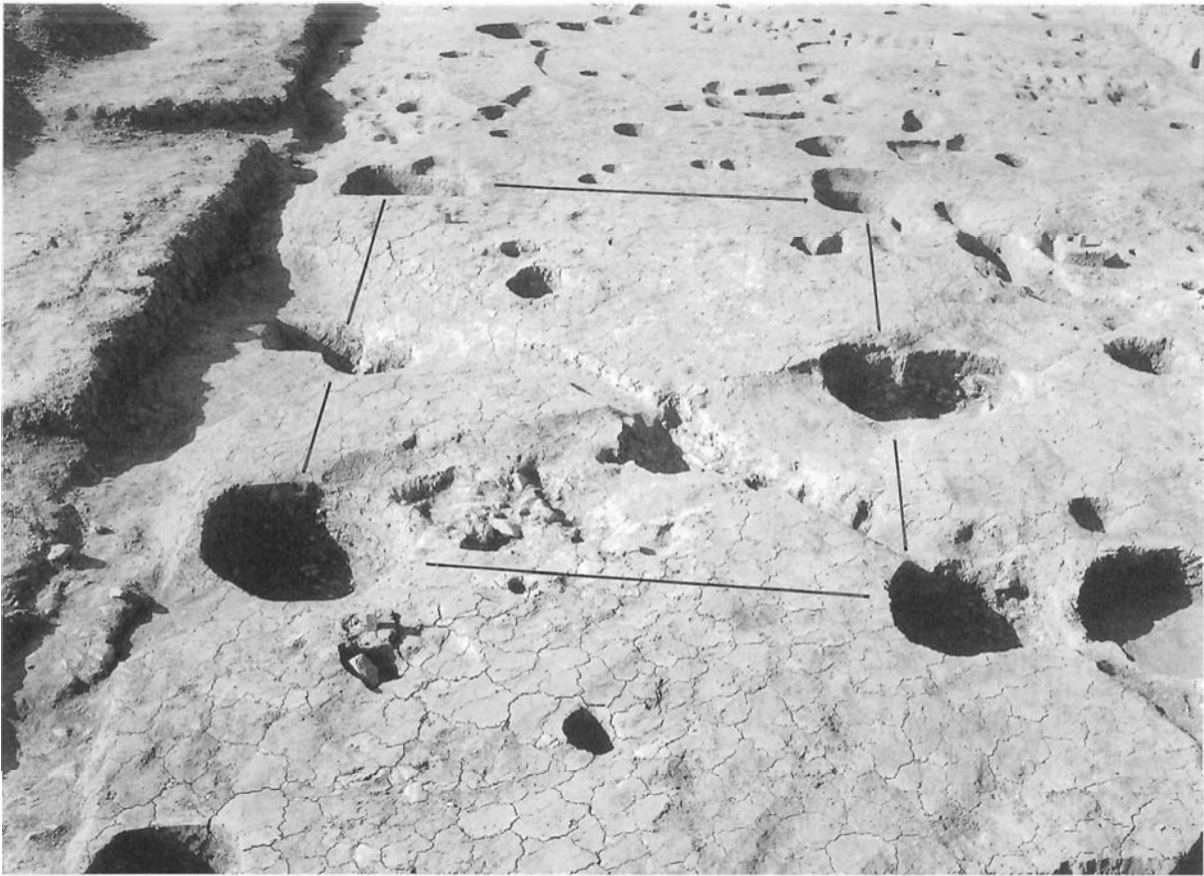
SH01 (北から)



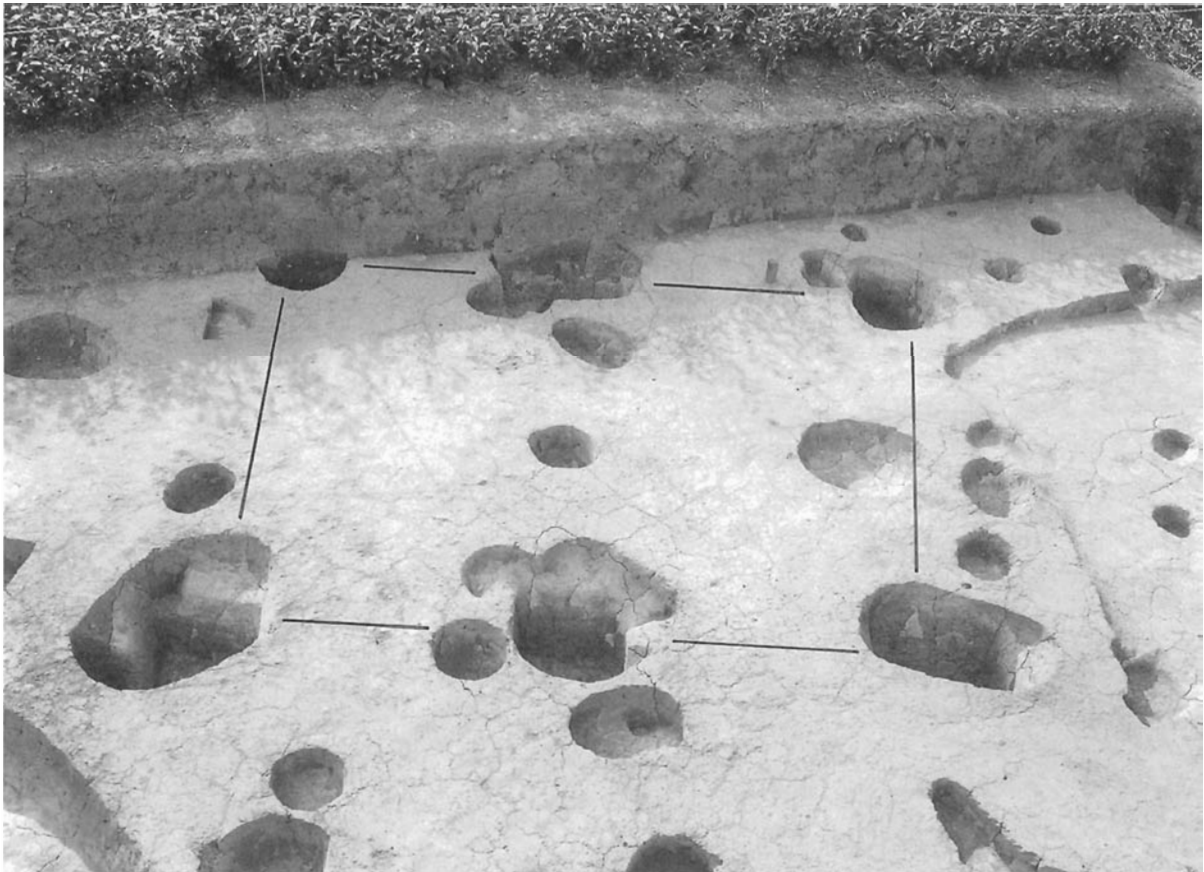
SH02 (北から)



SH09 (北から)



SH03 (南から)



SH04 (東から)



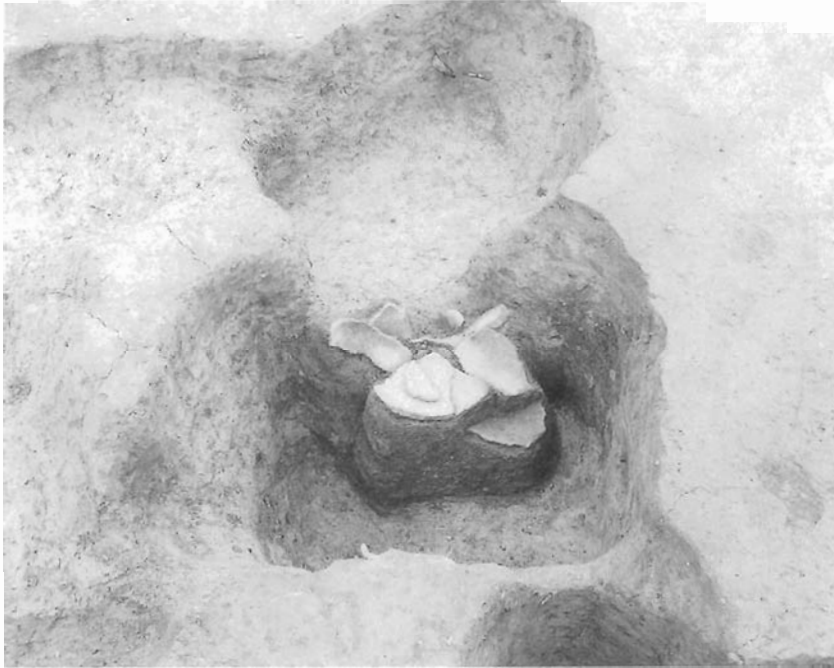
SH05 (北東から)



SH07 (北から)



SH08 (南から)



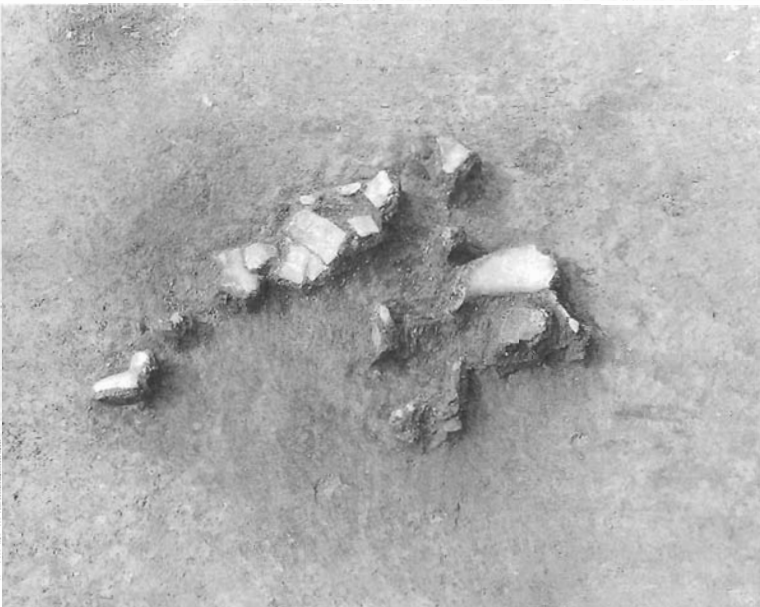
SH08 SP423遺物出土状態 (北から)



SP189遺物出土状態（東から）



SP189（東から）



SP363遺物出土状態（南から）



SP292遺物出土状態（北から）



SP435遺物出土状態（南から）



SP388遺物出土状態（北から）



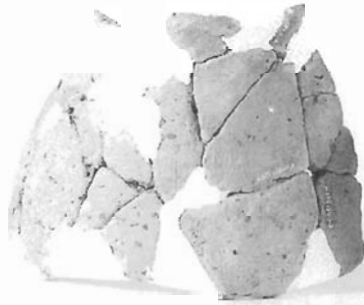
SP520遺物出土状態（東から）



SP507遺物出土状態（北から）



4



5



6



3



21



13



22



18



23

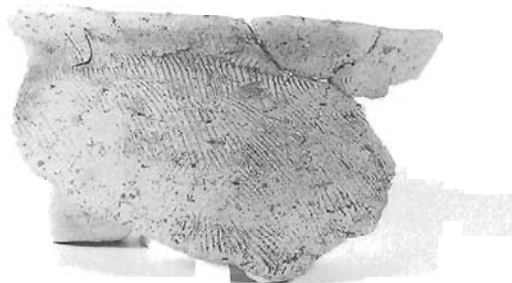


25

18



31



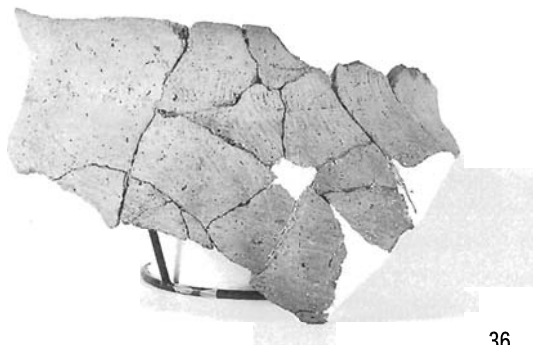
40



32



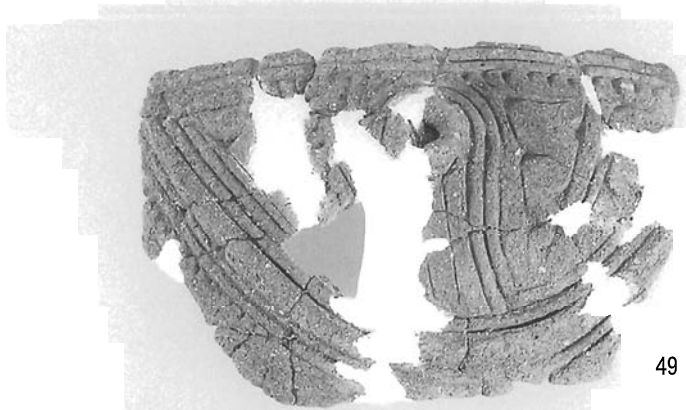
43



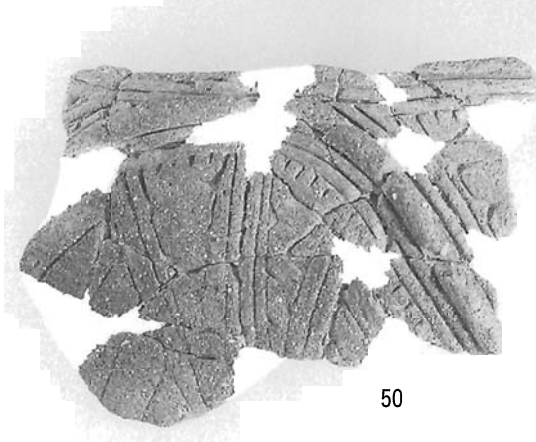
36



37



49



50



51



52



56



57



63



69



79



81



83



80



82



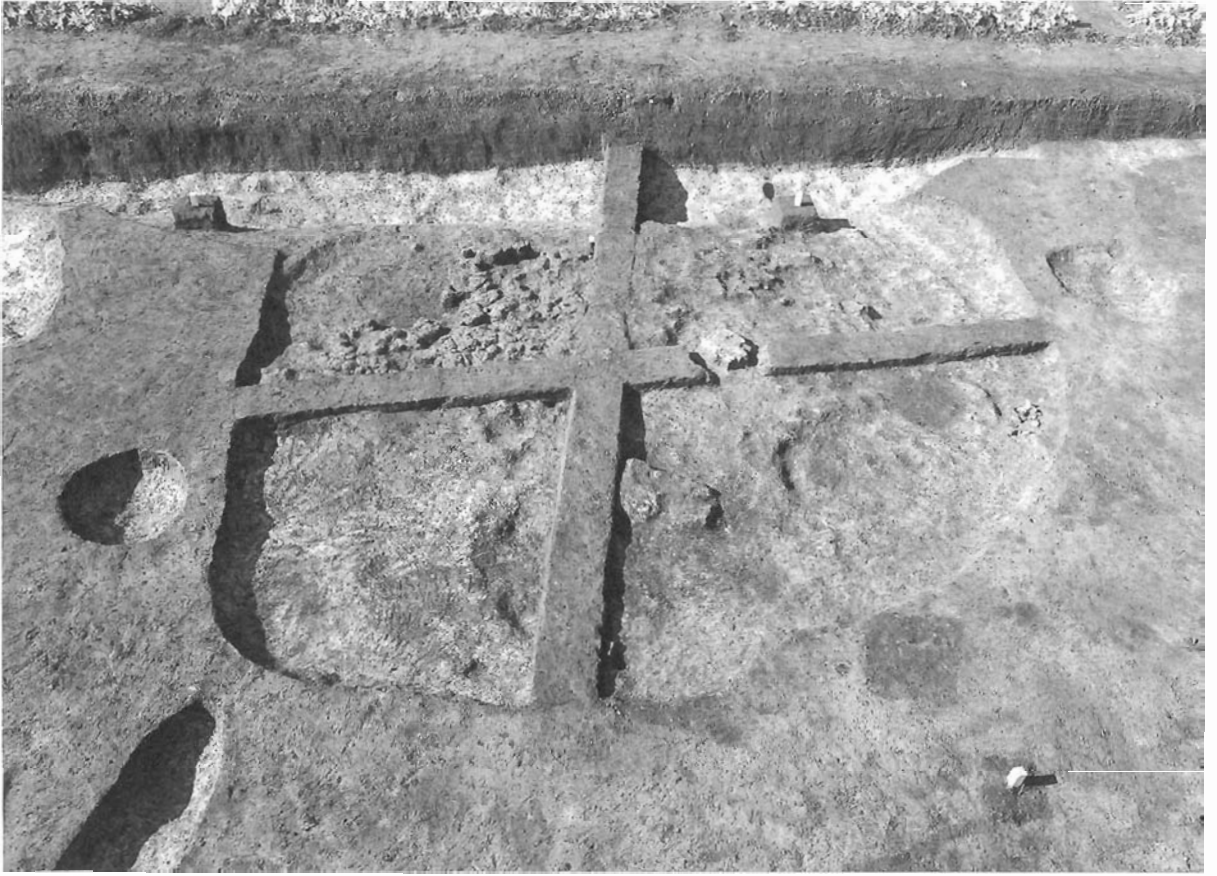
84



調査区北半部



調査区南半部



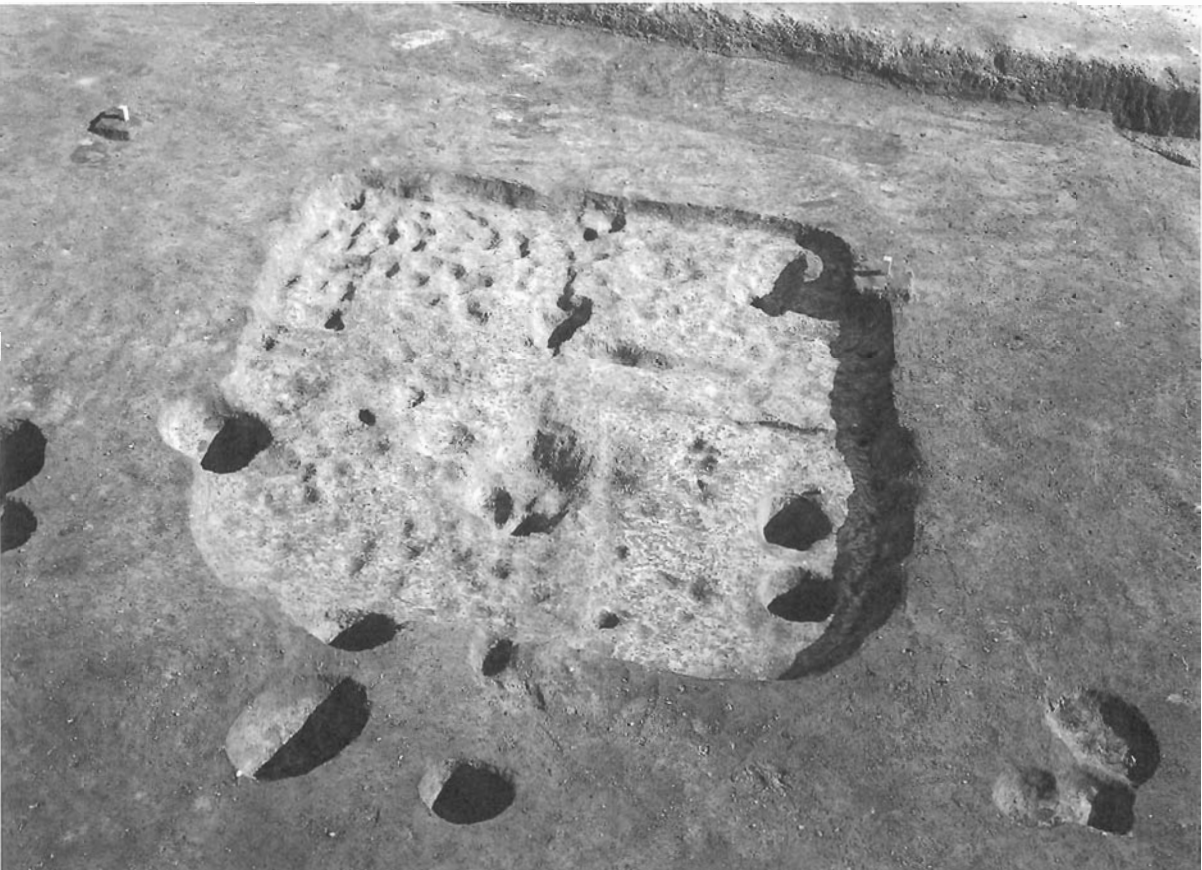
SB01貼床検出状態（東から）



SB01遺物出土状態（東から）



SB01、SD01 (北から)



SB03 (西から)



SB03遺物出土状態（東から）



SB03遺物出土状態（西から）



SB04、05貼床検出状態（西から）



SB04、05（北から）



SB06~09貼床検出状態（北から）



SB09遺物出土状態（北から）



SB04~09 (西から)



SB06、07、10 (東から)



SB07、08 (西から)



SB10 (西から)



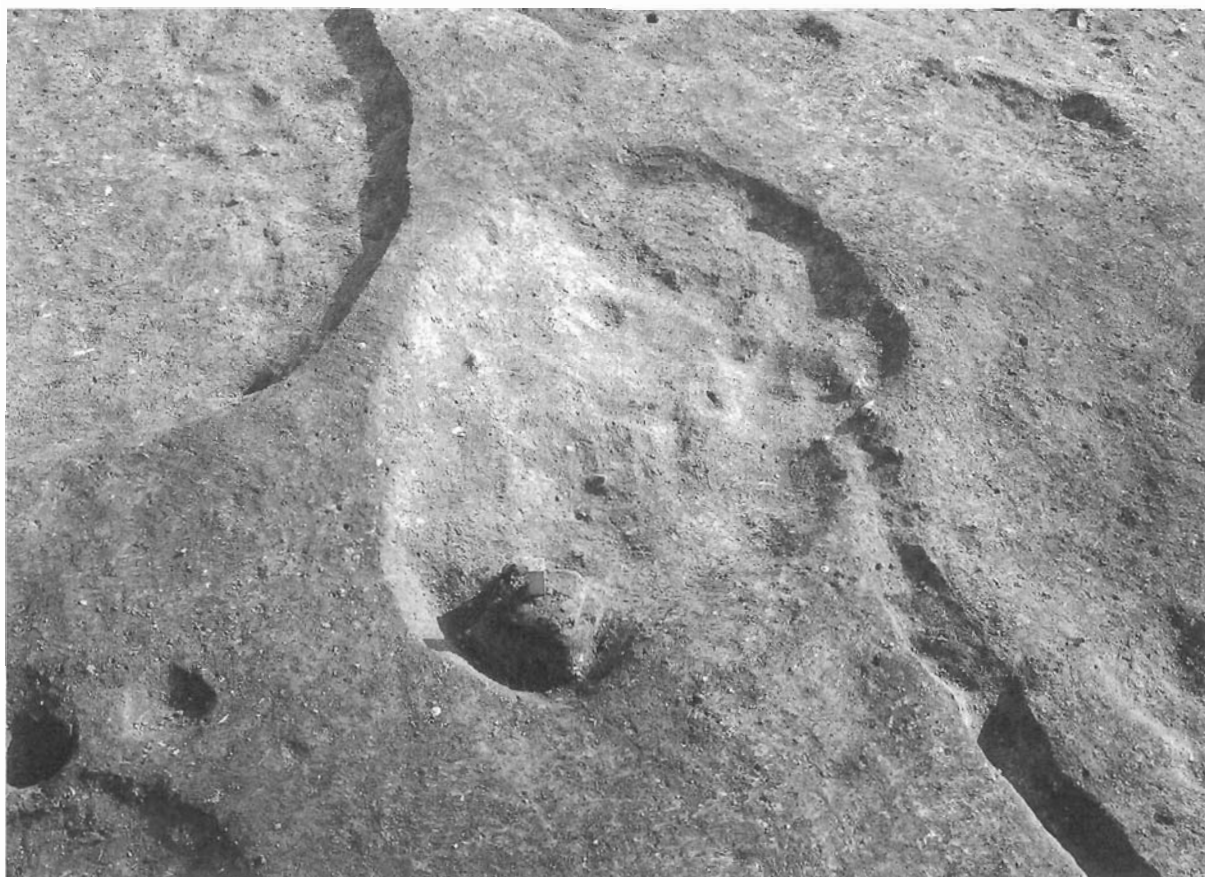
SB12 (西から)



SB13 (北から)



SK03遺物出土状態（北から）



SK03（西から）



3



8



5



9



10



17



11



22



12



23



20



30



21



31



32



47



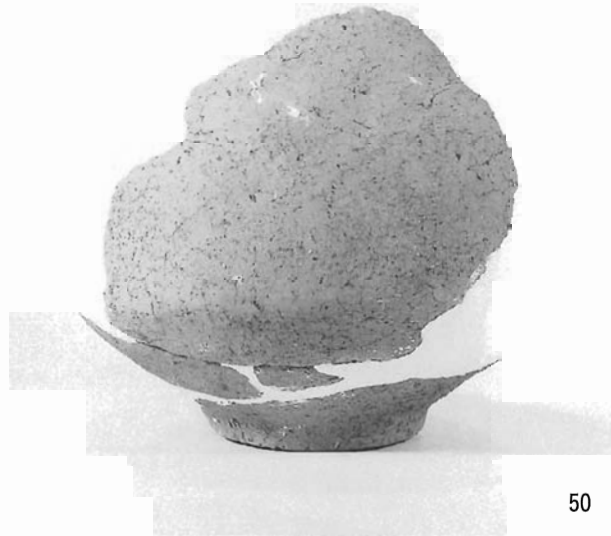
33



49



43



50



46

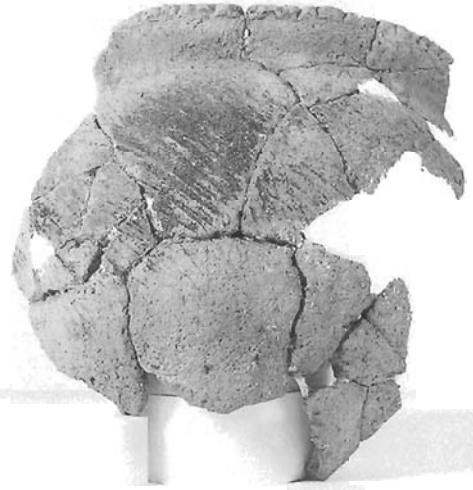


51

34



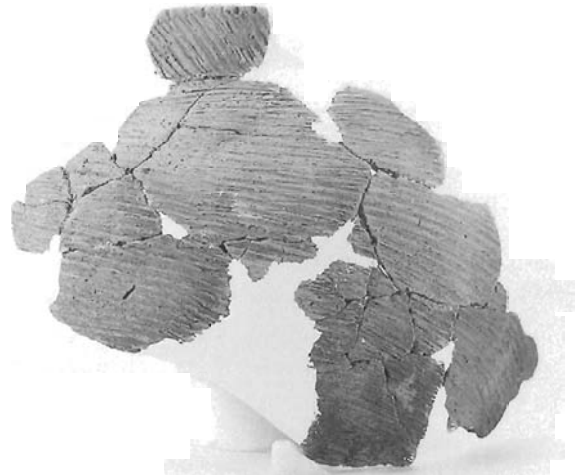
60



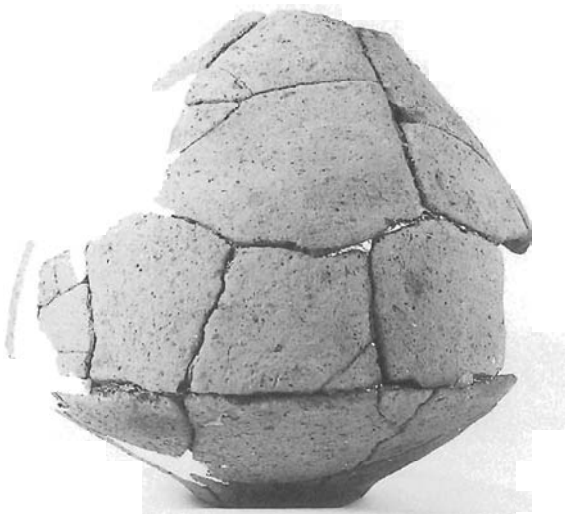
69



62



70



63



77



79



85



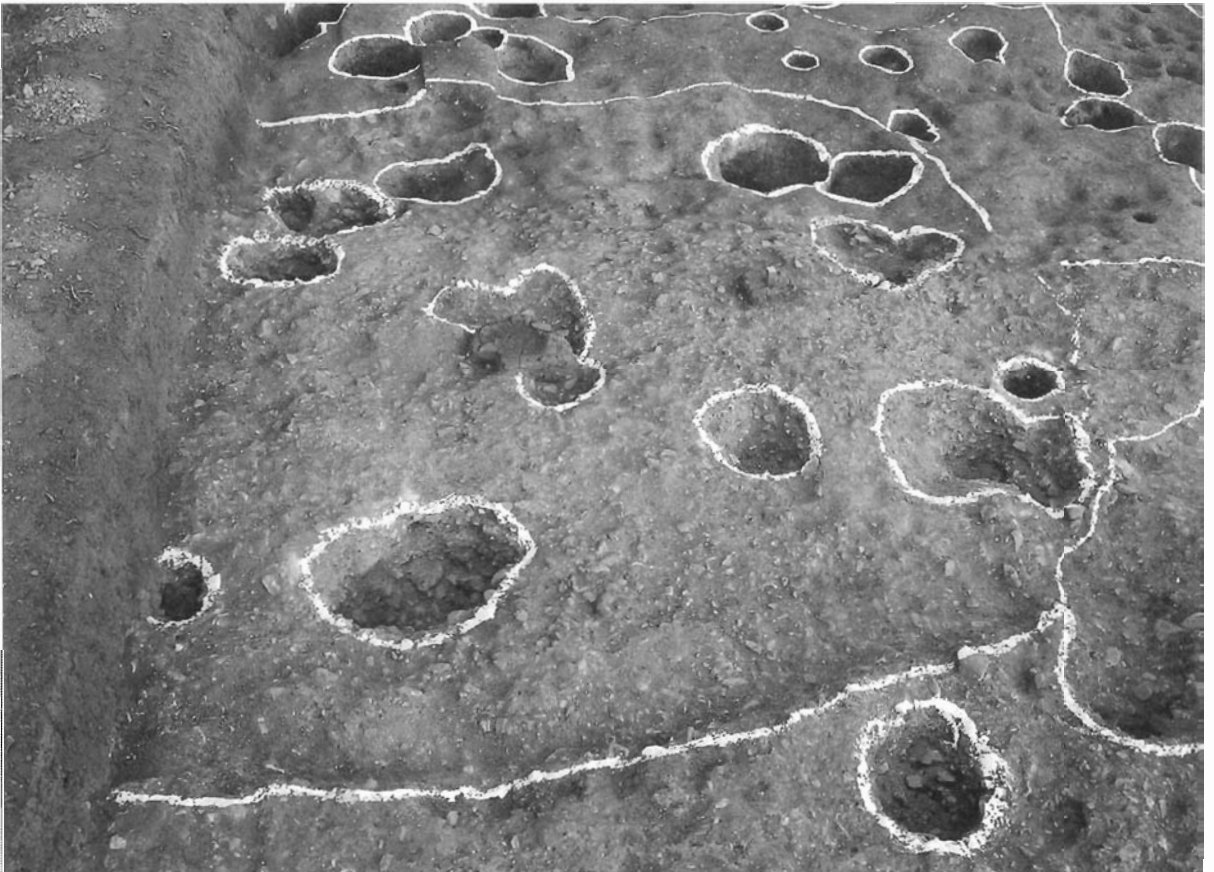
89



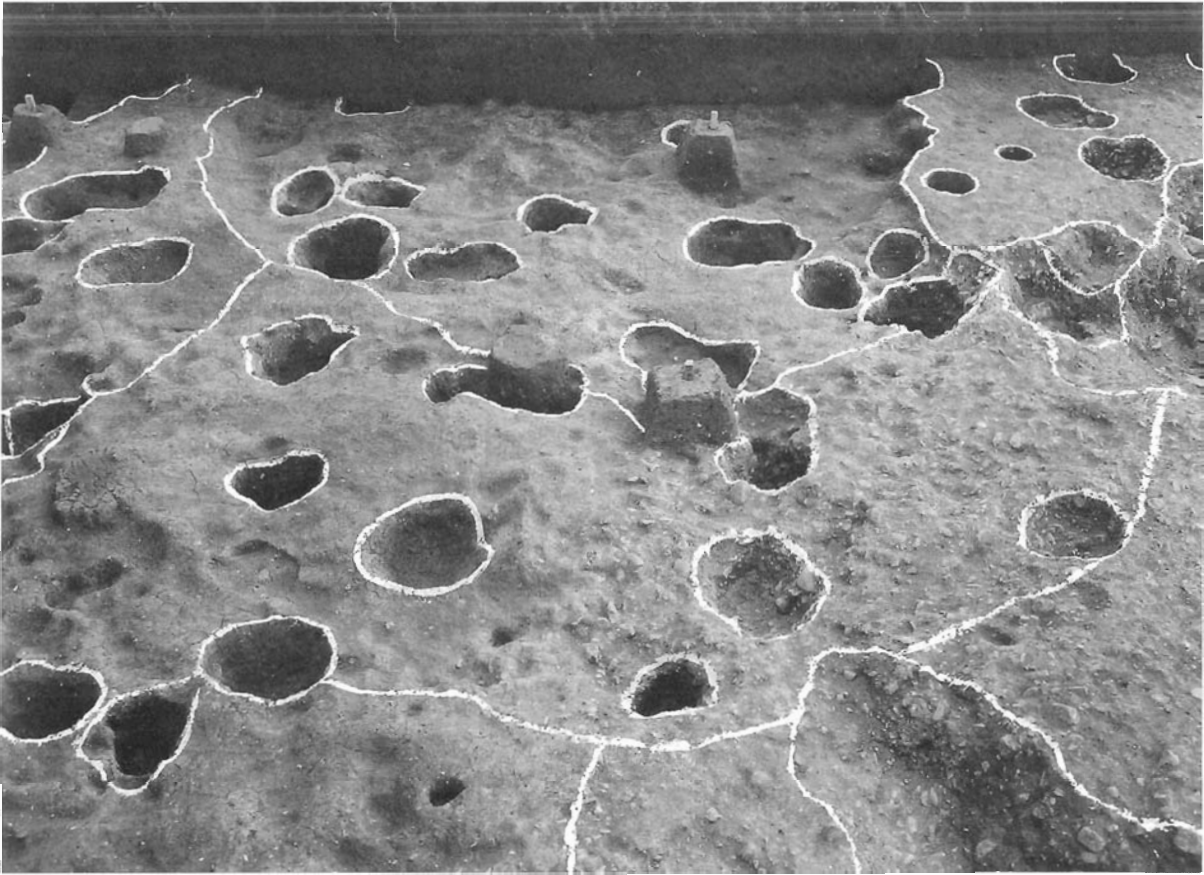
95



全景（東から）



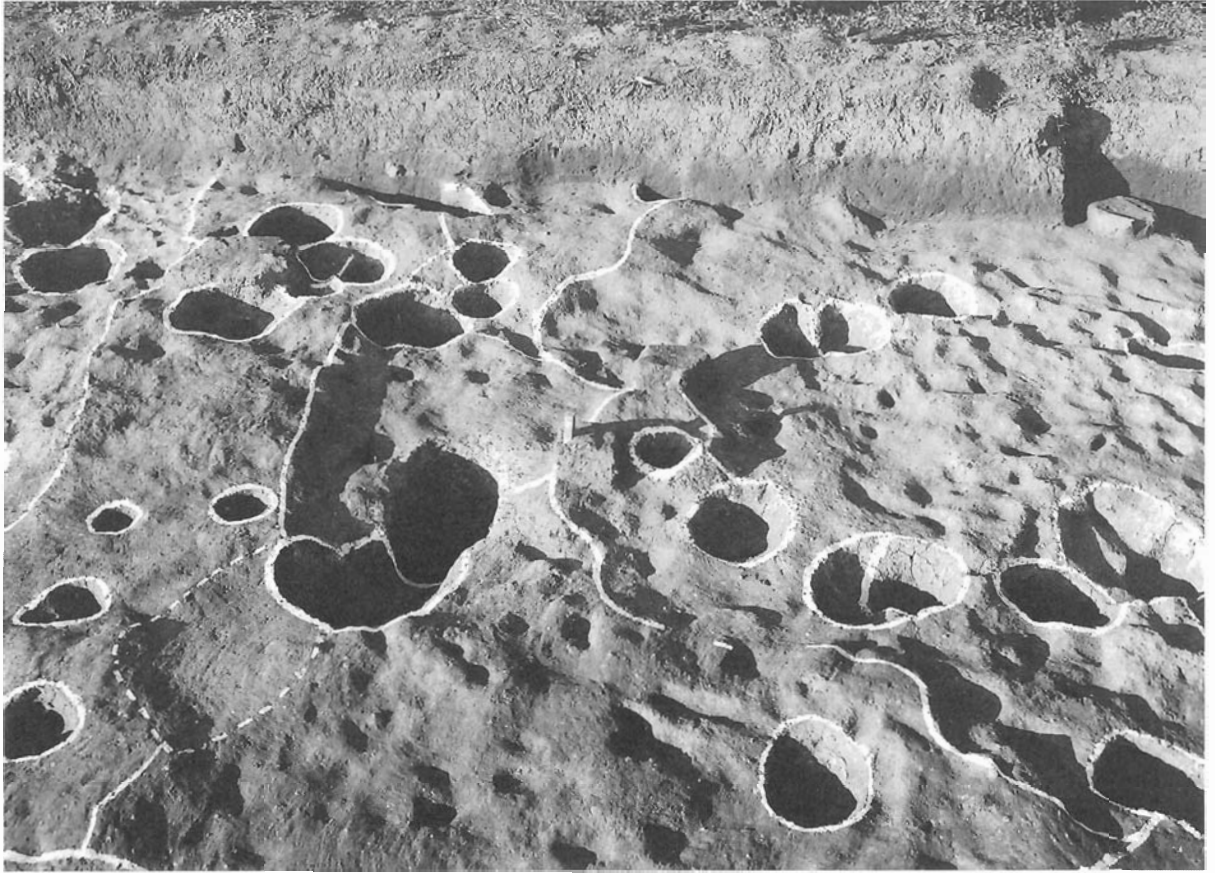
SH01（西から）



SH03、04、05 (北から)



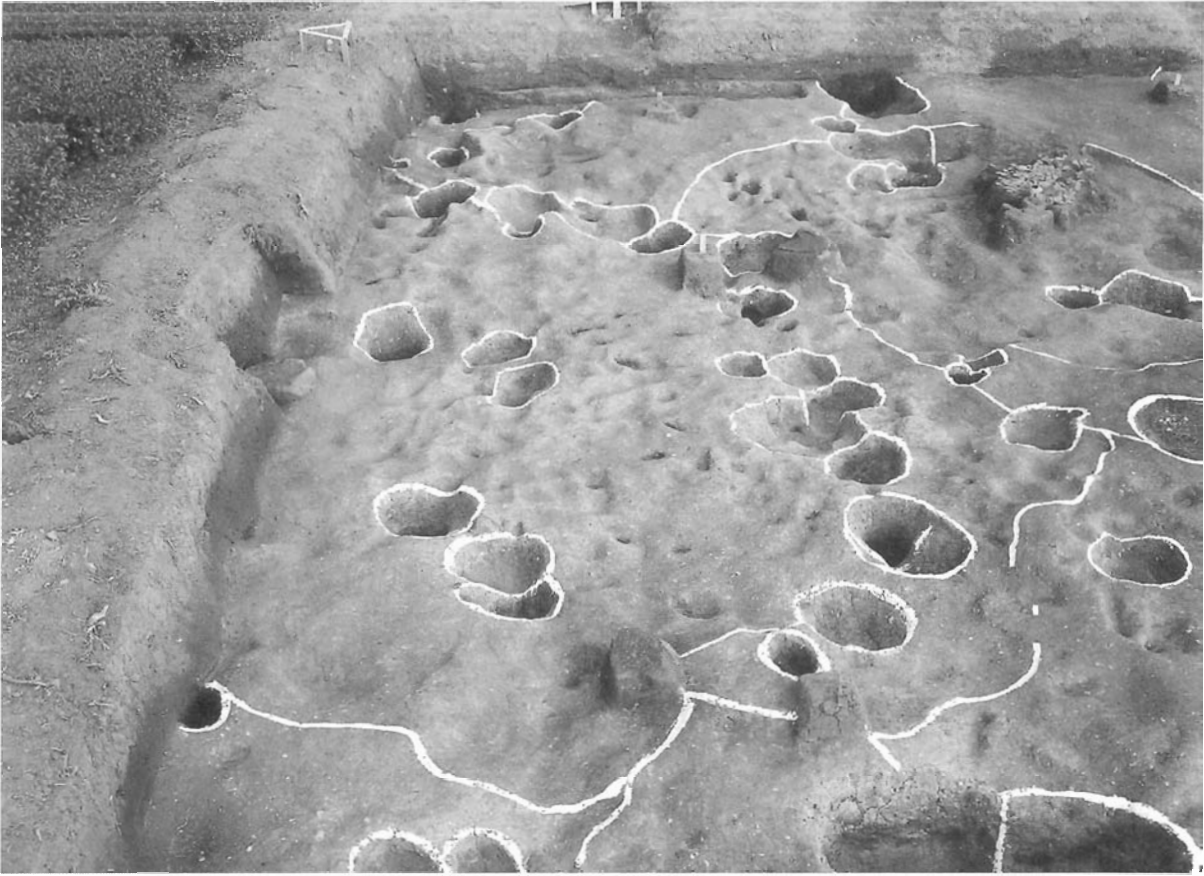
SH06 (南から)



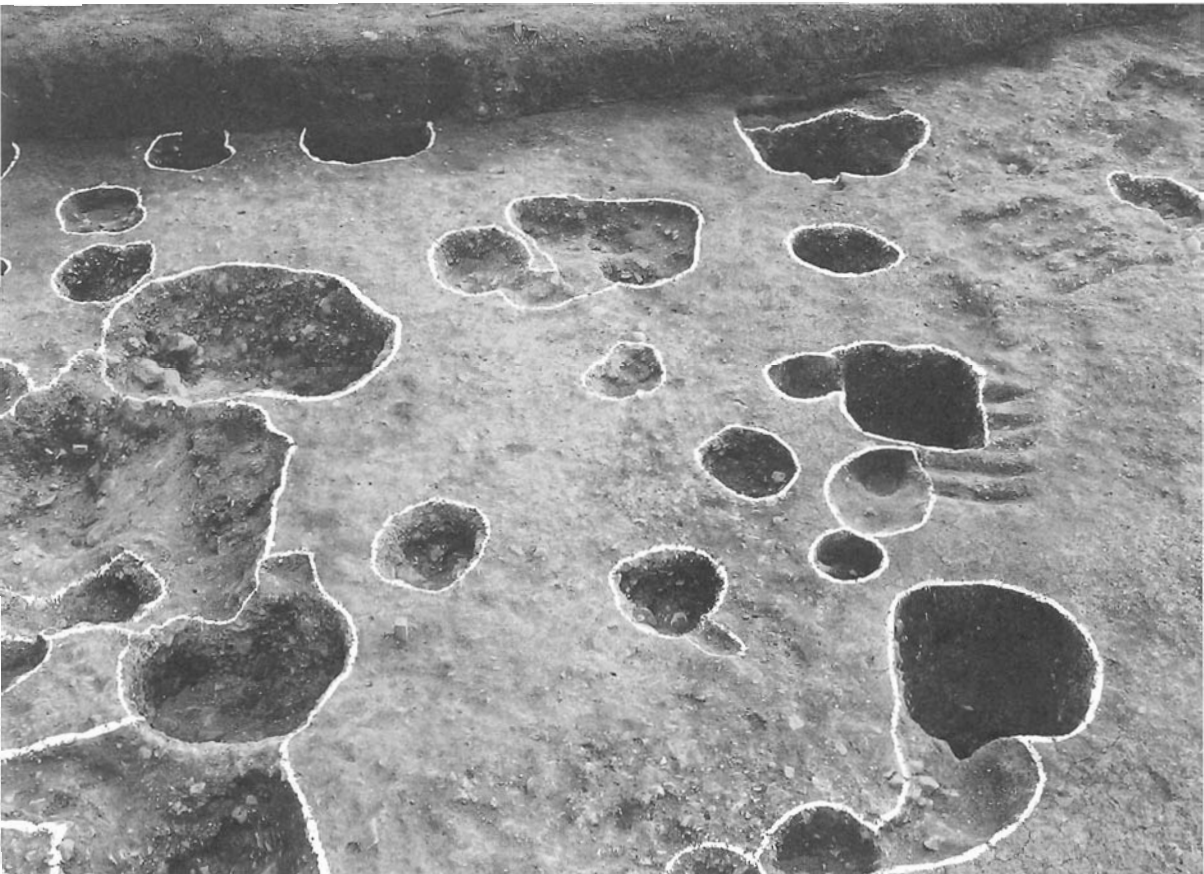
SH07 (北から)



SH09遺物出土状態 (北から)



SH08、09 (西から)



SB01 (北から)



SP42遺物出土状態（南から）



SP69遺物出土状態（北から）



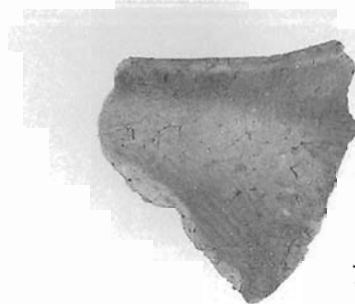
SK01遺物出土状態（西から）



5



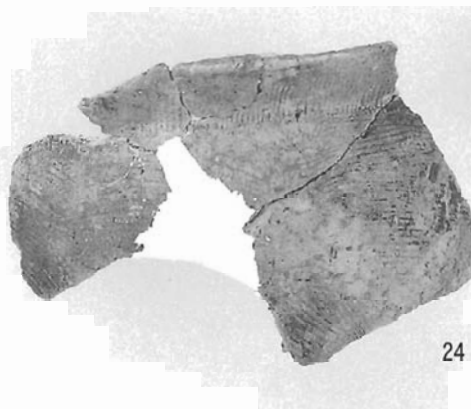
6



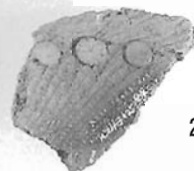
7



20



24



22



8



11



14



15



16



46



33



47



34



48



51



54



52



55



53



58

44



59



67



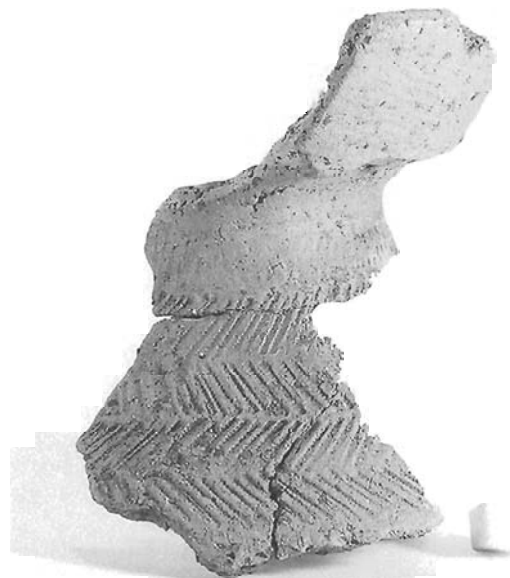
60



71



64



93



66

報告書抄録

ふりがな	はたかまみねやまいせき よしおかばらいせきだい10じ たかだいせきだい25じ							
書名	幡鎌峯山遺跡 吉岡原遺跡第10次 高田遺跡第25次							
副書名	発掘調査報告書							
編著者名	井村広巳							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたかまみねやまいせき 幡鎌峯山遺跡	しずおかけんかけがわし はたかま 静岡県掛川市幡鎌	22213	K-395	34度 48分 52秒	137度 57分 45秒	2010年5月 ～ 2010年10月	1,115㎡	茶園改植
よしおかはらいせきだい10じ 吉岡原遺跡第10次	しずおかけんかけがわし よしおか 静岡県掛川市吉岡		K-234	34度 47分 39秒	137度 56分 51秒	2010年11月 ～ 2010年12月	630㎡	茶園改植
たかだいせきだい25じ 高田遺跡第25次	しずおかけんかけがわし よしおか 静岡県掛川市吉岡		K-243	34度 47分 37秒	137度 57分 4秒	2010年8月 ～ 2010年11月	600㎡	茶園改植
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
幡鎌峯山遺跡	集落跡	縄文時代	小穴		土器、石器			
		弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡		土器			
		古墳時代後期	竪穴住居跡		須恵器、鉄鏃			
吉岡原遺跡第10次	集落跡	弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡		土器			
高田遺跡第25次	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡		土器			
		近世	土坑墓		かわらけ			
要約	<p>3遺跡は、原野谷川流域の河岸段丘上に位置する。</p> <p>幡鎌峯山遺跡は、この地区では初めての発掘調査である。縄文時代中期前葉、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡、古墳時代後期の集落であることが明らかとなった。</p> <p>吉岡原遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の集落である。今回出土したSB03出土土器は、古墳時代前期の一括の好資料である。</p> <p>高田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落である。</p>							

**幡鎌峯山遺跡
吉岡原遺跡第10次
高田遺跡第25次**

発掘調査報告書

2013年 3月29日

編集・発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
TEL 0537-21-1158
印刷 松本印刷株式会社 袋井営業所
静岡県袋井市新屋4丁目5-2
TEL 0538-43-6300